

ホライズン

西風 そら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西風の妖精カノンは、記憶の飛んでしまったお母さんと二人暮らし。

臆病で、周囲に対して諦めモードだった彼が、ひよんな事からお父さん捜しの旅へ。

外に飛び出して初めて知った事、様々な出逢いが、男の子を成長させて行く・・・

全31話 約11万文字で完結

目次

ひとつめのおはなし

ホライズン・I | 1

ホライズン・II | 11

ホライズン・III | 19

ホライズン・IV | 25

ホライズン・V | 33

ホライズン・VI | 40

ホライズン・VII | 48

ホライズン・VIII | 56

ホライズン・IX | 64

ホライズン・X | 69

ホライズン・XI | 76

ふたつめのおはなし

夏蕾（なつつぼみ）・I | 81

夏蕾・II | 86

夏蕾・III | 95

夏蕾・IV | 103

夏蕾・V | 109

夏蕾・VI | 116

夏蕾・VII | 121

夏蕾・VIII | 127

みつつめのおはなし

夏巡（なつめぐる）・I | 130

夏巡・II | 138

よつつめのおはなし

夏紫 (なつむらさき) ・ I

夏紫 ・ II

夏紫 ・ III

夏紫 ・ IV

夏紫 ・ V

夏紫 ・ VI

いつつめのおはなし

天人唐草 ・ I

天人唐草 ・ II

おまけのおはなし

とうん とうん ・ I

とうん とうん ・ II

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

144

152

157

164

172

176

181

189

196

203

ひとつめのおはなし ホライズン・I

筋雲美しい砂丘の空に、二頭の馬影が螺旋を描く。

やがて軌道は地上に近付き、砂煙を上げて着地する。

「やつほお、今日は僕の勝ち！ お前の馬の方が先に砂に足を着いた！」

青毛の馬上で、赤いバンダナの少年が片手を突き上げた。

青い巻き毛に、健やかに伸びた飴色の手足。西風の妖精の子供だ。

この砂漠の地には、人間の視覚に入らない空間に、多種多様な部族が住む。

西風の妖精もその一つで、規模は小さいが太古の血族。

特殊な馬を養い、空を駆ける術を使うのは彼らだけの特徴だ。

「ん——？ 僕、結構粘ったんだけれどな」

パロミノ馬に跨がった少年が、遠慮がちに反論した。

こちらの子供も同じ西風の子だが、少し色素が薄い。青い髪の毛の表面には薄い膜のように銀が掛かっている。

「お——い、ファー！」

先のバンダナの子供が、砂山の向こうへ声を掛けた。

小さな駱駝が砂山を越えて、テクテクと追い付いて来た。ひとつコブの背中には、ビイドロみみたいな真ん丸い目のそばかすの女の子が、ちんまりと座っている。

「見ていたよな、パロミノの方が先だったろ」

女の子は勿体ぶって指をこめかみに当てた。

「ぎあんねんながら、お兄ちゃんの方が断然早く落っこちたわ。それにカノンの描いた弧は、とっても綺麗だった！」

「何だよお前、カノンに好かれないからってデタラメ言うな」

「きやあん、ファーは公明正大よ。助けて、カノン」

女の子は駱駝を急かして、青銀の男の子の後ろへ回った。

「レン、妹を苛めるなよ。まあ今のは二人とも結構いい風に乗れたよね」

カノンと呼ばれた少年は、指をヒュツと吹いて小さなつむじ風を作った。

フワリと持ち上がる前髪の下の明るいオレンジの瞳を、後ろのファーはトロンと見つめている。

「分かんないよ、そんなの。僕、お前みたいに、風を流せる長様の息子じゃないモン」

レンと呼ばれた少年は、拗ねた感じで口を尖らせた。

「それを言うのなら、君のお父さんだって、里で一番飛ぶのが上手いじゃないか」

「まあね・・・ じゃ今のは引き分けって事でいいや」

少年が濁して話題を変えようとしたのに、妹のファーが口を挟んで来た。

「カノンのお父さんだって、きつと凄かったよ。父さまが外交官になる前の、ちよーゆーしゅーな外交官で、毎日砂漠の色んな国を飛び回っていたんでしょ?」

「んん、皆そう言うよね……」

カノンは表情が沈んだ。

レンは、(このバカ)って顔で妹に睨み付ける。カノンに父親の話題は、ご法度なのに。

上空の筋雲がサアツとほぐれた。

「あっー!」

目のいいファーが空の一点を指差し、少年二人も見上げた。

黒い影がみるみる近付いて騎馬の形となる。

レンの青毛より一回り大きい、見事な鞍(とも)の、濡れた鉄色の青毛が降りて来る。

「父さんー!」

兄妹は馬を飛び降りて駆け寄った。

「よお——す！　ただいま、チビツ子ども！」

レンとファアの父親、今の西風の外交官の巻き毛豊かな男性は、旅装をひるがえして馬から飛び降り、子供達に腕を広げた。

西風にとつて、外交官という役職は特別だ。

この地の各部族は過去の確執が深く、領地を結界で覆って他とあまり交流しない。

が、まったくの無連絡では色々危険なかしい。特に西風のように、弱小なのに特殊な能力のある部族は、何もしていなくてもあらぬ誤解を受ける。

他部族との折衝を保つ外交はとても重要で、月の半分しか帰って来ない父親だが、子供達は誇りを持って見上げている。

「ね、ね、僕、里からここまで足を付かずに飛んだんだよ！」

「ファーも、ファーも、ニガウリ食べられるようになったモン！」

「ああ、ああ、偉いぞ。帰ってからゆっくりな」

男性は二人を順番に抱き上げてから、離れた所でこちらを見ているオレンジの瞳の少年に声を掛けた。

「久し振りだな、カノン。元気にしていたか？」

「はい、お帰りなさい、シドさん」

四人でゆっくり砂漠を帰る途中も、レンとファーははしやぎっぱなしだった。

「ね、父さん、今回の行き先は海岸地方だったんでしょ。船って見た？　大きいの」

「ファーも、ファーも、絵本で見たよ、お船」

「ああ、交易の中継所としての大きな港街で、見上げるような帆船が幾つも停泊していて壮観だった。カノン、知っているか？　鯨岩の街」

シドは、少し離れて後ろを歩く少年を振り向いた。

「はい、地理の授業で習いました」

カノンはポソツと答えて、会話は終わってしまった。

本当はこの子供は、もつと多くを知っている筈なのだが。

「シドー！」

西風の入り口の結界の手前で、反対方向から声が掛かった。

三頭の騎馬が、地表スレスレをそよ風に乗って駆けて来る。

真ん中の三つ編みの女性の馬だけ色が緑で、鞍の前に二つ位の幼児を乗せている。

「お帰りなさい、シド」

「とーたま、とーたま」

「ミイ！ もう馬に乗れるのか、凄いな」

シドが三人から離れて、女性の方へ馬を進めた。

「ただいま、エノシラ。君は往診かい？」

「そうなの、弟子の娘（こ）達の研修も兼ねて。ああ貴女達、今日はお疲れ様」

エノシラは後ろの二人に声を掛ける。助産師で医療師でもある彼女に師事する娘達だ。

「はい、エノシラ師匠、お先に失礼します」

「久々のダンナ様とごゆっくりい」

「くらー！」

二人の娘達はかしましくキャツキャしながら、里の入り口の結界を越えて消えた。

「母さま、お腹すいた！」

「そうね、帰ったらすぐご飯にしましょ。ファーも手伝ってね」「うん！」

「レン、ミイを背負って頂戴」

「ふえ——い」

「返事はハイでしょ、ああカノン」

この女性も、青銀の少年に声を掛けるのを怠らなかった。

「貴方もこのままいらっしやいな。ルウも呼ぶつもりだから」

「ありがとう、エノシラさん。僕、ちよつと調べ物があるの。後で母と

伺います」

カノンは固い声で言つて、レンに手を振つてから先に結界へ駆け込んだ。

二人の大人は顔を見合わせ、嘆息して、賑やかな子供達を連れて里へ入つた。

カノンは馬を厩に戻し、自宅には向かわず、修練所の旧棟への坂を登つた。

昔は孤児達や独身の教官の寮だったが、建物が老朽化し、今は誰も住んでいない空き家。その一室に用事があつた。

朽ちたベンチの脇を抜けると、窓の板扉の一つが開いているのが見えた。目指す部屋の窓だ。

(ああ、また……)

この部屋に来るのは、自分の他には一人しかいない。

建物に入ると、廊下に面した扉も細く開いていて、窓を通した明かりが埃に筋を引いている。

扉をそつと引くと、書物に囲まれた中央の長椅子に、予想通りの人物。

窓から差し込むオレンジの夕陽に照らされて、オレンジの瞳の女性が、古ぼけた背もたれに身をもたせかけて、ボオツと一点を見つめている。

視線は向かいの壁で、柄の長い衣紋掛けに、青磁色の長衣が袖を広げて掛けられていた。

十二年前、袖を通される事のなかつた、新郎の晴れ着……

——そのオレンジの瞳が、幸せしか湛えていなかった頃の、夏の宵……

薔薇色の頬に息を弾ませて、十六歳のルウシエルは、修練所の寮への夜道を登る。

ソラが帰って来るのは今日だけだ。明日にはまた南の沿海州へ行ってしまふ。

急いた気持ちで、ほとんど空き部屋の埃っぽい玄関に入り、目当ての部屋に向かう。

「良かった、まだ帰っていない」

カンテラを灯すと、部屋一杯の書物に圧倒される。

同室だったシドが去年所帯を持って出て行ってから、ソラの唯一の道楽の書物収集に拍車が掛かった。

紙を綴じた物の他にも、羊皮紙を巻いたのや、細竹を連ねた物、結び目を束ねた物、開くと勝手に喋り出す合わせ貝……あれも書物、これも書物、天井までぎっちり、まるで書物の森。

夫婦（めおと）になったら住居はルウシエルの自宅へ移る事になっている。

大きな本棚を作って整理整頓して収めよう、と提案すると、『この配置で頭に入っていますし、入手してここに並べた思い出もごさいますので』と拒否られた。

あの頑固者。

結局、この部屋はそのまま借り続ける事になったのだが、自分の立ち入れない領域を大切にしま過ぎるソラが、ルウシエルには少し不満だった。

溜め息ひとつ吐いて、壁の一ヶ所を開ける為、横積みの書物の順序を崩さぬように並行移動を始める。

「大体ソラばかり忙し過ぎだ」

西風は確かにちっほけな部族だ。

他部族との擦り合わせを怠るとアツと言う間に崖つぶちに持つて行かれる、つてのがソラの口癖。

しかし来月には婚礼の儀式だというのに、直前まで出張詰めなんて。こんな事で新婚気分を味わえる隙間などあるのだろうか。

『私が長を引き継いだ暁には、外交を組織化して人数を増やしてやる』

と言うと、

『ヒトとヒトとの付き合いは形骸化出来る物ではないのです』と突っぱねられた。

だから頑固にも程があるだろう。

ルウシエルはもう一度溜め息吐いて、持ってきた風呂敷包みを解いて、柄の長い衣紋掛けを引っ張り出した。

「ルウシエルさ……ルウシエル」

戸口に久し振りの声がして、旅装の男性が突っ立っている。

婚礼を来月に控えて、ようやつと『様』が抜けるようになった、青銀の髪のスラ。

「女性が殿方の部屋に立ち入る時間ではありませんよ」

通常運行の頑固者。

だけれど、口の端が緩むのを隠せていない。

今まで帰って独りだった部屋に暖かい光が灯り、家族が待っている

……

(素直に現せないだけなんだ、嬉しい癖に)

それに気付いて愛しいと思ってしまうと、頑固も不満もどうでもよくなってしまうルウシエルだった。

「うん、ごめん。おかえりなさい、ソラ」

「あ、ああ、ただいま……」

「明日早くには発ってしまおうでしょ。どうしても見て貰いたい物があって」

「？」

ルウが視線で示す先、書物を退けた壁に、袖を広げた青磁色の長衣が掛けられていた。

白絹の刺繍の縁取りが、カンテラの灯りを映してオレンジに揺れる。

ソラはポカンと口を開けて、刺してはほどいた跡のある刺繍を見つめた。

「えっと、冬の市でさ、この布を見付けて、ソラの髪と同じ色だなあつて眺めていたら、エノシラが、新郎の晴れ着を縫ってあげたら？　っ

て」

「……」

「わ、私はガラじゃないって言ったんだけど、エノシラが、一生に一度の機会だからって強引に。教えて貰ったんだけど……その……」

「……」

「あんまりマジマジ見ないで！ あちこちへボいのは分かってるんだからー！」

「……」

ソラは、口を開けたまま、機械人形のような動きでルウシエルに向き直った。

そうして手を伸ばし、絆創膏を巻いていない指のない両手を、強く握って引き寄せた。

「……ソラ？」

——タガが外れる切っ掛けなんてヒトそれぞれなんだろうけれど、ソラのそれは、かなり分かりにくくて、唐突だった。

ルウシエルはやつと教えて貰えた。

触れただけでヒトの心が見えてしまう体質のソラが、ずっと側に居たいヒトと肌を重ねる事…… それはとても勇気の要る事だったんだ。

——怖かった、貴女の全てを知る事が

タベ初めて弱さを曝（さら）けて白状してくれたヒトを、朝陽の射す書物の部屋の窓から見送った。

ルウシエルの大好きな青銀の髪は、一度振り向いて大きく手を振ってから、坂の下へ消えた。

予定を越えても里へ戻らないソラを案じて、モエギ長（当時の長、ルウシエルの母親）が、幾人かを捜索に、沿海州へ送った。

その内の一人、シドが見付けて連れ帰ったのは、鎧皮（あぶみがわ）

の切れたソラのパロミノ。

「V字谷の抜け道付近をウロウロしていた。あそこ、気流が悪くて危ないけれど、近道だったんだ……」

西風の者、砂の民の部族の者、遠く蒼の里の長までが駆け付けてくれ、皆で搜索したが、青銀の髪妖精は見付からなかった。

ルウシエルは、周囲が不安になるほど感情を表に現さなかった。気遣う周囲に逆に気遣い、搜索してくれる皆の身を案じて労（ねぎら）った。

母のモエギや父のハトウン、親友のエノシラらが隙間を開けずに側に着いていたが、それに対してすら気を遣った。

そうして成果のない搜索の二週間目に、自ら打ちきりを宣言した。自分が言い出さねば、搜索を終われない事を分かっていた。

本当ならば幸せな花嫁になる筈の、婚礼の当日だった。

西風のソラは里に居る時間が少なかったが、存在感は大きかった。このヒトが帰って来ないと決まっただけで、里は一つの火が消えたようだった。

亡くなったと確定した訳ではないので、正式な告知も葬儀もしなかったが、他部族からの使者がひっきりなしに弔慰を示しに訪れた。

元老院が腰を抜かすような大物が、自らやって来たりもした。

そんな来客達に、ルウシエルは母の名代として、堂々遜色なしに対応した。

元々身体の弱いモエギ長は、その頃から臥せりがちになっていたのだ。

里の者達は胸を撫で下ろした。

あの娘もいつまでも子供ではない、辛い目には遭ったが、きちんと次期長らしく成長しているのではないかと、仲の悪い元老院ですら誉めた。

シドは順調だった教官の仕事をすっぱりと辞め、ソラの後を引き継ぐ宣言をした。

妻のエノシラも賛成し、忙しい医療の仕事をやりながら、全力でサ

ポートした。

慣れない外交は大変だったが、マメなソラがきつちり付けていた記録が鞍袋に残されていて、救われた。

修練所のシドの抜けた穴は、先輩教官のスオウが胸をトンと叩いてくれた。

身体の戻らぬモエギは長を完全にルウシエルに譲り、砂の民の外れの田舎家で療養する事となった。

エノシラやシド、ソラの教え子達が、力を合わせて新長殿を支えて行きますと宣言し、彼女を安心させて送り出した。

そうして皆がそれぞれに、ソラが居ない事を受け入れて行った。

せつかちな老人達が、影でルウシエルの縁談を囁き始めた頃……

さすがのエノシラが気付いた。

「ルウ？ 太ったんじゃないよね……？」

「私が絶望の気持ちでいると、それがこの子に流れ込む。この子の血肉は、未来への希望で創られねばならない」

ルウシエルが懐妊していた報せは、全ての者を躍り上がらせた。

特に、子供の頃からソラの親友だったシドは、狂喜乱舞だった。

「さすがは母は強しだね。ソラの命を宿していたから、あんなにしつかりしていられたんだ」

シドとハトウンが嬉しそうに杯を打ち合わせる横で、エノシラは不安を拭えなかった。

ヒトって、いきなり母になれる訳ではないし、母になったからっていきなり強さが備わる訳じゃない……

春の花の咲き揃う穏やかな日に、ルウは、ソラにそっくりな男の子をこの世に送り出した。

——そして、エノシラの不安は的中してしまった……

ホライズン・II

夕陽のオレンジの書物の部屋。

長椅子の女性は、カノンが部屋に入っても、視線を動かさなかつた。

少年は黙って彼女の横まで歩き、片手を肩に置く。

「っ!!」

女性はビクツと揺れる。

「目が覚めた?」

「……」

「貴女は誰?」

「西風の、ルウシエル……」

「僕は誰?」

「……」

「分からない?」

「カノンだ、私の息子」

カノンは肩を降ろした。今日はそんなに記憶は飛んでいないみたいだ。

「シドさんが沿海州から戻って来たよ。エノシラさんが、今日、夕食にどうぞって」

少年は母に背を向けて、書物の山を越えて探し物を始めた。

「シド……エノシラ……」

「分かる?」

「ああ、シドは私の乗馬の先生で、エノシラは留学先の宿主だ」

「惜しい所だね。合っているけれど、それ、僕の生まれる前」

少年は嫌でも母親の人生の出来事と順番を暗記してしまっていた。

「そうか……カノン、何さがしてる?」

「西の大陸の歴史の書物。この前三巻まで読んだんだけど」

「左の棚の下から二段目だ」

「えっと、下から……あ、あつた！ サンキュ」

「良かったな、読んだら元の位置に戻して置くんだぞ」

カノンは目当ての書物を引っ張り出して、ルウを振り向いた。

「ねえ、数字通り並べて置いてもいい？ 読み返したりしたいのに、あちこちバラバラにあるんだもん」

「駄目だ！」

ルウは頬杖を付いて、フィと窓の外へ向いてしまった。

カノンは書物の山を崩さないように乗り越えて、彼女の横へ戻る。

「ごめん、ルウシエル。言ってみただけ。分かってる、ちゃんと戻して置くから」

「ああ……」

カノンは母親を名前で呼ぶ習慣が付いていた。このヒトは、たまに息子の存在すら忘れるからだ。

「面白いよ、西国の歴史」

「ああ、私も好きだ。全部読んだ」

「今晚、討論しようよ」

「ああ」

カノンをこの世に送り出して、張り詰めていたモノがプツツと切れて

プツプツプツプツと切れて……

ルウシエルの記憶は振り子のように、過去と現在を行ったり来たりになってしまった。

初めは皆、難産で疲れて呆けているのだと楽観していた。

でもエノシラがすぐ、ただ事ではないと気付いた。幾ら何でも、子供を生んだ事すら忘れるのは異常だ。

蒼の里の医療師に問い合わせて、蒼の長そのヒトも何度か訪れた。しかし治癒には至らなかった。

普段の生活や、知恵や知識に関しては問題はない。

混乱するのは、ソラが介在した出来事や、ソラの周囲の者に関する記憶だけ。

そして……

「なあ、カノン」

「何？」

「私、ここで誰を待っていたんだっけ？」

「僕じゃないかな？」

「そうか……」

砂漠の流砂が太古の遺跡の傷痕を呑み込むように、ルウシエルの記憶から、ソラの存在がポツカリと抜け落ちていた。

人生の所々、時には随分長い間、穴が開いたように無になってしまっている。

それでもヒトって何となく生きて行ける。

でも……

ルウは自分の手を見つめる。

私の人生って、こんなに渴いた物だっけ？

カラカラの干からびた果実みたいな心の中で、常に投げ掛けられる疑問がある。

例えば、何で暇さえあれば此処へ来るのか？

何でこの書物を動かしたくないのか？

いつも目を吸い寄せられる、あの壁の長衣は誰の物？

ルウには分からない。

分からないが、ここへ来ると、渴いた果実に何かが染み込む。

エノシラもシドも、ルウの前で敢えてソラの話をしなかった。

これ以上揺さぶると、最後の糸がプツンと切れてしまいそうで怖かった。

それに悲しみを封印してしまったのなら、それはそれでいいんじゃないか？ という気持ちもあった。

ただ、カノンを不憫に思っていた。それでなくとも賢く感受性の強い子なのにと、常に心を配っていた。

カノンは、エノシラ達のそういう気持ちは察して、素直に感謝して

いたけれど、冷めた部分もあった。

だって自分は、どうしたってあの家の子供ではないのだもの……

戸締まりをして二人で外へ出ると、薄暮（はくぼ）の坂を登って来る者がいた。

「こんばんは、ルウシエル殿。やあ、カノン」

筋骨逞しいこのヒトは、修練所の教官スオウだ。

「こんばんは、スオウ殿。この春から主任教官になられたそうで、おめでとうございます」

ルウはスラリと挨拶をした。

ソラが介在しない人物や出来事に関しては、何の支障もないのだ。

スオウはにっこりと礼を言い、カノンの方を向いた。

「ちよつと手伝いが要るんだ、頼めるかな」

「はい……」

「ルウシエル殿、カノンを少々お借りしても宜しいか？」

「先にシドさんちへ行っていてよ。すぐに行くから」

「ああ、分かった」

ルウは、薄暮の坂道を、しっかりとした足取りで下って行った。

彼女が見えなくなつてから、スオウは抱えていた書束の中から数枚を引っ張り出した。

「長殿が計画する来期の物品分配の予定表。これで提出すれば、元老院は文句の付けようもないと思う」

「ありがとうございます」

「また元老院から書式を無視したようなややこしい書類が回つて来たら、言いなさい。何も言わせない出来にきつちり仕上げてあげるから」

「はい」

このスオウ、元老院のトップ、大僧正の孫である。

老人達が不備だらけで謎解きのような書類を押し付けて来ても、元

老院内部の原本を見放題の彼がサクリ完璧に仕上げてくれる。

「心配しなくてもいいよ。長殿をサポートするのは、私達、モエギ殿のお陰できちんとした教育を受けられた世代の役割だ」

「スオウせんせ、あの……」

少年はおずおず切り出した。

「この間、シドさんとエノシラさんが話していたのを陰で聞いてしまつて。こういう仕事をこつそり手伝う為に、所長に就任する話を蹴つて、主任で済ませたつて」

「ああ、それは……」

「何の為に？　つて思つちやうんです。もういつそ、スオウせんせが長でいいじゃないですか」

スオウは苦笑して、少年の肩に手を置いた。

「長というのは、そういう物ではない。上手く立ち回れるとか仕事ができるとか、そういうのとは違うんだ」

「風を流す力？」

「それもあるが、それだけじゃない」

西風の長が朝夕、砂漠の地に清浄な風を流すのは、太古からの生業だ。

溜まつた澱を流し悪い気を追いやると言われるが、宗教的意味合いが強いとカノンは思っている。

ただ、カノンの祖母のモエギが子供の時代、長の継承が途切れ、砂漠の地全体が争いで荒れたという。当時、次期長が育つまで代わりに風を流しに来てくれたのが、遠い北の草原の蒼の妖精で、彼等との太い縁（えにし）はその時代からだ。

だから里の者は、風を流す生業を軽視はしない。

「分かんない。僕から見れば、ルウシエル以外の誰が長になつてもいいと思う」

スオウは痛ましい顔で少年を見た。

記憶の飛んでしまった母が、周囲に同情されながら長でいる状態が、いたたまれないのだろう。

「カノン、もし私が長になれと言われても、辞退するよ、なれるとは思

わない」

「そうなの？ 大変だから？」

「いや、長という物は、なる物じゃない。育つ物なんだ」

「そだ……っ？」

「ルウシエル殿は、里を背負う運命に生まれ、逃げずに立ち向かい、立派に長に育った。その長殿が足踏みをしているのなら、里の者が支えるのは当たり前なんだ。長は里を背負って、私達は長を支えて、皆でこの地を末永く継承して行く。そういう物なのだよ」

イマイチ納得していないという顔の少年に、スオウは、少し早足だったかな、と反省した。

「そうそう、この間話した、この旧棟の事だけれど」

「あつ、はいっ」

「やはり老朽化で、梁の劣化が危険だと判断された。これ以上引き伸ばすと解体その物が危なくなってしまうし、夏までに取り壊す事に決まった」

「……………」

「すまないな、こればかりはどうしようもない」

「……はい」

「本などを運ぶ時は言ってくれ、手伝うよ」

親身に言ってくれるスオウにお辞儀をして、カノンはすっかり暗くなった坂を駆け下りた。

——みんな優しい だけれど、本当に欲しいモノは、誰もくれない……

シドの家で食事の後、一緒に片付けを手伝うレンが外へ水汲みに行った隙に、カノンはそつとエノシラに相談した。

「前に、診療所の他に療養施設が欲しいって言っていたでしょう。あの旧棟を使いたって言ったら、反対はされなと思うんだけど」

「ああ……でもね、カノン」

三つ編みの女性は心痛そうに言った。

「梁に亀裂が入って修理のしようがないって聞いたわ。それに、いい

機会かもしれない」

「いい機会？」

「あの部屋にルウが閉じ籠（こも）るの、良い事だとは思っていないかった。ルウにも貴方にも、まだずっと未来があるもの」

「……………」

「荷物を運ぶ時は言っておね、手伝うわ」

「……………ありがとうございます」

レンが水桶を持って戻って来たので、その話は終わった。

居間ではルウシエルとシドが茶を飲み、子供達が歓声を上げながら土産の菓子を広げている。

土産は勿論カノンの分もあり、少年は礼を言って受け取った。

砂漠地方とはいえ、初春の夜は冷え込む。

母子並んで歩く帰りの夜道、ルウシエルは立ち止まって、頭から被った駱駝のケープを広げた。

「お入り」

素直にケープにくるまれてくつついて歩く子供に、ルウはポツリと呟いた。

「お前も苦手なんだろ。ああいうダンラン」

「……………うん」

レンもファーも大好きだ。

だけれど家族とセットになると、途端に遠い存在になる。

カノンはルウの匂いのする毛皮に鼻を埋めた。

狭い空間でお互いの温もりが結び付いて、この世に二人きりしかない気分になる。

「何で私は、お前のお父さんを思い出せないんだろうな」

「……………」

このヒトは、いつもいつも夢の世界にいる訳じゃあない。

覚醒しては、抜け落ちた記憶に飢渴して苦しむ事を繰り返している。

常に側で生活するカノンだけが知っていた。

「思い出せないお父さんなんて知らなくていいよ。僕、ルウシエルだ
けてくれるば、それでいいから」
「お前は優しい……優しい、いい子だ……」

ホライズン・Ⅲ

渡る風が春の山から新芽の香りを運んで来る。

血気盛んな砂の民の部族といえど、こんな外れの田舎は、西風の里よりも喉（のど）やかだ。

山間の棚地に一軒の古家があり、窓辺のベッドに一人の女性が佇んでいる。

面差しがルウシエルに似ているこの女性は、ルウの母で、西風の前長のモエギ。

長らく身体を患っていた彼女は、娘に長を譲った後、西風の里を出てこの場所で静かに療養している。

娘と同じオレンジの瞳が見つめるは、山道を登って来る一頭の騎馬。

一点の白もない漆黒の見事な馬だが、鞍上は拍子抜けする程のチビツ子だ。

反動で跳ね上げられるのもお構いなしに子供用の補助具は一切使わず、ピンと伸びた背筋に一丁前に片手綱。

一際濃い飴色の肌も、真っ黒な瞳も幅広の口も、そっくりそのままミニチュアのハトウンだ。

「よくもあれだけ似たものだ」

女性はオレンジの瞳をしばたかせて、頬杖の上で苦笑する。

子供は前庭に到着するや、馬から飛び降りて駆け寄った。

「母者ー」

西風の長であったモエギの伴侶は、隣の部族『砂の民』の総領息子のハトウン。種族的には、砂漠のジンと妖精の中間だ。

砂漠で一番勢力の大きい砂の民の部族と、一番歴史の古い西風の民。実は双方の古い大人同士は仲がよろしくない。

大昔の諍（いさか）いだとかどちらが上だとか、漠然とした確執が

源（みなもと）なので、気にしない若者達はそこそこ仲良くやっている。

ハトウンの父の総領は、モエギの事を気に入ってはるが、次期総領である一人息子が西風に婿入りなど、当然許さなかった。

西風も同様で、元老院が、ハトウンの血を引くルウシエルに風当たりが強いのは、いまだに古（いにしえ）の高貴な血とやらに拘（こたわ）っているからだ。

夫妻は別居婚だったが愛情は深く、十二年前にソラの行方不明で心労が重なったモエギが倒れた時、父の近くで静養するよう強く勧めたのは娘のルウシエルだった。

彼女は、身体の弱い母を早く父の側に行かせてやりたくて、最速で長を継げるよう、幼い頃から努力していたのだ。

西風を娘に任せたモエギは、砂の民に対するそれまでの恩義と縁（えにし）に、身を持って応えた。

すなわち、総領殿もすっかり諦めていた『ハトウンの跡取り』を、病を押してこの世に送り出したのだ。

これで双方、血が交じった跡取りが揃う。

砂漠の地の歴史の流れの中でとても大きな出来事だったのだが、そんな事が語られるのはずっと後世の歴史書の中で、当時のモエギもハトウンも、勿論、意識もしていなかった。

「アデル、凄いな。また馬に乗るのが上手くなったな」

「うん、お爺ちゃんにも誉められたよ！ 薬と塩持って来た、あと父者から水菓子」

子供は荷物を馬から外すのももどかしく、屋内へ駆け入る。

「今日は一杯食べた？ 痛いのはない？ ああ——」

言ってから子供は、サイドテーブルを見て母を睨む。

朝搾（こしら）えられたであろう粥が、表面に膜が張った状態でそこにあった。

「あ、ああ…… アデルの顔を見たら元気になった。食べよう」

モエギは笑顔を作って匙を手を取った。

子供は安心して、小さい手あぶりに湯を沸かすための炭を入れる。

「カーリは留守なの？」

「ああ、麓の村に、菜の行商が来る日だって」

「カーリがいないからって、食べるのをサボっちゃ駄目だよ」

「分かった分かった、ホラ、食べただろ」

母は空になった器を見せておどけて見せる。

子供は教官のようにヨシ、と器を受け取った。

住み込みで看護をしている叔母（父の妹）のカーリに、『モエギはお前が言うとおどけるから、無理にでも食べさせてくれ』と、常日頃から頼まれているのだ。

「そういえばアデル、その棚に庭で採れた春胡桃があるぞ」

「わあ、やった！……あ、今駄目だ」

アデルは顔を近付けて、にいつと歯を見せる。

「前の歯三本、ぐーらぐらっ」

「ほお、喧嘩したのか」

「乳歯だよ乳歯！ 何でこんないたいけな子供相手にそういうコト言うの」

「乳歯……ちよつと遅いな、ああ、ルウも遅かったっけ」

モエギは骨張った人差し指で、子供の前歯をツンと突いた。

「駄目っ、余計ぐらぐらになるう」

「いっぺんに抜いちやった方が、後の歯が揃って生えて来るんだぞ」

そう言っつてモエギは、枕元の棚の裁縫箱に手を伸ばした。

山道を登って来る騎馬が二頭。

「いいか、くれぐれもモエギに気に病ませるような話はするなよ。先週また胸を痛がって何日か寝込んだんだ」

「分かってるよ。僕ってそんなに軽率に見えるか」

「見える」

「……………」

真っ白い馬に、チョコレット色のキノコ頭の女性は、モエギと同居している義妹のカーリ。

黒砂糖色の栃栗毛に、白い綿帽子頭の青年は、旅の彫刻家、三峰（みつみね）のフウヤ。

「おや、馬がいる。アデルが来ているな」

女性は馬を下りて、窓辺に駆け寄った。

「モエギ、ただいま。珍しい客人だ」

部屋の中を向いていたモエギは、振り向いて目を見開いた。

「お帰り、カーリ。……おお、フウヤー！」

「アガガガア——ッ！」

部屋中に響く情けない悲鳴。

「ひ、ひロイよお…… ゆっフリって言っファのにい……」

前歯三本一気に引き抜かれたアデルが、涙目でうずくまる。

「ごめんごめん、でもいっぺんで済んで良かったじゃないか」

モエギは三本の糸にぶら下がった三本の乳歯をブラブラさせて、愉しそうに謝る。

「抜けた乳歯はどうするの？ 三峰では固い実のなる木の下に埋めて、丈夫な歯が生えますようになっておまじないをするけれど」

フウヤが、馬に積んでいた穀物を運びながら言った。彼は少し足を引きずるが、日常の力仕事なら差支えない。

「へえ、砂の民では『真上に投げる』、西風では『屋根に供える』だったかな」

「全部やればよい。アデル、来い」

カーリが三本の糸を受け取って、口を押さえる子供を連れて、外へ駆け出した。

「それにしても久し振りだな、フウヤ。ルウの所は寄ったのか？」

モエギは窓越しに、白い青年に話し掛けた。

シドの婚礼以降、毎年冬になると砂漠を訪れる三峰のフウヤだが、知り合いの多い西風より、何故かモエギの所にばかりやって来る。

疑問を投げ掛けるのも野暮ってほど、理由はハッキリしているのだが。

「沿海州の鯨岩の街で大口の仕事が入ってね。ずっと制作していたんだけど、一体どうしてもポーズが決まらなくて」

「フウヤはちよつとした売れっ子彫刻家だ。」

夏は三峰の自宅で過ごし、その他の季節は依頼を受けて各地を駆け回る。

彼の作る『踊る天使像』は、見ているだけで癒されると、各地で大気なのだ。

「ちよつと素描にカーリを借りるよ」

「借りるとかセコセコ言っていないで、とつとと連れて行っちゃまえ。砂の民の若い連中だつて結構あの子を狙っているんだぞ」

「それで僕に、総領殿にシバかれると？」

「あはははは」

カーリは総領殿の養女で、モエギから見たら義妹に当たる。

ルウシエルと同じ年で、色々いわく付きの人生を歩んで来たが、今は、初めて娘の親になってタガの外れた総領殿に、猫可愛がりされている。

彼女にちよつかいを出したウツカリ者が陰で総領殿にどういう目に遭わされたかは、フウヤもうつすら知っていた。

当のカーリは行き場の無い自分を拾ってくれた総領家に多大な恩義を感じており、いつだつて尽くす気満々。

モエギの看護はそんな動機で申し出たのだが、水が合ったらしく、今ではすっかりこの家（や）の一員だ。アデルも半分は彼女が育てたような物だった。

「ところでモエギさん、最近何か変わった事ない？ 気になった話題とか」

「いいや、至つて平穏だが。何かあるのか？」

「ううん、別に。あつそうだ、頼みたい事があつたんだ」

強引に話を切り変えて、フウヤは肩掛け鞆から数本の彫刻刀と木を削った筒を取り出した。

「これを作るのを手伝つて貰いたいんだ」

「何だこれ……笛？」

ホライズン・Ⅳ

朝の冷気に身震いして、カノンは目を覚ました。

西風の中心の宿屋跡。

ルウシエルとカノンのちよつと広すぎる住居だ。

上衣を羽織つて、湯を沸かしに厨房へ向かう。

窓の外には白い朝霧。

カノンはその日が何の日か忘れていた。だってその日を楽しみにした事なんてなかったから。

厨房にはルウシエルが立っていた。

長の仕事の、朝の風を速やかに流して、帰って来た所みたいだ。

「おはよう」

今日は僕は居る日かな？

「おはよう、カノン」

彼女の手には二人分の食器があった。よかった、居る日だ。

しかしカノンが修練所へ行く用意をして居間に入ると、ルウは食卓の支度途中で止まっていた。

「ええと……」

「貴女はルウシエル！」

「ああ、私は、ルウシエル……」

「僕は誰？」

「……………」

カノンは一限目の授業を諦めた。

放つて置いたらこのヒトは、スプーンを並べかけたまま午前中一杯止まっているからだ。

「はいスプーン、はいパン、はいスープ。無理に思い出そうと気張らなくていいから、今は食べる事に専念して」

「どうもご親切に……」

「どういたしまして！」

思い出せなくて塞ぎ込んでいる位なら、しつかり食べて活動した方が建設的だ。

窓を開いて空気を入れ換え、洗濯したら事務仕事。カノンの中でルーチンが完成している。

スプーンをくわえたルウが、フツと立って窓辺に歩いた。

「呼んでいるな……」

「えっ、何が、誰が？」

温めたミルクをカップに注ぎ分けながら、カノンが忙しげに聞いた。

「里の外だな、行こう」

「ちよっ、まっ……」

ミルクを置き去りに、外へ飛び出すルウシエルを、カノンも慌てて追い掛けた。

朝靄の砂丘。

馬に乗って結界を越えると、ルウの言ったとおり、本当に笛の音が流れ、風紋の海の中に二人の人影が立っていた。

白い青年と飴色の女性。

「フウヤ！・カーリ！」

カノンは馬を飛び降りて駆け寄った。

母の古い友人のこの二人は、記憶の中であまりソラと絡まないの
で、彼女を混乱させないのだ。素直に嬉しい。特に様々な土地の土産
話を持って来てくれる旅の彫刻家フウヤを、カノンは好きだった。

フウヤは吹いていた木の笛から口を離して、二人を見て、ににっと
笑った。

「僕は他所の者だから、里に入るのにルウの許可を得ようと思って、
ね」

「それは丁寧にありがとう。歓迎するよ、我が家へ来てくれるのだろ
う？」

「ありがと。でもその前に、ここまで出向いて貰ったのにはもう一つ
理由がある」

フウヤがカーリに目配せし、今一度笛を構えた。

——ヒュウルルル

こんな小さな笛から、どうして？ と驚く程に、深い音が響く。

カーリが上衣を脱ぎ捨て、離陸する大鷲のように跳んだ。

「わあー！」

巷で評判の舞姫の舞踏。

修道院で習った奉納舞いだと言うが、彼女のそれは他の巫女とは別物なのだ。

優しいメロディの笛に、滑らかに手足をしならせる砂漠の舞姫。カノンは頬を紅潮させて夢中で見入った。

「この曲？ 知ってる……」

ルウの記憶の引き出しがスツと開いた。

そうだ、昔、風紋の砂漠で出逢った蒼の妖精の女の子……りり。

彼女が『砂漠の星空の詩』に付けてくれた曲じゃないか？

唇が自然に開き、暗記していた歌詞を唄い出す。

カノンは初めて母の歌を聞いた。自分の母親とは思えない明朗な唄声。

カーリが、砂の上とは思えない高いグランジュテをピタリと決め、夢の世界から戻ったカノンは弾かれたように拍手をした。

「凄い凄い、カーリもフウヤも凄いやー！」

「ルウシエルの歌声も良かった。いつもより乗って踊れた」

ルウは鼻の頭を赤らめた。

「唄うのなんてどれだけ振りだ。フウヤの笛がいいから、つい乗せられてしまった」

「うん、フウヤの笛と、声とが、ピッタリだった」

「それはそう。この笛はルウの声に合わせて作った」

フウヤが笛を手の中でクルンと回して見せた。

「昨日モエギさんに協力して貰ったんだ。ルウと声質が似ているから」

「へえ」

と感心するカノンに、フウヤは笛の紐をそのまま彼の首に掛けた。

「はい、誕生日プレゼント」

「!!」

カノンは、自分の誕生日を楽しみにした事がない。だってその日を境に母親がおかしくなったのだ。

昔はシドやエノシラが何かしらしてくれようとしたが、ルウシエルを刺激してしまうので、触れるのを止めるようになった。

「僕は……」

「良かったな、カノン。ありがとう、フウヤ」

ルウに先に言われて、カノンは複雑な気持ちのまま礼を言つて笛を受け取った。

「ルウシエル、わらわは喉が乾いた」

「ああ、カーリも舞いをありがとう。我が家で何か馳走する」

「レモネードはあるか?」

「あつたかな?」

女性二人が先に乗馬して出発する後ろ、わざと遅れて、フウヤはカノンの横へ寄った。

「今の曲を吹けば、ルウの中に、唄いたくなるような明るい気持ちが湧いて来る」

「フウヤ?」

「そしてカーリの舞いを思い出し、君の生まれた日をキチンと思い出してくれる」

「・・・フウヤ!」

カノンは思い出した。

前にフウヤに聞いた事があるのだ。彼もまた母親に忘れられた子供だったという事を。

ずっと前、何かの折りに話してくれたんだった。

「誕生日おめでとう、カノン。頑張つて練習しろよ」

「うん、うん! ありがとう、ありがとう、フウヤ」

カノンとフウヤが馬繋ぎ場に馬を預けて長宅に近付くと、家の中ではもう女性陣の笑い声が響いていた。

レモンがどこの、蜂蜜がどこのと騒いでいる。

家に入る前にフウヤは足を止めた。

「所でカノン、最近変わった事は無かったか？ 気になった話題とか」

「ううん、別に。どうかしたの？」

「いや、ならいいんだ」

「？」

カノンが聞こうとした所で、玄関脇の繁みが揺れた。

「わお！ フウヤ！」

赤いバンダナのレンだ。

「カノン元気じゃん、心配して損した！」

昼休みに近道を走って見に来てくれたらしい。

彼の一家もフウヤと昔馴染みで、レンはカノンと同じく、彼の旅の

話が大好きだ。

「フウヤが来ているんなら、僕も午後の講義休んじゃおうかな」

「こらー！」

後ろから大柄なスオウ教官が姿を現した。

「学べる時にしっかり学ぶのが子供の仕事だ。理屈を付けてはサボっ

ていると、スツカラカンな大人にしかなれないぞ」

「いいじゃん、フウヤだって色々教えてくれるよ」

「屁理屈こねるな、午後の授業に遅れたら掃除罰だ、ほれ駆け足！」

「ひえ——」

レンは不服そうにその場で何歩か足踏みしてから繁みに駆け込んだ。

「待って、レン！」

いつの間に、カノンが勉強道具を抱えて玄関から飛び出して来た。

「カノンはいいんだぞ、少し位ゆっくりしても」

「え——こ——ひいき——」

一度消えたレンが繁みから顔を出した。

「こら、とつとと行け！」

「行こう、レン」

「オツケー、カノン。 フウヤ、僕らが帰るまで居てね！」

「ああ分かった約束する、頑張って子供の仕事をやって来い」

子供二人はガサガサと繁みに消え、後に白い青年と、鼻から大きく息を吐く教官が残る。

のんびり振っていた手を下ろし、フウヤは教官に向き直った。

「レンじゃないけれど、随分とカノンに甘いんですね」

「鼻屑じゃない、区別です。あの子の家庭は普段から色々複雑だから……いや」

教官は苦笑いになって頭を振った。

「やっぱり鼻屑かもしれません。教官失格ですね」

今だって、姿が見えないのを心配して、昼休みの業務を後回しに、様子を見に来たのだ。

「まさか。子供を一律に平等なんてムリムリ。カノンなんて一見しっかりしていて、放って置いても大丈夫そうに見えるから、難しい所ですよね」

「そう言って貰えると助かります。ああ、それはそうと……」

教官は数歩後ずさって、周囲を伺った。

白い青年も察して、話し声が家の中に聞こえない距離まで離れる。

「沿海州からの旅人に、聞き捨てならぬ話を聞きました。鯨岩の街で仕事をしている貴方の耳にも入っているのではないかと」

「西風のソラが生きているって噂？」

フウヤのサラリとした台詞に、繁みの中で息が止まった二人がいた。

盗み聞きするつもりだったんじゃない。カノンが教材のひとつを忘れて、レンと一緒に取りに戻ったのだ。

「やはり知っていましたか。結構な噂になっているようですね」

「うん。だけれど、あれ、ガセだ。デタラメ確定」

「えっ、そうなんですか」

「丁度シドが来ていたから、二人で噂の出所を突き止めたんだ。何の事はない、他人の空似」

「はあ、他人の……」

「コトの真相は単純。鯨岩の街の子供が、海岸で親とはぐれて怪我をした。通りがかつて手当てして、親の所まで送り届けてくれた人物が、ソラに似ていたってだけだった」

「なんと、それだけ？」

「そうそ、名前も違うし、山あいの村で生まれ育ったって言う、まったくの別人。子供の親がたまたまソラの常宿していた宿の主人だったんで、『ソラ殿が生き返ったかと思った！』なんて話したのが、ヒトの口を伝って変な噂になっちゃっただけ」

「ほお、ヒトの口とは怖い物ですねえ」

「その子供にも会って話を聞いたけれど、件のそっくりさん、博打で大負けしたって言って、何とマントの下がパンツ一丁だったって。そんなでへっぽこ勇者なんて名乗って、陽気に歌って肩車してくれたとか。それってどう考えてもソラじゃないでしょう」

「そ、そりや確かに」

「無責任な噂がモエギヤルウの耳に入っていないか心配したけれど……今のところ大丈夫みたいだね」

「いや分かりました。私も変な噂が里に入らぬよう、気を付けていきましょう」

「頼みます。デタラメな噂なんて、どうせすぐに消えるだろうけれど」

フウヤが建物に入り、教官も去ってから、繁みの二人はソロソロと顔を出した。

「あああ、びっくりしたあ。凄い事聞いちゃったと思ったら、嘘の噂かあ。心臓に悪いよな、カノン」

「うん……」

「父さんも言ってくればいいのに」

「レン、シドさんはきつと、半端な噂を里へ持ち込まないようにしたんだよ」

「ふうん、お前凄いな、冷静じゃん」
「ん……」

確かにカノンは冷静だったが、何処となく上の空なのに、レンは気付かなかった。

「行こうか、カノン。時間ギリだよ」

「……………」

「カノン？」

「会ったんだろうか」

「えっ？」

「フウヤかシドさんか、その、他人の空似なヒトに、直接会ったんだろうか。フウヤの口振りだと、やっぱり人伝（ひとづて）にしか聞いていないみたいだ」

「だって名前も生まれ育ちも違って、性格も全然違うんでしょ？ そりゃ他人だよ」

「そうだろうね、そう思うだろうね、ソラの全てを知っているつもりでいるから」

レンは少しムツとした。自分の父親のシドは、ソラとは子供の頃から寝食を共にした親友だ。誰よりもソラの事は知っている筈。

カノンもそんな彼の気配を察してか、その話はそこで止めた。

しかし口の中だけで、独り言のように呟いていた。

（大人って、ホント、痒い所に手が届かないんだ）

ホライズン・V

青い月が砂の上に規則的な影を描いている。

夜露が表面で煌めいて、雪の原みたいだ。

もつともカノンは、雪の原なんて見た事もないのだけれど。

旅装をくくり付けたパロミノを引いて、これから踏み出す砂の原を、少年はじっと見つめる。

「カノン」

驚いて振り向くと、青い月の下、青い癖つ毛の友達が立っている。

「お前の行動なんてお見通しさ。悪いけどカノンが窓辺に置いた手紙、持って来ちゃったから」

レンは、額がゴツツンする程の距離まで、怒った顔を近付けて来た。「まったく……『しばらく留守にします。心配しないでください。ルウシエルの事をよろしくお願いします』……って？ これだけかよ、こんな何の説明も無い手紙で皆が納得してくれると思ってるのか。逆に大騒ぎになるだろが、バカタレ」

「バ、バカって言うな。嘘は言いたくないから、それしかないだろ」
フ——ツつと息を鼻から吐いて、レンは両手を腰に当てた。

「沿海州に行くつもりなんだろう？ そのそっくりさんに会いに。会ったら納得するの？ それこそ父さんに相談すればいいのに」

「違う、沿海州に行くんじゃない」

「じゃあ何処へ行くっていうんだ？」

「……蒼の里……」

「はあっ!？」

思いも寄らない答えにレンは思わず大声を上げ、慌てて声のトーンを落とした。

北の草原、エノシラの故郷、蒼の里。

偉大なる蒼の長が統治し、西風には無い様々な知識や技術の詰まっ

た、文化の高い里。

どれだけレベルが違うって、エノシラの持ち込んだ医療がこちらの土地で大改革を起こしたんだから、いわずもがな。

昔はルウシエルやシドラ何人かの子供が留学に行ったらしいが、やはり遠すぎて気軽には行けない。飛ぶのに長けたシドだって何日も掛かるのだ。二人も勿論行った事がない。

「?? ルウさんの忘れ病(やまい)は、蒼の里の長殿が昔何回も治療に来てくれたんだろ?」

「ルウシエルの治療を頼みに行くんじゃない」

「じゃあ何の用事があった?」

カノンは口を結んで、石のように固まってしまった。こうなったらこの少年はテコでも喋らない。

「分かった」

しばらく時間が過ぎてから、レンが渋い声で言った。

「待ってる、動くんじゃないぞ!」

そう言つてカノンの足元をピシツと指差して、里の中へ駆け込んで行った。

彼は両親に注進したりしない……

カノンは惑いながらも、言われた通り突つ立っていた。

しかし程なくして戻つて来た彼を見て、全身の血が足元に落つこた。

「駄目だ、レン! それは駄目! 幾ら何でもヤバ過ぎる!」

レンの手には、里でただ一頭の、エノシラの緑の草の馬が引かれていた。

飛ぶのに特化した、蒼の里産の馬。だけど……

シドさんのスオウせんせだの、普段しよつちゆう怒られているヒトは、そんなに怖くない。

怒らせたなら本当に恐ろしいのは、普段優しくして穏やかなヒトだ。

しかしレンは、蒼白のカノンにお構いなしに、パロミノの荷物を外し始めた。

「蒼の里へ行くんならこれが一番現実的だろうが。腹くくれよ、それともお前の蒼の里へ行きたい気持ちは上っ面だけか？」

確かにそうだ。普通の西風の馬では、少しづつしか飛べないカノンでは、北の草原までなんて、想像を絶する時間を要する。

草の馬なら、同じ飛行術でもずつと飛んでいられる。何倍も距離を稼げるのだ。

「ごめん、腹くくるよ」

「じゃ、とつとと荷物を乗せ換えようぜ」

「うん」

「なるべく軽くしなくちゃな。地図コンパスは必需品つと。食料は調達しながらで……毛布も二人で一枚でいいか」

「え」

目を丸くするカノンに、レンは手を休めないで続ける。

「まさか一人で行くつもりか？ お前、草の馬に乗った事あるのかよ。

僕は何回か飛んでるけど」

「いや、でも……」

「僕が勝手に馬を引っ張り出して、嫌がるカノンを無理矢理誘ったって方が、説得力があるんだ。みんな、カノンは理想的な良い子だと思っっているから」

「……………」

荷物を下ろされたパロミノは、ちよつと不満気にしたが、ソバカス面の草の馬にバトンタッチするように鼻面を寄せ、ポクポクと厩へ帰って行った。

「さて行くか。グスグスしてたらファーが起きて騒ぎ出す。あいつ、勘だけはいいんだ」

レンが先に乗ってポンポン叩く後ろに、カノンも覚悟を決めて跨がった。

手綱を張って馬銜を掛けると、馬は素直にフワリと浮き上がった。

草の馬は滑るように斜めに上昇し、たちまちカノンに経験のない高度まで上がった。

「カノン大丈夫？ 初っぱなに早い気流で距離を稼いで置きたいんだけれど」

「平気、僕に気を使わないで」

カノンはなるべく平常な声で返事をした。地上は暗いが、風の感じで、とんでもない速度が出ているのが分かる。

レンは背筋をピシリと伸ばしてブレない。西風の馬で飛んでいる時と全然違う。

（蒼の妖精の血が入ってるからなんだろうな。レンはこちらの方が合っているのかも）

「僕の置いて来た手紙はこうだ。『兼ねてから話をしていた、蒼の里へ留学に行く事にしました。草の馬をお借りします。自力で旅をして己の力を試してみたいと思います。僕の誇るべき両親は、追い掛けて来て世話を焼くなんて過保護な真似はしないよね。あ、カノンも一緒に来てくれる事になりました。カノンのお母さんを宜しく』……どうだ、嘘は吐いていないぞ、完璧だろ」

「うん……」

「留学に行きたかったのは本当なんだよ。父さんは、帯剣出来る年になつてからつて言っていたけれど」

カノンは決心した。自分の為に、あんなに優しい両親にも反抗してしまったこの友達に、何も話さないでいるのは駄目だろう。

「レン、これ、見て欲しい」

懐から薄い書物を取り出して、手を伸ばしてレンに見せた。

「んん？」

ささくれた表紙に、手書きの薄い文字。

——【へっぽこ勇者の物語】——

「ソラの部屋の、棚の奥に隠すように突っ込んであった」

「……………」

「最初の方に、博打で負けてマントにパンツ一丁になる件（くだり）もあるよ」

「え、だって、既製品のおとぎ話だろ？ 巷に沢山出回っているんじゃないの？」

「ううん、直した後が一杯あるし、中途なんだ。シドさんの持っている外交記録のソラの字と同じ。ソラが創作したんだ」

レンは思わず振り向いた。後ろの少年は、行方知れずの父親が見つかって嬉しい、なんて顔はしていない。下唇をギョツと噛み、眉間にシワを入れている。

「完璧な大人ほど隠しおおせるんだ。自分が意外とコドモだって事」

ゴクリと唾を呑み込んで、レンは前を向いて手綱を握り直した。

「わ、分かった、理解した。でも、それで何で、蒼の里へ？」

「いま名乗らないヒトに会いに行っても、はぐらかされるだけでしょ。それこそ他人の空似だって」

「うん……」

「フウヤに聞いた事がある。昔、生き別れになったお母さんを捜すのに、蒼の里のナーガ長の手を借りた事があるって」

「ああ、聞いた気がする」

「あちらの長に受け継がれる太古の術、『同じ血を持つ者を捜す術』。血の一滴があれば、確実に血縁者を特定出来る」

「……………」

「フウヤは、遠くからお母さんを一目見て、それで満足して去ったって。僕にそれは出来ないと思う。ソラを目の前にして、動かない証拠を突き付けて」

「カノン……」

「シドさんもエノシラさんも、ルウシエルですら、どんな理由がそこにあっても、ソラを許すと思う。ソラが好きだから、大切だから。でも僕は許さない。ルウシエルの生きざまをぶちまけて、残りの人生二度と笑えなくなるまで追い詰めてやる」

「カノン！」

後ろの友達の声が今まで聞いた事もない程おどろおどろしくて、レンはまた振り向いた。

しかし青銀の少年は、小動物みたいにカタカタと震えていた。

「き、昨日から……繰り返しそればっかり考えて……もう胸の中が真つ黒なんだ。僕は理想的でない子なんかじゃない。嫌になった？

……レン」

「嫌になつて欲しいのかよ」

赤いバンダナの少年はしつかり前を見直し、登りかける朝陽に目を細めた。

「カノンって元々、粘（ね）ちっこい奴じゃん。今更その程度で驚くかよ」

「ええ——つ、そんなに粘ちっこい？」

「粘ちっこい、粘ちっこい」

「ちえっ」

「まあでも、打ち明けてくれて、サンキュ」

陽が登つて、二人はすっかり陽光のオレンジに包まれた。

凍えていた身体が少しずつ暖まる。

「父さん達、手紙に気付いた頃かな」

「追い掛けて来ると思う？」

「微妙な所だな。母さんがヒス起こしたら父さんの方が弱いし」

レンは緩めていた手綱を握り直し、改めて背筋を伸ばした。

（いつもは本心をほとんど喋らないカノンが、ここまで暴露してくれたんだ。どこまでも付き合つてやるさ）

夜が終わつて陽が昇り、忙しくなく大空を横切つて、今、西の空を黄色に染めている。

眼下の砂漠が途切れ途切れになり、空気の匂いが変わつて来た。

「カノン、あれ！」

レンが前方を指差した。

目に鮮やかな緑の森が、地平の端から端まで広がっている。

こんもりとした樹木の中に、鏡みたいな三日月型の湖。

「凄い！」

砂漠育ちの二人には初めて見る光景。

「砂漠地帯と草原地帯の境目に、三日月湖の森があるって聞いた。きつとこれの事だ。降りてみていい?」

レンは馬の高度を下げた。

湖から分岐した小さな流れの淵に、円形の広場があった。程よく木陰で、下生えが少なく居心地が良さそうだ。

着地して下馬すると、レンはへナへナと尻餅を付いてしまった。

こんなに馬を飛ばしたのは初めてで、疲れが一気に来たのだ。

「大丈夫?」

「うん、それよりこの地面、めっちゃフカフカしてる。もう夕方だし、ここで泊まっちゃわない?」

「あ、うん……」

まだ明るいし気持ちは急いていたが、レンも馬も疲れている。

カノンは素直に同意した。

一人だったらここまで来るのにもっと日にちが掛かっただろう。感謝しなくちゃ。

でもシドさんにはヒョイと来られる距離だという。つくづく自分の非力さを思い知った。

「僕、水汲んで来るよ。レンは休んでいて」

「火くらい起こしておく。馬も連れて行って水を飲ませてやって」

「分かった」

「二人きりで夜営なんてワクワクするな」

「はは」

少しの藪を越えると清水の流れがあった。

馬はすぐに鼻面を突っ込んでゴブゴブと水を飲み始める。

(そういえば、修練所の野外学習も、ルウシエルが不安定で参加を止めたんだっけ。外で寝るの、初めてだ……)

ちよつとだけワクワクした。

ピクニツク気分を一転させたのは、レンの悲鳴だった。

ホライズン・VI

「ひゃああー！」

泡喰ってレンの所へ戻ったカノンも、悲鳴を上げそうになった。

鎌首を持ち上げた巨大ミミズが、灌木の間から何匹も覗いているのだ。

胴体が大人の太もも程もあり、しかもミミズの癖に長い触手がうごめいてシャアシャアと威嚇している。

レンは焚き火を挟んで尻餅をついて、ミミズと睨み合っている。腰は抜けているけれど、しっかり短剣は掴んでいる。

カノンも慌てて隣へ駆け寄って、自分の短剣を構えた。

「ちくしょー！ もう半年後だったら長剣を持っていたのに！」

西風では帯剣は十二歳からで、カノンより早生まれのレンも、まだ長剣は提げていない。

子供の突き出す短剣なんて、巨大蟲にとっては爪楊枝みたいな物だ。

ミミズは数を増やしながら、段々と間合いを詰めて来る。

「ヤバイって、逃げよう！」

「で、でも走り出すと一気に襲って来る気が、する……」

頼みの草の馬は水辺に置いて来てしまった。馴染みの馬じゃないから呼んだって来てくれない。

「カノン……」

「レン……」

二人背中を合わせて情けない声を出した時……

——バサバサバサッ ボフ!!

頭上で何かの音が響くと同時に、何かが落っこちて焚き火に直撃した。

黒い煙がグワツと湧いて、視界が真っ黒になった。

「うわわっ！」

「げほほ」

真つ暗な中、後ろから肘を掴まれた。

ミミズじゃない、ヒトの手だ。

次の瞬間、風に巻かれて頭の前から引き上げられる。

視界が開いて、二人は清浄な空気の中に居た。

黒い煙が足元でモウモウ渦巻き、森の木々が遙か足の下だ。

「えっ、ええっ?」

「バアカ! ミミズの巢の真つ只中で火を炊くなんて、アンタ達、ホント、バカだよ!」

甲高い声がして、見上げた二人は度肝が抜けた。

エノシラの馬と全然違う、鮮やかな竜胆(りんどう)色の草の馬。

その鞍上で腕組みしているのは、ファーと同じ位の女の子だった。

紫の髪がヤマアラシみたいに広がって、衣装も馬具も紫紺(しこん)染めの、紫尽くしの女の子。

「厳しい事を言うんじゃない。お陰で煙幕が使えたんだから、いいじゃないか」

今度は二人の真後ろで、落ち着いた男性の声でした。

振り向いて、また二人は息を呑んだ。

こんな綺麗な青があるのか? と思うくらい深い湖みたいな青い瞳と髪の青年が、心配そうに覗き込んでいる。

二人の腕を掴んで引つ張り上げてくれたのはどうやらこのヒトで、レンとカノンは取りあえずホツとした。

幾ら何でも、ファーくらいの女の子に助けられたんじや情けなさ過ぎる。

青年は大きな草の馬から身を乗り出して、逞しい腕で二人をまとめ抱え上げていた。

「さてと、三人乗りは厳しいな。リリ、どちらか引き受けて、後ろに乗せてやってくれ」

「嫌あよ、あたしの若紫は男子禁制なの!」

「こつちだってオンナの世話になんかなるもんか」

レンが精一杯余裕のある振りをした。

「チ——ビ、チ——ビ！ ブ——ス！」

「何よ、このっ」

「レンー！」

カノンが泡喰って遮った。

「ねえ、君……えーと、リリ？ お問い合わせ、今だけ主旨を曲げて、僕を乗つけてください」

「ふんー！」

女の子は鼻を広げて、カノンの横に馬を付けた。

「あんただけ特別よ」

「ああ、ありがとう、僕は」

「西風のカノン、見りや分かるわよ」

「えっ」

二頭は黒い煙を避けて、森の奥の三日月湖の中洲へ着地した。そこには既に、エノシラの草の馬が心許なさそうに待っていた。

「何だよお前、ちゃっかり自分だけ逃げてたのかよ」

「バアカ！」

女の子は背筋をそらせてレンを睨み付けた。

「あたしが助けなきや、大ミミズに襲われてた。自分の馬を守れないヒトに草の馬に乗る資格なんてないわ！ この子は持ち主の元に帰らせる。いいわね！」

少年二人は黙った。それは困るけれど、反論出来ない。

「まあまあ、リリ」

青年が割って入ってくれた。

「自己紹介がまだだったね。俺はユウジーン。蒼の里から君達を迎えに来たんだ」

「えええっ？」

「エノシラさんが、蒼の里と交信を取れる手段を持っていたの、知らな

「かったかい？」

焚き火に薪を放り込みながら、コバルトブルーのユウジーンは、畏（かしこ）まって座る二人の少年を、交互に見た。

二人ともフルフルと首を横に振る。

「ソラが行方知れずになった時、シドが不眠不休で蒼の里まで飛んで、ナーガ長に助けを求めたんだ。それで、今後何かあった時すぐSOSを届けられるようにと、ナーガ様がエノシラに双子石を貸したんだ、これ位の」

ユウジーンが手で示す拳大の大きさを見て、レンは思い当たった。高い棚の奥の嚴重に包まれた翡翠石を引っ張り出して、こっぴどく叱られた事がある。

「その石を鋼（はがね）で叩くと、キインと音が鳴る。双子石は離れていても共鳴するんだ。片割れは蒼の里の執務室にあるから、西風が連絡を取りたがっているのがすぐ分かるって寸法。ゆっくり三回叩くと『通信用の鷹を超越せ』、連打で『緊急SOS』」

「へええ、スゴいや。母さん、なんで内緒にしてたんだろ」

「あんたが面白がって連打しないようにでしょ」

「するかよ、ガキじゃあるまいし！」

ちよつと、したかも……と思いつながら、レンはイーツと舌を出した。「で、今朝早くに石が鳴った。あ、夜間は俺が石を預かっているんだ。んで、執務室に行つて鷹を飛ばした。エノシラさんからの通信は滅多にないけれど、いつもあまり明るい内容じゃなかった。大概、重い病気の治療法の相談だったからね。でも今回は、鷹が帰つて来た途端、蜂の巣をつついたみたいな騒ぎになった」

そこまで話して、ユウジーンはリリと顔を見合わせて、ニツと肩を竦めた。

「何で？ 何で、蜂の巣をつついたみたいになつたの？」

レンが焦れて聞いた。

「そりゃあさ」

『西風のルウシエル』の子供がやって来るってんだもの！」

リリが薪枝をボキツと折って、焚き火に放り込んだ。

「へ？」

聞き役に徹していたカノンが、呆けた顔を上げた。

「その後はしっちゃかめっちゃか。高空飛行出来る者同士で、出迎え争奪戦」

「はあ……」

「で、平等且つ神聖なアマダくじによって、俺がその栄誉を勝ち取ったのさ」

「そ、そうですか……」

ピンと来ていないカノンを、リリが覗き込んだ。

「あなたのお母さんは、それだけ人気者だったのよ」

「に・ん・き・もの……」

カノンの頭の中のルウシエル年表では、確かに蒼の里に留学した履歴はあるが、十一歳の時のホンの三ヶ月程だ。しかもあのヒトが人気者だなんて、どうにもピンと来ない。

「明日は高空気流に乗せてやる。あつという間に蒼の里へ着くぞ。着いた瞬間揉みくちやになる覚悟しとけよ」

「……」

「何だよ、それじゃ僕はオマケかよ？」

レンがふてくされる。

「いいや」

ユウジーンは、今度はレンに向き直って身を乗り出した。

「お前は俺の弟だ」

「どひええっ？」

少年は座っていた丸太から落っこちた。

「ダメダメ、ユウジーン、そんな言い方したら、この子変な誤解してる」

「ああ、はっは」

青年は涼やかに目を細めた。

「エノシラさんね、若い時からハウスの皆のお母さんをやってきたんだ。ハウスって、親のいない子供達の施設。俺もそこで育ったから、お前の兄貴みたいなもの」

「へえ〜」

そんな話は、うつすら聞いた覚えがある。

「だから里には、お前の兄貴姉貴が一杯だぞ」

「うひゃ、ホント？ 僕もう長男やらなくていいの？」

「ああ、末っ子だ。兄貴達の言う事を、よく聞くんだぞ」

「それは嫌だあ」

ニコニコするユウジーンの前で、レンも嬉しそうにカノンを見た。

「ね、母さん達、結構簡単に留学を許してくれたでしょ」

「うん」

「大丈夫だって。ナーガ長さんに会ったら……」

レンはその後口をパクパクだけして、親指を立てた。カノンの目は忘れちゃいないぞってサインだ。

二人の素振りにあまり気に止めないで、ユウジーンは話を続けた。

「俺、見習い時代、成り行きで西風で駐在員をやった事があつてさ。シドさんには随分世話になったんだ。あと、シドさんが蒼の里に手伝いに来た時も、同じ下宿だったんで夜中まで飲み明かしたりしたよ」

「へえ、父さん、どんなだったの？ どうやって母さんを射止めたの？」

「その辺はシドの名誉の為に口を閉じていよう」

「ああん！」

ここでユウジーンは、レンとばかり話しているのに気を遣って、青銀の髪の少年にも話し掛けた。

「ソラさんは、すっごい術者でさ。物静かで大人って感じで」

「あ、はい……」

たちまち少年の額に縦線が入った。

「あの、えと、僕、水汲んで来ます」

カノンは水筒を持って立ち上がった。

「水は足りているぞ」の声を尻目に、少年はとつと水場へ駆けて行く。

戸惑うユウジーンの肩に、後ろからレンが手を置いて首を振った。

三日月形の湖の畔で、カノンは水筒を抱えて座り込んだ。

「ここでちよつと時間を潰そう。皆が眠くなる頃に戻れば、ソラの話
をあまり聞かずに済む。」

「なあにやってんのよ」

紫の前髪が繁みから出て来た。

リリと呼ばれていたその女の子は、あちらで話している時よりも声
のトーンが低い。

「夜営の時の行動は二人一組だわ。そんな事も知らないの？」

「ごめん……」

「まったく、口答え坊主も嫌いだけれど、あんたみたいに何を怒られて
いるのか考えもしないですぐに謝る子供も嫌いだわ」

ずっと年下の女の子に居丈高に叱られて、さすがにカノンもムツと
してそっぽを向いた。

しかしリリはお構いなしにツカツカ歩いて、隣にドツカと座った。

「まあでも、ユウジーンも無神経だったわね。会った事もないお父さ
んを誉められてもねえ」

「……」

「話の雰囲気から、あんたが喜ばなきやいけない流れじゃない。全然
嬉しくもないのにな」

カノンは目を見開いて紫の女の子を見つめた。

「ああ、あたしも似たような気持ちになった事があるから、ちよつと分
かるだけ。あんた程じゃないけれど、父さまと離れて育って、どうに
も好きになれなかったから」

「そうなの？」

「皆が父さまの事をあれやこれや誉めて来るけれど、喜べ喜べって強
要されてるみたいで。ああいう事されると、本人はいないのに、どん
どん拒絶反応ばかり募（つの）っちゃって」

「ああ、うん、何となく分かる」

「ふふ、ありがと」

リリは、今度は、考えないで答えてるとか言って怒らなかつた。ホ
ントに考えて答えているかどうか、判るみたいだ。

「でも、今はまああの仲良しなのよ」

「そっか……」

カノンがまた黙り込みそうになったので、リリは話を替えた。

「さっきナーガ長に会ったら……とか言っていたけれど、父さまに何か御用かしら？」

「えつと？」

「ナーガ・ラクシャって、あたしの父親」

「えっ」

「偉いのは父さまで、あたしは全然偉くないわよって……どしたの？」

カノンがオレンジの瞳をたぎらせてにじり寄って来たので、さすがのリリもたじろいだ。

「出来るの？ 君も？」

「えっ、何？ 何なの？」

「蒼の長の術っての。『同じ血を持つ者を特定する』って術！」

ホライズン・VII

「あちゃあ」

湖に行った二人が帰らないので様子を見に来たユウジーンは、湖畔に流木が三本立てられているのを見て、額に手を当てた。

三角垂に立てられた枝のてっぺんが、紫のスカーフでまとめられている。

「どしたの？ 二人、どこ？」

レンが後ろから覗き込んだ。

「リリの奴、無理矢理着いて来たと思ったら」

「??」

「ああ、これは俺らの間の『先に行くから』ってサインなんだけれど……

アイツね、リリ、とにかく勘がいい。そして割と当たる。憎たらしい程に」

ユウジーンがスカーフを広げて振ると、例のこまっしやくれた声が響いた。

『あたし、やっぱりカノンに必要だったみたい。二人でちよつと用事を済ませに行くから、ユウジーンはレンを連れて先に里へ行っていて。分かっていると思うけれど、手出し無用よ！』

「まったく……」

「追い掛ける？」

「いや、手出し無用って言うてるからな。破ったらおっかない」

「へえ？ あんなチビ助の言いなりになるの？」

「いやいや、レン。リリは成長するのがのんびりなだけで、ああ見えても君よりずっと年上なんだぞ。歴（れっき）とした執務室のメンバーだし」

「ふええ？」

「まあ、君みたいなお子供相手に本気で言い合いをするあたりは、まだまだ子供なんだけれどね」

湖畔でユウジーンが溜め息を吐いている頃、竜胆（りんどう）色のリリの馬は、既に沿海州の鯨岩の街の灯を眼下に見ていた。

「ヒヤッホウー！」

高空気流から飛び出して、そのまま星の中を落っこちるみたいに垂直降下した馬は、海岸の重い砂を舞い上げて着地する。

「着いたわよ。どう、初めての高空飛行は。……あれれ？」

後ろの少年は腕を硬直させて、リリにしがみ着いたまま気絶していた。

「おーい、カノン！ カノン！ はあ、軟弱ね」

屋根だけの漁師小屋に少年を引きずり運んで、リリは小さく息を吐く。

この少年から聞いたのは、『ソラによく似たヒトがいるから確かめたい』、とだけだ。

絶対にそれだけじゃないのは、彼の思いつめた青白い額から感じ取れる。

「ルウシエル……」

風紋の砂丘で会った、燃えるようなオレンジの瞳の友達。

父様は多くを語らないけれど、遠く離れる彼女の光がとても弱くなっているのは、感じていた。

「あたし、あんたの役に立てるかな？ あんたの大切なこの子の額の陰を消してあげられるかな？」

——三日月湖の森から鯨岩の海岸まで、遙か高空を横切る紫の光に、地上で二人だけ、気付いた者がいた。

砂の民の部族の片隅の民家で、窓を開けて空を眺める女性に、ロウソクを持ったキノコ頭が近付く。

「モエギ、冷えるから閉めよう」

「いや、大丈夫だ、カーリ」

「風邪をひくぞ」

「うん、しかし……」

「どうかしたのか？」

「風が乱れている。大きく荒れる前兆だ」

「嵐が来るのか？」

「そうだな。良き嵐なのか、悪しき嵐なのか」

「良き嵐つてのもあるのか？」

「嵐は時として、あらゆる澱（おり）を洗い流してくれる」

「それが良き嵐？」

「嵐が去った後、立っていらればな」

——そしてもう一人。

鯨岩の海岸より何里か北方。

海霧の溜まった山あいには、張り付くような村がポツリとあった。

切り立った山はそのまま崖となって海に落ち込み、背後の険しい谷は苔と瀑布に覆われる。海路も陸路も絶たれた、俗世から隔離した小さな村。

吹き寄せられた小石のような家々の、中央にやや大き目の家屋。その前庭に佇む人影。

色の薄い灰色の瞳が、雲の隙間から南の浜に降った紫の光を、じつと睨み付けている。

「凶星だわ。嫌な風が流れて来る」

低い声で呟くその者の腰まで覆う髪も睫毛も、海霧のように淡い白灰色だった。

瞳も、唇も、額飾りまで、殆ど色のないモノトーンの女性。

「アイシヤ？」

自宅から呼ぶ声がする。

鯨油のカンテラが黄紅色に灯り、寒々とした風景の中、そこだけ暖かな色が付いている。

「どうしたの、眠れないの？ 凶事を予知しちゃった？」

「いいえ、風も霧もいつも通り。何も心配する事はないわ」

女性は霧に湿ったケープを被り直して、戸口へ戻った。

淡い人影の男性が、優しくに迎え入れる。

「そう？ でも、この間から落ち着かなくない？ 僕が迷子を送って外のヒトに会った日から。やっぱり勝手をしたので怒ってる？」

「いいえ、怒ってなんかいない。でももう、私の居ない所で外の世界と関わらないで」

「分かったよ、ごめん。迷子の子供が可愛らしくてつい。怒らないで、アイシヤ、美人が台無し」

「バカ」

アイシヤと呼ばれた女性は、不安な顔を拭って笑顔を作った。

「本当に怒ってなんかいない。ただ心配なの。外の世界は本当に良くないのよ、リユーズ」

「うん、分かったよ、君を哀しませたくない」

リユーズと呼ばれた男性は、青銀の長い髪を肩から滑らせながら、親し気に女性に寄り添った。

「ね、リユーズ、あのお話の続きをして頂戴。そうしたらきつと安心して眠れるわ」

『へっぽこ勇者の物語』かい？ ホント、あれが好きだねえ」

「ええ、子供の頃からずっと好きだわ。何回聞いても、ちつとも飽きない」

顔に何かが当たって、頬を伝う。

「う、うくん……ぶわっぶ」

顔面にいきなり冷たい海水を浴びせられ、カノンは跳ね起きた。

「目が覚めた？」

漁師小屋にあったバケツをぶらぶらさせながら、紫の前髪の女の子が仁王立ちしている。

「しよっぱい……」

「そりや、海の水はしよっぱいわ」

「どうして？」

「海の底で巨大ミミズがおしっこしているからよ」

「えええっ」

「そんな事はどうでもいいでしょ。私達何の為にここに来たんだっけ？」

「え、えとえと」

寝起きで脳みそが働いてないカノンの頭の中は、ひたすら巨大ミミズがのたくっている。

「お父さんに会いに来たんでしょ！」

「あっ、うんっ、そうっ」

「じゃあとつとと街へ行つて、お父さんの居場所を聞き出していらっしやいー！」

「えっ、術で見付けてくれるんじゃないの？」

「甘ったれるんじゃないわよ！」

リリにお尻を蹴飛ばされるように、カノンは朝霧の浜を歩いて鯨岩の街へ向かった。

噂なんてちよいと突つけばすぐに転がり出る物なのに、内気な少年は非常な苦勞をしてやっと、迷子が『へっぽこ勇者』に出会った場所を聞き出す事が出来た。

「遅かったわね」

リリは浜の木陰で、自分の馬とゴロゴロしながら待っていた。

手には大きな棒付きの飴を持っている。

「ソラのそっくりさんが出現した場所が分かったよ。北の海岸沿いの、竜返しの滝の淵」

カノンはゴクンと唾を呑み込みながら飴を凝視した。

「ふうん、じゃあ行きましよう」

女の子はそっけなく言つて、砂を払って立ち上がった。

「あ、あの、僕、足が棒みたいなんだ。あと、朝から何も食べてない」「それで？」

「その飴を、ひとカケラ分けて……」

「あたしと間接キツスでもイイのお？」

リリは小さい舌を突き出して、わざと飴をベローンと舐めた。

「……」

「行くわよ、後ろに乗って」

情けない顔のカノンを後ろに乗せて、リリの若紫は大きく跳躍して、真っ白な霧の空へ舞いあがった。

霧で視界が悪いが、海岸沿いに飛ぶと、切り立った崖と川の流れが見えた。

リリは海に背を向けて、川に沿った山の方へ手綱を引いた。

「あ、そっちじゃなくて、竜返しの滝……」

「滝壺に住んでいる訳じゃあないでしょう？ 飴売りのオジサンに聞いた話では、滝の上流に一カ所だけヒトの住む村があるって」

「……」

「カマイタチで飴を切って実演販売を手伝ってあげたら、喜んで色々教えてくれたわ。情報は渡り商人に聞くのが一番だもの」

「……」

「昔の戦で追いやられた少数部族の村だって。外に対して凄く警戒心を持っていて、馴染みの商人以外とは殆ど関わらないらしいわ」

「……じゃあ、僕は無駄足だったんだ。最初からリリが調べるだけでよかつたじゃな……フガツ」

拗ねて尖ったカノンの口に、横幅一杯に大きな飴が突っ込まれた。

「今あたし、そんな話をしていたかしら？ ふふん、あの辺りね。不自然に霧が固まっっていて、上空からは完全に姿を隠している。なるほどね。急降下するわよ、掴まっっていて」

カノンに何を言う隙も与えず、リリは山あい立ち込める濃い霧の中に突っ込んで行った。

落っこちるより早い降下、置き去りにされないようしがみ付いてい

るだけで精一杯・・・

・・・と思つたら、いきなり地面が現れた。

「酷い！ あんまりだわ！ どうしてくれんのよ！」

半泣きで怒鳴り散らすリリの後ろ頭には、棒の付いたままの飴がベツタリ。

「ご、ごめん・・・」

村から少し離れた森の中に降りたのだが、霧で地面が見えなくて、急停止したら案の定こうなつた。

「レディの髪を何だと思つてるのよお！」

「だって、リリがもうちよつと優しく降りてくれたら・・・」

「ヒトのせいにするの!?!」

このあたりでカノンは、もうホントに嫌ンなつた。

朝起きてから、リリはずつと意地悪しか言わない。

お父さんを確定する術を使って貰わねばならないから我慢していたけれど、もう限界だ。

「いい加減にしないと僕はもう・・・」

カノンが言い掛けた所で、背後の繁みが激しく揺れた。

「うわあっ！」

悲鳴と共に飛び出したのは、小さい男の子と、続いて大きな猪。

「た、助けてえー！」

長い牙が上下に突き出した雄だ。

男の子の背中に尖つた牙が届く寸前、

——キュン！

風切り音と共に、猪は後ろへ弾き飛ばされた。

リリが両手の指を立ててカマイタチを起こしたのだ。

更に指を交差させ、猪の眼前で空気の火花をパチパチと数回鳴らすと、野生の獣は恐れを感じて林へ去ってくれた。

「タウトー！」

繁みから離れた細い道から、もう一人飛び出して来た。長い髪を赤

いりボンで束ねた少女。

先の子と顔立ちが似ているから多分姉弟だろう。二人とも色白で、灰色の髪と瞳、姉の方はカノンより二つ三つ年上な感じだ。

「お姉ちゃん！」

男の子が駆け寄った。

「怖かった！ あの子が魔法で助けてくれたの」

りボンの少女は見知らぬ来訪者を見てビクツとしたが、気を取り直して礼を言おうとした。

その前にりりがクルリと回って後ろ頭を示した。

「お礼の代わりに、これ、何とかしてくれない？」

風を使ったせいで更に飴が絡まって、スゴイ事になっている。

ホライズン・VIII

「切るのは駄目よ！ 生まれてこの方、前髪以外はハサミを入れた事がないんだから！」

何とか飴を取ってくれようと四苦八苦している少女に、リリが偉そうに怒鳴った。

「じゃあこの際、バツツリ散髪しちまえば？」

カノンが投げやりに言った。

「髪を切ると霊力が落ちるのよ！ 術が使えなくなっちゃうじゃない、バカでしょ、あんた！」

「そ、そうなの？」

カノンはたじろいだが、すぐホントかよ？ って目になった。

しかしリボンの少女は、心得た顔で頷（うなず）いた。

「分かります、母様もよくそう言っています」

「本当なの？」

「はい、髪はオーラの源だから大事にしなさいって」

男の子の方はカノンより三つ四つ年下か……多分ファーと同じくらい。

見た事もない二人組に興味津々だ。

「ねえねえ、紫のおねえちゃんも巫女さんなの？ さっきの風の術、母様と同じ位カッコよかった！」

「うん、まあね」

リリは濁した。

「君達のお母さん巫女様なの？ こんな山の中にも神社（かみやしろ）があるんだ？」

口の軽いカノンをリリが睨み付けた。

少女は表情を堅くして身構えたが、男の子が答えてくれた。

「うん、母様は海神様の声を聞くの。海から来る風や霧を読んで、占い

や予言もするんだよ。すつごく当たるんだ！」

「この飴は、お湯がないと無理です」

男の子のお喋りを遮って、少女は立ち上がった。

「家へ戻って水と鍋を持って来るので、火を起こして釜戸を組んでおいて下さい。タウト、おいで」

「君達の村へ行っちゃ駄目なの？」

カノンが無用心な発言をしてまた睨まれた。

「駄目なんです。決まりで、知らないヒトは村へ入れないの」
「何で？」

「我等は落人（おちうど）の村だからだ」

声に振り向くと、林の前に、モノトーンの女性がスラリと立っていた。

「母様！」

少女は男の子の手を引いて、女性に駆け寄った。

「タウトが猪の又シの穴に足を突っ込んでしまったの。それをこのヒトが助けてくれて……」

「勝手に村を抜け出したりするからだ。今日は外へ出るなど言っていたらう」

女性は、少女の示すリリの方を向いて、丁寧に礼をした。

それから紫の頭に歩み寄って、後ろに手をかざす。

シユワツと白い冷気が立って、飴はキレイに髪から離れてパラパラと落ちた。

「凄い！」

カノンが近寄って目を丸くする。

「ありがとう、ああ、あたしはリリ、こちらはカノン」
リリも振り向いて女性を見た。

周囲の霧に溶け込むような色のない肌。細い灰色の髪がウエーブを描いて、雪解けの清流のように腰まで流れ落ちている。確かにこの髪なら、霊力があると言われても納得してしまう。

「すまぬな、外の者には名乗らぬ」

素っ気なく言って、女性は子供達を連れて去ろうとする。

カノンが思わず「待って」と叫んだ。

「ヒト捜しをしているの。村へ入る事を許して下さい」

女性はゆっくり振り向いた。氷のような無表情。

「昔、戦に巻き込まれて、沢山の大切な命を失った。それ以来、我等は俗世と隔離している。外と関わらぬ」

「リリはその子を助けたのに」

カノンが口を尖らせたが、女性は静かに我が子を見下ろした。

「タウトや、お前は何故、無用心に猪の巣を踏んでしまった？」

「雲の間からきれいな紫の光がこっちへ落ちるのを見たの。どうしても確かめたくって、つい近道しちゃったんだ」

男の子は無邪気に答え、カノンは罰悪そうに竜胆（りんどう）色の草の馬を見た。

「災いはいつも外からやって来る」

女性は、鉛のように重々しく呟いた。

「空を飛べるのなら迷子でもなかりう。速やかに立ち去ってくれ」
取り付く島も無い。

焦ったカノンが言葉を探していると、再び林の方から足音がした。

「アイシヤ、どこ？」

今度は大人の男性の声。

瞬間、女性の顔に動揺が走ったが、すぐに平静を装った。

カノンには分かった。

今、繁みをかき分けて目の前に現れたその男性こそ、自分が探していた人物だと。

本当に、一目で分かった

西風の子供達の中で異質に浮いていた自分と同じ、色素の薄い肌、瞳、髪。

そして何より、この身体中の血液が引き寄せられる感じ!!

高揚した心は、しかし次の瞬間、地底に叩き落とされた。
少女と男の子がそのヒトを振り向いてこう言ったからだ。

「父様ー」

さすがにリリも驚きの目を見開いた。

カノンは完全に凍り付いている。

だって、この姉弟の姉の方は明らかにカノンよりも年上だ。

「ソ、ソラ・・・？」

カノンが震え声で小さく呟いた。

しかしその声は、彼の大声で打ち消された。

「さっきの流れ星は、君達かあ！ 凄いなー」

後ろめたさなど微塵もない、好奇心一杯の子供みたいな声。

口をパクパクさせるカノンの前にアイシャが立ち塞がり、男性から見えなくした。

「ね、リユーズ、子供達を連れて家へ戻ってください。この少年は私にご用なの」

さっきまでの冷徹さとは打って変わって、女性を感じさせる柔らかい声だ。

「そうなの？ 分かった。おいで、シア、タウト」

リユーズと呼ばれた男性はあまりにあっさり、姉弟を連れて霧の林へ歩いて行った。

後にはカノンとリリ、それから炎のような瞳で二人を睨む、アイシャと呼ばれた女性。

「人違いだ」

アイシャはきつぱりと言い放った。

「以前も間違えられた。似た人物がいるようだな。さしずめお前の父親といった所か？ 成る程、少しばかりは似ているな」

灰色の女性はスウツとカノンに近寄り、頬に手を掛けて覗き込んだ。

「じゃ、じゃあ、何で先に帰しちゃったのさ」

その手を払い除けながら、カノンは言い返した。

「子供達に妙な話は聞かせる物ではなからう。人違いだったとしても」

女性はカノンの前を離れて、リリに向いた。

「リユーズは我が村で生まれて今日まで育った。嘘だと思えば村人に確かめてみればよい」

「村人は大切な巫女様の為なら、偽りを口にするのをためらわないでしようね」

リリは腕組みして、アイシヤに負けない視線で睨み返した。

「その幼子（おさなご）の姿は、まやかしだな？」

「ふふん、海神の巫女様つてのも、伊達じゃあなさそうね」

睨み会う二人の間でギリギリと空気が軋む。

次に一体どうなるのか、カノンは身を固くして後ずさった。

やがて紫の瞳の方がフツと力を抜いた。

「やめた」

「え、えっ？」

カノンは思わずそちらを二度見した。

「よく考えたら、何であたしがこんなおっかないヒトと渡り合わなきゃならないのよ。そんな筋合い無いじゃない」

「リ、リリ、そんな」

「元々はあんたの事でしょ。自分で何とかしなさいよ」

リリは不機嫌にダン！ と足を踏み鳴らした。

アイシヤも驚いた眼差（まなざ）しで彼女を見ている。

女の子は肩を怒らせたまま、大股で自分の馬に歩み寄り飛び乗った。

「いつまでもヒトに頼って、ほんつとウンザリ。付き合ってらんない！」

そうして男の子の方をチラとも見ないで、旋風を起こして飛び去ってしまった。

あんまりだ……

茫然と立ち尽くすカノン。

その姿があまりに哀れだったのか、アイシヤが肩を降ろして声を掛けて来た。

「置き去りとは随分な友達だな」

「と、友達なんかじゃない。昨日知り合ったばかりだよ。手伝ってくれるって言ったのに、あんなに気紛れな子だったなんて」

言っている内にカノンは鼻声になった。気の毒そうにされると余計に惨めになる。

「……一人では帰れなからう。外に通じる海岸まで連れて行ってやる」

余程カノンの様子が不憫に見えたか、アイシヤは態度を和らげて、案内を申し出てくれた。

見かけは怖いのが、芯から氷みたいなのヒトでもないみたいだ。

「さっきのそっくりさんに、もう一度会えない？」

素直に後ろを歩きながら、カノンはそっと聞いてみた。

「ヒト違いだと言ったろう。それとも会ってはつきり否定されれば諦めが付くのか？」

「諦め？ どうだろ？」

子供が意味ありげな言い方をしたので、女性は振り向いた。

「僕、諦めなきやならない程の執着は無いもの。生まれた時からいいお父さんなんて」

女性は怪訝な表情をした。

「では何故捜しに来た？」

「……書物の部屋が、取り壊しになるんだ……」

「は？」

唐突な話にアイシヤは困惑したが、言った少年も、思いもせず転がり出た自分の言葉に戸惑っている。

ちよつとしてからカノンは、頭の中を整頓して喋り始めた。

「ルウシエルが……ルウシエルとソラとを繋ぐ場所が、無くなってしまふ。その前にきちんとケジメを付けてあげないと、ルウシエルは永遠にあの部屋から出られなくなる。そんな気がする」

「……ルウシエルというのは、お前の母親か？」

「うん」

「母親を呼ぶには変わった呼び方だな」

「だってルウシエル、僕に対して、『誰だっけ?』とか聞くんだもん。あと稀に、自分の名前も忘れる」

「……………」

「ソラがいなくなってから、過去の記憶が穴だらけになっちゃったんだって」

「……………」

「未来が、生きて来た過去の上に重ねて行く物だとしたら、ルウシエルの土台は穴だらけのスカスカなんだ。そのスカスカの穴の上じゃ、ルウシエルはいつまで経っても未来へ行けない。」

穴を埋めてあげなきゃ。例え悲しい悔しい真っ黒な土砂でも、埋めてあげなくちゃならない」

ドウドウという水音が近付いて来た。

繁みを抜けると広い岩盤の河原になっていた。海岸に落ちる竜返しの滝の真上らしい。

平らな水の流れが崖淵で速度を速め、霧の空に途切れている。

その遠く、霧が緩んだ隙間に、空と海を分ける紺碧の横一線が見える。

砂漠の砂以外の、海の地平線。初めて見た……

「こつちだ」

茫然と海を見つめるカノンの脇をすり抜け、アイシヤは慣れた感じで、流れの緩い所の飛び石を渡った。

カノンもへっぴり腰で着いて行く。

嵩の高い大岩の上に、太い縄梯子が巻き上げられ、先端が大岩にくくり付けられている。

「ここを降りると、海沿いに道がある。外との唯一の交通手段だ。決まった商人が来る日にだけ梯子を下ろす。先日はリューズが、滝下で倒れている子供を見付けて、つい降りてしまったようだが」

カノンはそおつと平石から首を伸ばして下を覗いた。垂直に落ちる水が、遙か下の方で白煙を上げている。

「こ、ここを降りるの?」

「何だ、男の子の癖に恐いのか?」

アイシヤがゆつくりと梯子を降ろし始めた。

「まあ、どうしても怖かったら、私が先に降りて下で支えていてやってもいいぞ」

カノンは、女性の色のない横顔をマジマジと見た。

「優しいんだね」

「子供の癖に世辞なんか言っているんじゃない」

アイシヤはちよつと黙り込んでから、口を開いた。

「さつき言っていた……母親の過去の穴をどうやって埋めるか、考えているのか?」

「分かんないよ。いっそ、寂しい事も全て忘れさせてくれる術でもあればいいのに」

ガラガラと激しい音がして、半分降りていた梯子が一気に下まで落ちてしまった。

アイシヤがビクツと揺れて手を滑らせたからだ。

ホライズン・IX

「あれれ？」

子供達と村へ戻る林の道で、男性は立ち止まった。

霧に埋もれた道の先に、さっきの紫の前髪の女の子が、馬と一緒に仁王立ちしていたのだ。

「ご機嫌宜しゆう。えっと、リユーズさん？」

「ああ、さっきはどうも。何かご用かい、お嬢ちゃん」

「ええ、実は教えて欲しい事があって」

「何だい？ 僕に分かる事？」

リリは懐から、ささくれた古い書物を取り出した。

「この続きを教えて欲しいの」

「??」

『へっぽこ勇者の物語』。連れの持ち物なの。昨日彼に教えて貰ったんだけど、途中で途切れているらしいのよ、これ」

「……………」

「へっぽこ勇者が博打で無一文になって、恋人に指輪をあげる為にドラゴン退治を請け負うでしょ？ その先が気になって気になってしようがないの。教えて下さらない？」

「へっぽこ勇者はちゃんと生きて戻ったよ！」

父親の代わりにタウトが大きな声で答えた。

「恋人は、勇者の婚礼の衣装を縫って待っていたんだ。僕も好きなお話だよ！」

嬉しそうなタウトと裏腹に、リユーズは表情が止まっていた。

「その書物、見せてくれる？」

「どうぞ」

リリが差し出す書物を、リユーズはパラパラとめくった。

『へっぽこ勇者の物語』…… 確かに僕が創作した物だけれど、こんな書いた覚えがない」

姉弟も、両側から書物を覗き込んだ。

「父様の話を聞いた通いの商人さんが、面白いと思って書き留めたのではない？ ほら、この間何日か泊まって行った金物修理のオジさんとか」

「そうかもしれないわね」

リリは深くは追求しないで、さっさと書物をしまった。

「凄いや！ 父様のお話が、外の世界の子供にも読まれているの？」

「そうね。続きが聞けてよかったわ。ハッピーエンドでホツとした。ああ、あたしは村へ入れなかったのよね。じゃあこれで」

霧の中に村の入り口らしき門柱が見え、古めかしい装束の村人が数人、余所者の女の子を不安そうに見つめている。

「お前達、先に戻っていなさい」

リューズは少し緊張した声で言った。

ドウドウと水の落ちる滝上の平岩で対峙する、強（こわ）ばった表情のアイシャと、オレンジの瞳を見開いたカノン。

自分の何気ない言葉がこの女性を激しく動揺させたのを、少年は見逃さなかった。

『寂しい事も全て忘れさせる術』…… カノンは背筋がザワザワと泡立った。

「貴方は……ヒトの記憶を操る術が、使えたりするの？」

「無理だな。そんな便利な術があったら、ヒトは苦しまなくて済む」

女性は色のない唇でスウツと言った。

カノンは再び背筋に冷たい物が流れた。

彼女と向かい合っている自分の真後ろは、轟音と白煙を上げる崖っぷちだ。

「リューズは……リューズっていうのは……」

「リューズは、私の、唯一無二の、大切な者だ」

アイシャは胸の底から沸き上がるような声で言った。

「巫女を守護する神官の家系の長子。小さい時から共に育った。勇気に溢れ、あらゆる術に長け、太陽のように皆に安心をもたらしてくれる、かけがえのない、私の夫」

アイシヤは段々に少年に迫った。

カノンには動けない。一步後ろは奈落なんだから。

「戦が起こり、襲撃を受けた時も、先頭に立ち剣を振るった。一族が多くの大切な者を失って、山岳に住み処を移して長い刻（とき）哀しみに暮れていた間も、私は彼の帰りを待っていた」

「……………」

「そしてリユーズは戻ったのだ。滝壺の淵に流れ着いて。私にはすぐ分かった。時間が経って色々忘れていたが、幼い頃の事を話すと、すぐに思い出してくれた。そうして村に歓びが戻り、停まっていた刻も動き出したのだ」

もうカノンには何が何だか考える事も出来なかった。

だって興奮した女性がすぐ目の前に迫っていて、今にも自分をトンと突きそうなのだ。

「だが、リユーズは、私を忘れていた間、間違いを犯した。ある日、彼の全身の血が何処かへ曳かれるのを感じた。遠くで、彼の血を受けた者がこの世に産み落とされたのだ」

「!!」

「だから、だから、私は念じた。二度と再びリユーズを奪われぬよう……………その者が捜しに来ぬよう……………忘れてしまえ！ 忘れてしまえ！ 忘れてしまえ！ と!!」

「あ…あ…あ…あ…!」

カノンが叫んで、目の前の手に掴み掛かろうとした。

アイシヤは咄嗟にそれを払い除ける。

—————
!!!!

少年は空中に手を泳がせて、次の瞬間崖の下に消えた。

「ヒトの記憶なんて、そうそう操作出来るモノじゃない」

リリは、若紫の後ろにリューズを乗せながら言った。

「父さまだって、ちよつと忘れさせたり、思い出させたりする程度。しかも必要に迫られた時だけよ」

「……………」

「でも時として、『強い思い』は、身の丈を超えた力をもたらす」

「僕が戻って来た時……………」

フワリと浮上する馬に、リューズは大して違和感を感じずに、話し続けた。

「村中皆が大喜びした。哀しみに停まっていた刻(とき)が動き出した。皆、明日へ進まない無機な毎日を送っていた。新しい命は生まれず、子供達も成長出来なかつた。シアなんか、ずうつと幼児のままだったらしい」

「シア?」

「僕が行方知れずになる前に、アイシャとの間に生まれた子供。本当ならタウトとはもつと年が離れた筈だつたと」

「そう……………」

「村の皆は事ある毎に、僕の昔話を語ってくれた。それに、アイシャ……………」

リューズは幼いリリに何と言っているのかと、ちよつと躊躇(ためら)ってから、続けた。

「アイシャと…………『肌を触れさせると、二人で過ごした記憶が鮮明に浮かぶんだ。いつしかそれが、アイシャの記憶なのか僕の記憶なのか、ごつちやになつていた』」

「……………」

全てが分かつた。

リリは若紫の手綱をしごいた。

あのアイシャという女性は、自分でも意識せずに、ヒトの記憶に干渉する。

夕べ、ただならぬ者の怨嗟を感じたから、カノンにはわざと嫌われておいた。

カノンの心の中にリリを信頼する気持ちがあったなら、アイシャは立ち去るリリを放って置いてくれなかったろう。

喧嘩して見せて彼女の油断を誘ったから、こうしてリユーズに近づく事も出来た。

「でも、しくじったわ！ 何て深い、執念ー！」

リリは、さつきからビンビン感じているアイシャの殺気で、鳥肌を立てている。

「カノン・・・!!」

ホライズン・X

悲鳴もなく落ちた少年に、アイシヤはハッと我に返った。

我を失っていたのはコンマ数秒で、慌てて手を伸ばしたが、少年の身体に届かなかった。

「あああ！ 何て事！」

身体中の血が凍り付くアイシヤの真横を、疾風が駆け抜けた。

目の端に映ったのは、竜胆(りんどう)色の草の馬。それも一瞬だった。

滝淵から垂直降下した若紫が落水に弾かれるのと、その背から誰かが少年に飛び付くのと、同時だった。

弾かれてクルクル回る草の馬を、リリが必死に立て直す。

全で一瞬の中の出来事。

けれど落下するカノンは、誰かが自分を掴まえて頭をしっかり抱えられるのが分かった。

——ザフツンツツ!!!

激しい衝撃。

鼻と口から物凄い勢いで冷水が入って来る。

滝壺には魔が潜んでいる。

泡のせいで身体が浮かび上がらないのだ。

身体が痛い、芯まで痛い！

助けて！ 痛い！ 誰か・・・

手足が・・・

千切れ・・・

——ザツザアアア——！

水が激しく渦巻いた。翻弄された手足がぶつかって、痛い・・・！

ああ手足ちやんとある！ と思ったら、いきなり周囲の水が失せ

「アヴツ、ゲボツゲホホホ」

泥の上を転がって水を吐くカノンに、鋭い声が飛んだ。

「手伝ってえええ！」

泥だらけの視界の向こう、水の無くなったすり鉢状の滝壺の底で、リリがぐったりとした男性の下に潜り込んで、必死に抱え上げようとしている。

青銀の髪が真っ赤にしとどおっている。

慌てて立とうとしたが、痺れた足がいう事を聞かない。

転ぶ・・・！

誰かの手が延びる。

ガツシリ支える肩と、赤いバンダナ。

「間に合った」

「レン・・・！」

リユーズは既に、ユウジーンに担ぎ上げられていた。

「駆け上がれ！早く！」

レンに支えられて、カノンはすり鉢の泥の中を必死で這い登る。

登りながら上を見て、仰天した。

滝壺にあった大量の水が、上空で渦巻いているのだ。

その真ん中で、両手を掲げて竜巻の大旋風を起こしている者がいる。

ここいらでこんな大技が使えるのは一人しかいない。

黒衣の馬に、碧緑の乱れ髪の女性。

——西風のモエギ！

「お、お、お祖母様！」

「早くしろ・・・もう、もたないぞ・・・」

カノンが力を振り絞ってすり鉢の淵へ上がった瞬間、上空の水の塊がザンブと落ちて来た。

「うわっぶぶぶ」

溢れる波の中、レンがカノンに覆い被さって、流されないよう必死で踏ん張ってくれた。

水が治まって

耳に音が戻って

カノンは閉じていた目を開いた。

霧は吹き飛ばされ、海辺の眩しい空。

滝は何事もなかったようにドウドウと落ち、ずぶ濡れのレンが、隣で荒い呼吸をしている。

離れた所に髪を真つ赤に染めたりリューズが横たわり、その額にモエギが掌を当てている。

よろよろと立ち上がって、カノンはそちらへ歩いた。

リューズは動かず、頭の他に足にも血が滲んでいる。

止血をするユウジーンの隣でリリが、顔を上げてカノンを見た。

「水底で頭を打っちゃったのよ」

——覚えている。

このヒトが、全身で、自分を庇ってくれた——

「リューズ——！」

転げるように梯子を降りて、アイシヤが走り寄って来た。

「リューズ、リューズ！」

「心配要らない。意識が戻った」

モエギはリューズの額から掌を離して、静かに身を引いた。

アイシヤが屈み込んで、自分の衣服の袖で彼の顔を拭う。

「う・・・」

リューズが小さく震えて、灰色の眼を開いた。

そうしてゆっくり視線を動かし、側に立つカノンを見上げる。

・・・

二人、黙って見つめ合った。

リリがレンの袖を引いた。

「何だよ」

見るとユウジーンも立ち上がって、遠退こうとしている。

「トモダチは、よろめいた時に支えるだけでいいのよ」

今までみたいに居丈高じゃなくて、静かな声だった。

「うん、そだな」

レンも素直に立ち上がり、三人は自分達の馬を連れて、そつと海の方へ身を引いた。

リユーズが口を開き掛けた時……

「父様あ!!」

上方で声がした。

灰色の髪の子が滝上から見下ろしている。

二人ともさっきの竜巻を見たのだろう。酷く動揺して、二人一緒に梯子を降りようとしている。そんな様子では危険だ。

「お前達! 止まれ、駄目だ!」

アイシヤが慌てて二人を制そうとする。

カノンがスツとそちらを見上げて、よく通る声で叫んだ。

「君達のお父さんが、助けてくれたんだ!」

皆、一斉に少年を見た。

「大丈夫! そこで待っておいで。へっぽこ勇者は何があってもへっちやらさ! そうだろ!」

「うん!」

男の子が大声で答え、二人は梯子を降りるのを止めた。

少年は、リユーズに正面向いて一礼する。

「ありがとうございます!」

そうしてオレンジの瞳で真っ直ぐ、青銀の髪の子を見た。

ただ、見た。

焼き付けるように。

「それじゃあ、お祖母様、行って参ります」

カノンはしっかりとモエギに対峙して言った。

「行っておいで」

モエギは柔らかく目を細めた。

「お前は、私の誇るべき西風のカノンだ。どこへ行ってもそう言って

胸を張るがいい」

「はい」

少し離れた滝下のリユーズとアイシャにも目礼し、カノンは、待たせていた三人の所へ走った。

そうして、二人乗りの二頭の馬は、煌めく水平線（ホライズン）を越えて、大空高く上昇して行っただ。

その影が見えなくなるのを見届けてから、モエギはグラリと揺れた。

「悪いな、肩を貸してくれ」

アイシャが慌てて彼女を支え、立ち上がれないままのリユーズの側に座らせた。

「久々に会ったと思ったなら、お互いボロボロだな、ソラ」

「……………」

青銀の髪のリユーズは、じつと彼女の瞳を見つめた。

懐かしい、暖かなオレンジ色が、すつと心呼び覚ます。

子供の頃からこの瞳を知っている。

この瞳の前では何も繕えないって事も。

「僕は……すみません。ソラの名を、名乗れる者ではありません」

「リユーズとしてここに暮らすか？」

「……………はい」

「そうか……うん、お前らしいな。ここにはお前を必要とする者が沢山いる」

「ルウシエルって女性（ヒト）は？」

アイシャが躊躇（ためら）いがちに聞いた。

「ルウには、あの子がいる」

モエギが静かに言った。

灰色の女性は口を結んで、オレンジの瞳の少年が飛び去った方向を見上げた。

「そしてあの子には、支えてくれる素晴らしい友がいる」
リユーズも同じ方向の空を見上げた。

「あの……私、私の罪……」

アイシヤが、モエギの前にしゃがんで俯（うつむ）いた。

「私はあの子に恐ろしい事をした。ルウシエルってヒトにも。……罰してくれ」

リユーズは慌てて顔を上げて、懇願するようにモエギを見る。

「そうだな、だがお前を罰する刃（やいば）を、私は持っていない」

「でも……」

「では、彼らに託そう」

モエギは滝上を指さした。幼い顔が二つ並んで、心配そうに見下ろしている。

「お前が償いたい気持ちのすべてを、あの子らに注げ。これから海霧で生まれる全ての命に。そういうのが巡り巡って、うんと未来に、皆を助くる事となる」

「ああ、分かった、必ず」

「リユーズ、助けてやってくれ」

「——はい」

「ええっ?!」

鯨岩の街の中央広場。

最後の舞天使の像を制作中のフウヤは、いきなり現れたモエギに、仰天した。

「どうしたの？ 出歩いたりして、大丈夫？」

駆け寄るフウヤの両手を、いきなりガツシリ掴んでモエギは言った。

「カーリを頼む。砂漠と病人以外の世界を見せてやってくれ」

「えっ?」

フウヤは真顔になった。

「何だよ、それ。縁起でもない」

「あははは、確かに縁起でもないな」

モエギは笑顔で、心配そうなフウヤの額を弾いた。

「ただ、一日も早くカーリの幸せな姿を見たくて、もう待ちきれなくなっただ」

ホライズン・X I

北の草原。

蒼の里の静かな夜更け。

執務室の大机で、カンテラのオレンジに照らされて、蒼の長は静かに言った。

「カノンが生まれた時、私が試そうとしなかったと思うかい？ 血の力で血縁者を探す…… ルウシエルがソラの子供を身籠ったと聞いたら、誰だって一番にその考えが浮かぶだろう？」

「試したの？」

長椅子に腹這いで書類を睨みながら、リリは顔を上げた。

「試したさ。ルウシエルが不安定だったんで、ちよつと遅れたけれど。二歳のカノンを連れて、沿海州に飛んだ」

「で、見つけられたの？」

「ああ。パロミノの見つかった谷と離れていた上に、強力な霧の呪術で隠されていた。前回見つけられなかった訳だ」

「それで？」

「お前が見た通りさ。ソラは記憶を失くしていて、ソラの側には、小さな娘とお腹の大きい妻がいた。西風のソラとは全然違うソラ。もう一人の『なりたかったソラ』だったのかもしれないね」

「……………」

「どうしようもない。真実を暴いても誰も幸せになれない。逆に憎しみを生んでしまうだけ。」

モエギ殿に打ち明けて、相談した。彼女も手をこまねいた。ルウシエルに告げようとしても、言った側から忘れてしまう。だから、待つ事にしたんだ」

「待つって？」

「小さなカノンが成長して、ルウの心の穴を埋められる存在になる日を、さ」

リリは手を止めた。

「大人って勝手ね、カノンはルウシエルの為に生まれて来たんじゃないのに」

「そうだね、だから」

長は細めた目で娘を眺めながらゆつくりと言う。

「カノンがルウを突き放して一人で歩き出す事が、ルウには必要だった訳」

リリは止めていた手を再び動かして、書類に目を落とした。

「まだまだガキンチョよ」

「ふふ、ヒトの事、言えるかい？ 『血で血を探す術』なんて、まだ使えない癖に」

「——!! いいでしょ？ 必要無いって、初めから分かっていたわよ！」

「はいはい、我が娘も強烈にすくすく成長してくれて、喜ばしい限りだよ。でも、執務室の仕事を放ったらかしていきなり居なくなるのは、宜しくない」

「イ——だ！」

リリがようやく書き上げた始末書を大机にバンと置いた所で、ユウジーンが入って来た。

「いやはや子供ってあんなに元気だっけ？ 無限の体力だな」

「ご苦労様ユウジーン、二人は？」

「ベッドに入るなり、オヤスミ五秒です。その直前まで大興奮していたのに」

「ははは、男の子だな」

「手出し無用って言ったのに」

リリが恨みがましくユウジーンを睨み上げた。

「まあね、でも、レンがさ。カノンを置いて行ける訳ないって、テコでも動かなかった。それに、ソラを助ける美味しい所を残しておいてくれたリリには、感謝しているよ」

「ふん！」

リリは長椅子に戻り、カノンに借りた書物を繰り始めた。

これも彼女にとっては『光を放つ宝物』だった。

不器用な『おとうさん』が、いつか出逢う我が子の為に、自分の子供な部分を曝（さら）けて書き綴った、拙（つたな）いおとぎ話・ユウジーンは大机で長の仕事を手伝いながら、嬉しそうに話した。「レンとカノン、留学生用の寮じゃなくて、うちに住ませる事にして、やっぱり良かったです。下宿から独立して一人住まいして良かった。明日から賑やかだぞ」

「男三人なんて、ムサ苦しいったらありやしない。そんな事で喜んでるからいつまで経ってもお嫁さんが来ないのよ」

「いざとなったらリリが来てくれるかい？」

「バア——カー！」

二人のやり取りをニコニコと眺めていた長は、ふと、窓の外の三日月へ目をやった。

海霧の村にソラを発見した時……

実は、もう一つの事実も見付けていた。カノンの血が指したのは、父（リユーズ）と弟（タウト）ばかりではなかったのだ……

北の草原も砂漠の空も、三日月は変わりなくそこに在る。

砂の民の街外れ、ひなびた山中の一軒家。

モエギはベッドに横たわったまま、開いた窓からそれを見つめていた。

もつとも、もう空か天井しか眺められない。

ベッドサイドの椅子に座って、傍らに愛娘がうつ伏せる。

「ルウ、すまなかつたな……」

「何で母者が謝る？」

今、ひとしきり話し終えた所。ここ数日で少しずつ記憶の穴の埋まりつつある娘に。

「私は、大昔にソラの居所を分かっていた」

「うん……」

「奴の首根っこを掴んで、お前の前に引きずって来る事も出来たんだ」
「うん……」でも、それをやっても誰も幸せになれなかった。分かっている、母者。私は今、幸せだから」

ルウは母の傍らに頬を埋めたまま、オレンジの瞳を向けた。彼女の瞳にも、月が映っている。

「ソラは、冷たい谷で辛い思いをして寂しく生を閉じたんじゃないやなかった。ずうっと欲しがっていた暖かい家族に囲まれて、幸せに暮らしている。こんなに嬉しい事はない」

「……ルウ」

「以前の私だったら、その家族が自分ではない事に、悲嘆にくれていただろう。今だからそう思えるんだ。だからその時母者がそつとしておいてくれたのは、正解だったんだ」

ソラの記憶が戻る事で心の穴を埋めたのは、過去の思い出ではなかった。

ソラがいたからこそその、自分の現在（いま）。

ソラが残してくれた、未来（さき）への希望。

「カノンに感謝しなければ。私には勿体ない、天からの授かり物だ」

「ああ、そうだな……」

モエギは目を閉じた。

もう一つ、言っていない事実がある。

ナーガも知っているから、もしも言うべき時が来たのなら、彼が明かしてくれるだろう。

幼い頃、母の浅葱（アサギ）に聞いた昔話がある。

砂漠の地が争いで荒んでいた暗黒の時代。

流れ着いた他所者の剣士を、里の娘が介抱した。

剣士は戦で故郷を奪われ、帰る場所を失くしていた。

里の娘を伴侶とし、里の住人となった彼は、里の為に闘い、この地で寿命を終えた。

太陽のように明るかった彼の子供達は、皆少し色素が薄く、皆少し心を通わす術が使えた。

剣士の名は、リシュ・リユーズといった。

哀しみで刻(とき)の止まった海霧の村。一体、幾星霜、刻が止まっていたのだろうか？

ナーガが二歳のカノンを連れて行った時、彼の血は、祖先であるリシュ・リユーズの娘シアや、他にも多くの村人達を差したのだ。

西風に新しき血をもたらしてくれたリシュ・リユーズ。

その末裔のソラが、今度は故郷の刻を動かしに舞い戻る。

縁(えにし)とは、不思議なモノ。

そうして繋がった子々孫々は、どんな未来を創って行くだろう。

「ルウシエル」

「何、母者？」

この娘や、この娘の子供達、自分の愛した多くの者達が、限らない明日を紡(つむ)いで行ってくれる。

それを思うと、今ここで去る事は、ちっとも寂しくない。

「ハトウンを呼んでくれ」

「うん、分かった。待ってて」

粕鹿毛に跨がって飛び去る娘の頭上には、大熊座と胡桃の木。

その稍近くの頂に、二つの薄い人影があった。

浅葱色の内掛けをまとった女性と、寄り添うように腰掛ける、オレ

ンジの瞳の青年……

くホライズン・了く

ふたつめのおはなし

夏蕾（なつつぼみ）・Ⅰ

蒼の里ののどかな昼下がりに。

初夏の陽射しの下、修練所の広場を駆け回る子供達。

固く巻いた葦（よし）の葉の玉は、軽くてよく弾む。

それを蹴ってお互いの陣地に入れるゲームをやっているのだ。

「レン！ 行ったぞ、頼む——！」

「任せろ！」

赤いバンダナの少年が、山なりに飛んで来た蹴り玉めがけて飛び上がり、空中で見事なシュートを決めた。

「やったあ、レン！」

各陣営の応援も大盛り上がりだ。

今まで蹴り玉に興味を示さなかった女の子達も混じっている。

「大した馴染みっ振りだな」

土手の上では、執務室のホルズと、すっかり中堅の貫祿の着いたサオ教官が見下ろしていた。

「ええ、ルウシエルを懐かしく思い出します。彼女も蹴り玉をやり始めたら、たちまち皆の人気者になりました。

あのズバ抜けた体幹、跳躍力、そして太陽みたいにヒトを惹き付ける魅力。砂漠の子供って皆あなんですかね？」

「あ、ああ——っ！」

少年達の慌てた声、続いてベコンと間抜けな音。

「ふやあ」って情けない悲鳴。

二人が視線を滑らせた土手の真下に、青銀の髪の少年が額を押さえ、うずくまっていた。

「……砂漠の子供みんなが運動神経がいいって訳でもないようだな」

「ごめん——！ カノン！」

クスクス笑うギャラリーをひと睨みして、レンが駆け寄った。

「大丈夫か？ 何でよりによって顔面で受けるかなあ」

バンダナの少年は自分の袖口でカノンの鼻の泥を拭ってから、散らばった書物を拾い集めた。

「また書物を見ながら歩いてたろ。広場では危ないからよせて」

「ごめん、読み始めたらしい。ああ、いつの間にか広場に出てたんだ」

カノンはまだフラフラしながら書物を受け取った。

「・ったく！ そんな文字ばつかに埋もれてたら、書庫の壁のシミになっちまうぞ。たまにはパアツと走ろうぜ」

「ありがと、でも、これすぐに読んじやいたくて。また次、誘ってよ」
「レン——！」

仲間に呼ばれて、レンは振り返りながら駆け去った。

言われた所なのに、青銀の少年は再び書物を開いて歩き始める。

眺めていた二人の大人は肩を竦めた。

「対照的だな」

「あのオレンジの瞳がなければ、どちらがルウシエルの子息か分かりませんね」

「運動は苦手なのかな？」

「体術の成績は程々ですね、持久力はあるのですが。まあ、彼の今の興味は書物なのでしょう。最初にこの図書室を見て、目を輝かせていましたからね。限られた滞在期間に、ありったけの文字をむさぼりたいてって感じです」

「そういう所は、やっぱりルウシエル似だな」

「そうですね」

カノンは自習室の机に辿り着いて、椅子を引くのももどかしく、読み続けの箇所を目を落とした。

天気の良いこんな昼休みは誰もいない。自分だけの空間。

午後の陽射しが窓から射し込み、一人きりの自習室は、少年を遙かな歴史書の世界へいざなってくれる。

「あ、また」

覚えのある節に触れた。

西風の里の『ソラの書物の部屋』で読んだ内容だ。

あの部屋には、古今東西の書物だけでなく、ソラの手による写本も沢山あった。

ただ写しただけでなく、古めかしい文章を現代の言葉に訳したり、読みやすく心配った注釈がなされていた。

ソラの写本を暗記する程読み込んでいたカノンには、原本を見付けると、改めてそういうのが良く分かった。

ソラの足跡を辿りながら書物に身を投じていると、彼がそこで何を考えたかどう感じたかを、追体験している気分になれた。

カノンには蹴り玉よりもそちらの方が、すこぶる魅力的だった。

放課後、レンとカノンが肩を並べて修練所の戸口を出ようとした所で、サオ教官に呼び止められた。

「レン、良い知らせだ」

「センセ、ってコトは、あれ、オツケーが出たんですか？」

「ああ、昼休みにホルズ殿が、直接伝えに来てくれた」

「や、やったあ！」

思わずガッツポーズをやりかけたレンだったが、カノンを見てすぐ腕を下ろした。

二人は西風の妖精だが、レンは母親が蒼の妖精で、蒼の一族の資質も少し受け継いでいる。

蒼の一族のステイタスである空飛ぶ草の馬の訓練を受けさせるべきかどうか、大人の間で話し合われていたらしいが、とうとう許可が降りたというのだ。

訓練の経過次第では、草の馬が貰えるかもしれない。

「よかったじゃない、レン。免許皆伝したら後ろに乗せてよね」

カノンは努めて明るく言って、レンの肩を叩いた。

訓練の許可は、蒼の妖精の混血のレンだけなのだ。

「カノンも、訓練だけでも受けられればいいのに」

「……」

サオ教官が助け船を出すように話題を変えてくれた。

「カノン、今日あたりハウスの方に来てくれよ。チビ達が勉強を見て欲しいって言っていたぞ」

「あ、はい」

二人は教官センセに挨拶をして、帰途に着いた。

レンはもう草の馬の話題は口にしなかったが、身体中からウキウキが滲み出している。

「よお〜！ 砂の国のじやりじやりレン！」

曲がり角で、数人の少年が立ち塞がった。

「お前が触ると草の馬が砂でじやりじやりになっちゃうー！」

「へへん、馬の蚤取りになってイイだろ！」

レンは顎を突き出して、少年達と睨み合った。

ポケットに手を入れる仕草を見ると、少年の一人がおどけて叫んだ。

「それはごめんだあ！」

そして全員同時に笑い出した。

蒼の里へ来たばかりの頃、毛色の違う二人をからかって絡んだ悪ガキ共は、レンがいつもポケットに常備している『必殺の武器』に、ヒドイ目に遭わされた。

すったもんだの末、今ではすっかりお互い認め合う喧嘩仲間だ。

「草の馬の訓練に参加出来るんだってな。厳しいぞ。泣きべそかいても知らないぞ」

「はん！ お前らなんぞすぐ追い抜いてやる」

「来週から？」

「多分」

「時間までに馬装済ませてないと教官にどやされるから、気を付けな」

「うん」

「それと、最初はお尻の皮が剥けるから、下履きを三重に重ねて履いとくんだ」

「ありがと」

指を立てて同級生達と笑い合うレンを、カノンは尊敬の念で眺めていた。

自分一人だったら、きつとからかわれた時点で逃げてしまつて、一歩も先へ進めなかつたらう。

二人は分かれ道で立ち止まつた。

「カノン、ハウスの方へ行くんだろ」

「うん」

小さい子を相手にするのは、あまり物事を裏読みしなくていいので、カノンは好きだつた。

「レンも来ない？」

「ああ、でも数式の宿題やんなきや。僕、カノンと違ってちよいちよいつて出来ないモン」

「ちよいちよいつてなんかやっていないよ」

「そう？ 講義と講義の繋ぎ目にとつとと済ませちまつた癖に。じゃあ、答え写させてくれる？」

「あ……」

「冗談だよ、じゃあね」

「……………」

レンは手を振つて駆け去り、残されたカノンは大きく溜め息付いた。

レンが蒼の里で得ている物に比べたら、宿題が早く出来る事なんて、どうでもいい事に思われた。

夏蕾・Ⅱ

「あら、いらっしやい！」

ハウスの入り口で大量の衣類を抱えた女性と鉢合わせし、カノンは慌てて脇へ避けた。

サオ教官の奥方だ。

ハウスっていうのはサオ教官の個人宅で、正式な施設ではない。

皆がそう呼んでいるだけの、子供達の溜まり場。

抛（よ）り所のない子供の帰るべき家を作る、つてのが教官センセの信念で、常時、様々な事情の子供達が十数人たむろっている。

食べ物分け合って食べ、夜は雑魚寝。

そんな所へお嫁に来てくれるなんて、女神のようなヒトだ。

「おおい、チビ達、砂漠のお兄ちゃんが来たわよ！ えっと、カノン、レンも呼んで晩御飯食べて行きなさいな。二人つくらい増えても変わらないから」

「ありがとうございます。でも今日は、ユウジーン、早く帰れるって言うっていたから」

「そう」

奥方は残念そうに肩を竦め、カゴを抱えて洗濯場へ歩いて行った。

「わっ？」

そんなに広くはない居間に、チビッコ達がギョムツと詰まっている。

「こ、こんなに人数いたっけ？」

「えっと、今日の宿題は何の科目？」

「宿題はもうやっちゃったヨ！」

「えっ、そうなの？ じゃあ……」

「歴史の授業！」

「レ——キシ——のジュギョ——！」

子供達が目を輝かせて、口々に叫んだ。

「ああ、はいはい」

いつも宿題が終わったたら、オマケで、歴史の授業と称してポチポチと語っていた奴だ。

「どこまで話したっけ？」

「西の国の王様が、砂漠の軍師に無理難題を押し付けたトコ！」

皆、わっと期待顔になって、飴色の肌のセンセを見上げた。

大陸史や西洋史をベースに、砂漠の古い言い伝えを絡ませ、子供にも分かりやすくした歴史のお話。

小さいお話が繋ぎ合わさって、全体の歴史の流れが見えて来る。

材料は全て『ソラの書物の部屋』からだ。

「歴史はバラバラに流れる物じゃなくって、沢山の支流が合わさって出来た一本の大河のような物……なんだって。受け売りだけれど」

「ふうーん」

「こんなん面白いの？」

「うん！」

子供達が妙に食い付いて来るので、語り手も手が抜けなくて、話し終わるとヘトヘトになった。

帰る準備をしている所で、戸口の御簾が上がった。

「ただいまあー！」

三つ編みをきつちり編んだ上級生の女の子数人が、裁縫袋を下げてどやどやと入って来た。裁縫の手習い所から帰って来たのだ。

「あ、あら、カノン、いらっしやい。今日はレンは？」

「家で宿題やってる」

「そう……」

会話が進まない。レンがセットでないと、自分なんかとは話す価値もないって事だろう。

気まずい空気から逃れるように暇（いとま）乞いし、しばらく歩いてから、夕空を見上げて、少年はまた溜め息した。

レンは人気者だ。明るくて物怖じしなくて、誰とでもすぐに友達になれる。留学してすっかり、蒼の里の仲間入りをしている。

それに比べて自分はどうかだろう。勉強は一生懸命やっているけ

れど、ただそれだけ。

子供達だって、知らない土地から来た知らない子が珍しいだけ。きつとすぐに飽きられる。

何より、皆が自分に、レンはレンは？　って聞いて来るのに、いい加減ウンザリしている。

特に女の子は、挨拶の後は必ずレン。他の言葉はまずかけられない。

「まったく、レンに用事があるんだったら直接レンに話し掛けろってんだ」

今では、声を掛けてくる女の子全員を、否目（ひがめ）で見るようになってしまっていた。

「レンがどおしたってえ？」

・・・

唯一の例外の女の子がびよっこり登場した。

「溜め息吐いてると、寿命が百日縮まるのよ」

「ホ、ホント？」

「さあね、確かめたヒトがいる訳じゃなし、だからって嘘って証明も出来ないわよね」

紫の前髪のリリは、相変わらずごまっしやくくれた屁理屈を捏ねながら、当たり前前みたいにズカズカと隣に来た。

並んで歩くとカノンより頭一つ小さいが、生きている年数はちよつと多いという。

事実、修練所は修了して執務室でバリバリ働いている。

「今日は早いんだね。じゃあユウジーンももう戻っているかな？」

「ああ、ジーンは急の用事が入ったの。棘の森の主様が体調を崩してね。あのお爺チャン、ジーンにしか気を許さないから、多分今日は戻れない。それを伝えに来たの」

「そう……」

「ジーンがいなかったら寂しい？」

「まあね、でもレンがいるし」

「あたしは？」

「えつと？ リリ、家に来るの？」

「そうじゃなくてっ！ 今あたしと一緒にいるのに、いないヒトの事を思って寂しがったりしない欲しいわ！」

「あ、ゴメ……」

リリがギロリと少年を見据えた。

「あつと、え——」

カノンはゴメンを呑み込んだ。このおつかない女の子は、考えなしに謝って済ませようとする子供が大っ嫌いなのだ。

「……べ、別にいいじゃないか。ユウジーンがいないのは寂しいんだもん。でも、リリをないがしろにしたつもりはないよ」

「そうね」

リリはにつこり微笑んだ。

「そんな事でいちいち怒るあたしがいけないのよ」

「??」

「カノンは目の前のヒトをないがしろにしたりしない。皆も、レンがいないと寂しがるけれど、カノンをないがしろにしているつもりなんてないわ。それが分かったら、許してあげましょね」

「……………」

カノンは立ち止まって、スタスタ先を歩く群青色の後ろ頭を見た。

「リリこそ何で、そんなにドンピシャで僕の悩んでいる事が分かるの？」

「およ？ リリ」

御簾を開けると、レンが着替えの最中だった。

西風の少年二人は、ユウジーンの自宅に居候している。

男三人暮らしは例に漏れず、カノンのベッド周り以外はカオスだった。

カノンの枕元だって、書物が綺麗に積んであるだけで、ヒト一人が

横になれるスペースしかない。

「声くらい掛けてよ。それとも僕の柔肌が見たかったのか？」

「蒙古斑も消えないガキンチョのお尻なんか見て嬉しい訳ないでしょ」

リリは室内のガラクタを乗り越えて厨房にたどり着き、鍋と萎びた芋を手にとった。

「げー！ お前が料理すんのか？」

「げ、とは何よ。ユウジーンが留守するから、このあたしがわざわざ保護者として来てあげたんじゃないの」

「よ、よせ、僕まだ死にたくない！」

「何よおー！」

言い争いする二人は、くすくす笑うカノンを同時に睨んだ。

「何がおかしいのよ！ 突っ立ってるヒマがあったら手伝いなさい！」

「ああ、はいはい」

カノンは手桶を持って外へ出た。里裏の井戸までのんびり歩く。リリは、レンといると本当に楽しそうだ。

一見チャキチャキと快活なリリだが、でも誰にでもって訳ではないのを、カノンは里へ来てすぐに気付いた。

気を許さない者、許す者を、極端なまでに区別するのがリリって娘だ。

そして実は気を許す者の方が、凄く凄く少ない。

井戸で水を汲みながら、カノンはその事と、さっきの事を考え合わせていた。

初対面からガンガン喧嘩出来たレンは、リリにとって大切な存在なんだろうな。

じゃあ叱られっぱなしの僕は……？

「づ、づ、づ……」

真つ黒の芋を前に、レンは喉を呻から情けない呻きを上げる。

「料理なんか久し振りだから、少々手が滑っちゃったかしら。まあ、

ちよつと焦げたただけだから大丈夫、大丈夫」

「焦げ！　これが？　焦げつてのはな、焦げていない部分もあるから焦げつていうんだ。これは炭だ、炭！」

「なによおー！」

「ま、まあまあ」

カノンがナイフを取り出して、芋の黒い表面を削り始めた。

「焦げたトコなんか削っちゃえばいいじゃない。ほら、こうして削れば……」

削つても削つても真つ黒な中身に、カノンの表情も止まった。

「どんな焼き方をしたらここまで炭に出来るんだ？　ある意味才能だぞ。」

「ほ、ほら、こ、ここが食べられるよ」

カノンが必死で削り出した空豆程の茶色い塊を、レンとリリは目玉を寄せてじつと見て、そして同時に吹き出した。

「カノンの真剣な顔！　キャハハ、ああオツカシイイ」

「笑う事ないじゃない」

「笑う以外の何があるっていうの？　アツハハ」

「まあ、せつかくだから」

レンが手を伸ばして、茶色の塊を口に放り込んだ。

「・・・ガツチガチだぞ」

「無理しなくていいわよ」

「歯には自信あるんだ」

芋の数だけの茶色い塊をレンがガリガリ平らげて、結局夕食はカノンが作った。

「ねえ」

食事が終わって、リリが改まった顔を上げた。

「あたし、今日、泊まって行つていい？」

「寝込みを襲うつもりか？」

「バアカ！　ね、いいでしょ」

「う、うん」

「そうと決まったら、カノン、その書物、片付けて頂戴」

「え？ ユウジーンのベッドを使うんじゃないの？」

「このあたしにそんなムサイ所に寝ろって言うの？」

確かに、ユウジーンのベッドに限らず、訳の分からないガラクタの散乱したこのパオの中で、カノンのベッド周りだけが唯一清潔感のある場所だった。

カノンは肩を竦めて書物を移動させ始めたが、少しの心配が掠めた。

リリはこここの所、夜になるとこの家を訪ねて来ては、就寝時間まで入り浸って、そのまま泊まってしまっている。

「親父さんと喧嘩でもしてんの？」

レンがアツサリと口にした。

カノンはハツとなつてハラハラしたが、リリは皿を片付ける手を止めて小さく笑った。

「ううん、今はちよつとあたしと居ない方がいい時期なの。大したことないわよ」

二人が蒼の里に留学してすぐに、カノンだけ一度砂漠へ戻った。カノンの祖母、モエギの君の訃報が届いたからだ。

修練所で授業中だったカノンは、いきなり呼ばれて知らせを受け、放心状態のまま、ナーガ長の馬に乗せられて、西風へ飛んだ。

それまで近寄りがたく感じていた蒼の長様だったが、祖母の死期を早めたのは自分のせいだと動揺するカノンを、本当に親身に慰め、寄り添ってくれた。

旧知だというモエギの君を見送る姿も、背筋をシャンと伸ばして威々たるものだった。

あんな立派な優しいお父さんの何処が不満なんだろう？

(まあ、リリは女の子だし、色々あるんだろうな)

「・・・それで、お前はどうかなんだ？」

いきなり話を振られて、ぼうつとしていたカノンは我に返った。

三人は寝支度して、パオの壁沿いに三角形に配置されたベッドにゴ

ロゴロ転がってお喋りしていた。

「え、えつと？」

「聞いてなかったの？」

「ごめん」

「罰としてカノンが一番に告白だわね、恋バナ！」

「なんだよ、それ」

大人のいない子供だけ（リリは大人かもしれないが）の部屋が夜更かしのお喋りで盛り上がるのは、どこの種族だってきつと一緒にだ。

「恋バナだったって」

「カノンの初恋のヒトは？」

「えええ？ えつと、エノシラさんっ」

「うわっ、無難なトコに逃げたな」

「じ、じゃあ次はレンだ、ちゃんと見えよ」

「えへへ、僕、蹴り玉が恋人」

「逃げたな」

「よおし、次はリリだ、包み隠さず白状しろ」

「……………」

「??」

二人は半身起こして、書物の陰のリリを見やった。

紫前髪の娘は、お喋り途中の半開きな口のまま、眠りの世界へ入っていた。

「なあんだよ、自分で振つといて」

そう言いながらも、レンは声をすぼめた。

「ガキじゃん、オヤスミ五秒かよ。いっつもヒトの事、ガキンチヨガキンチヨ言う癖に」

「疲れているんだよ。執務室の仕事、ハードなんだから。ユウジーンだっけいつもヘトヘトですぐ寝ちやうじやない」

「そうだな」

レンはベッドから身を乗り出して、紫の前髪を覗き込んだ。

「あーあ、無防備に口開けちゃって」

「あんまり覗くなよ」

「黙ってりや、めっちゃ可愛いにな」
「レンは黙っているリリの方がいい？」
「いいや」

夏蕾・Ⅲ

白い靄（もや）が視界を覆っている。手足の自由が効かない。粘り気のある液体の中に潜っているみたいだ。

（……夢？）

カノンは何となく自覚しながら、身体を動かそうと努力した。しかし、ただの夢とは違う違和感が、靄の向こうから迫って来た。

（!？）

水に落とした墨のようなドロドロが、生き物の如くこちらへ伸びて来る。

カノンの本能がそれを怖がった。

あれに触れちゃ駄目だ。

しかし身体が言うことをきかない。

（助けて！ レン、リリ！）

叫びたいのに声も出ない。

禍々しい黒はもう目の前。

（やだあ——！）

ドロドロはカノンの周囲を通り抜けた。

（??）

振り向くと、十歩向こうにコバルトブルーの髪が見えた。

（ユウジーン？）

黒い墨の標的は彼だったのだ。

ドロドロは一ヶ所に集合し、獣の前肢の形となった。

鋭い爪が四本指を広げてユウジーンに襲い掛かる。

ユウジーンは目の前の驚異が見えていない。

まったく無抵抗のまま、ナイフのような爪に身体を貫かれた。

突然の衝撃に顔が歪む。

口が開いて血泡と共に何か叫ぶが、音の無い空間でその悲鳴は聞こえない。

(ユウジーン！ ユウジーン！)

必死で手を伸ばす。

しかし青年を捕えた爪はそのまま遠去かり、水底に沈むように小さくなつて行つた。

(助けて！ ユウジーンを助けて！)

カノンは渾身の力で、眠っている自分の身体を覚醒させようとした。

——キンキンキンキン!!

甲高い金属音が意識を身体に引つ張り戻した。

目を開く、飛び起きる。

隣のベッドでレンが耳を押さえてキョロキョロしている。

リリは？ 既に上衣を羽織つて出口に向かっている。

「起こしちゃった？ ごめん、あたし行くから」

「双子石だろ、今の音。西風で何かあったのか!？」

双子石は、ナーガ長がエノシラに持たせている緊急連絡用の石だ。

片方を叩くと、遠く離れた片方にも共鳴する。

「そうよ、だから行くの。そんなに心配しなくてもいいのよ、石を叩く余裕があるんだから。あんた達は大人しく待っていなさい」

急いで御簾を開けると、外は夜明け前の薄暮だ。

「リリ！ ユウジーンが!」

カノンの言葉にリリは止まって振り向いた。

「ユウジーンに何かあった!」

「ええっ、ホントか?」

リリは冷静に、首から下げた山吹色の小袋を手にとって、チラと見てから聞いた。

「何でそう言うの?」

「夢で……」

「あたしが今急いでいるのは、分かるわよね!」

「でも、あの夢は……」

カノンの言葉を置き去りにして、リリは外へ駆け出して行つた。

後に茫然とした二人が残される。

「に、西風で何があつたんだろ？ でも、リリの言う通り、石を叩く余裕があるんだから、大丈夫だよな…… な、カノン」

レンが自分に言い聞かせるように呟く。

「……」

「カノン！」

「あ、うん……」

「何だよ、自分の夢の方が気になるのか？」

「だって、あんなの普通じゃない。ユウジーンが……ユウジーンに何かあつたんだよ、絶対！」

カノンの真剣な表情に、レンは怒っていた肩を降ろした。

「どんな……夢だつたの？」

一通りの話を聞いて、真面目な顔になったレンが聞いた。

「そういう夢よく見るの？ 夢が現実だった事って、今までにあつた？」

「ううん、初めて。でも分かるんだ、ただの夢じゃない！」

カノンの胸の中には、ユウジーンの絶望の表情が楔みたいに食い込んでいる。

そして黒い爪の恐怖が、まだ背中に鳥肌を立てていた。

里の端の馬繋ぎ場から、紫の光が垂直に飛び立つのが見えた。ほぼ同時に執務室から鷹が矢のように発ち、少し遅れてナーガ長の大きな馬も、高空気流に向けて上昇して行った。

「ナーガ長も西風へ行ってくれるんだ。心強いじゃないか。ね、大丈夫だよ、カノン」

「うん、そうだよね……」

夜明け前の薄明かりの中、レンとカノンは執務室へ向かって歩いていった。

カノンの夢の話を、執務室の誰か大人に言っておいた方がいいと思つたのだ。

二人は坂を登って、高台にある建物に到着した。

ここへ来るのは留学の挨拶に来た時以来だ。偉いヒト達が忙(せわ)しなく出入りしていて、近寄り難く思っていた。

窓の側まで来た所で、中からの声が聞こえた。

「ナーガ長殿まで行かれる必要があったのか？」

年寄りっぽいひしやげた声だ。

二人は足を止めた。

「発祥を同じとする友好部族とはいえ、西風は遠い。高空気流を使っても、行つて帰つて一日がかり。鷹も飛ばしたし、差し当たってはリ一人で充分だったのではないか？」

別の年寄りの声。

「その間、こちらの草原で何か起こったら、どうなさるおつもりじゃ。だいたい長殿は、西風鼻肩が過ぎる」

レンとカノンは口を結んで顔を見合わせた。

「儂ら古老は常日頃、執務室に口出しせぬよう留意しておる。しかし今日は言わせて貰う。西風の事となると、長殿は無理を押し通して、自ら出張つて行こうとなさる。幾ら亡きモエギの君に長殿が、昔、懸想(けそう)していたとはいえ……」

カノンはそこまでしか聞いていなかった。

後退りして、段差の縁で足を踏み外して落つこちたのだ。

——どしやっ！

大人の背丈ほどの高さを落ちて、したたかに背中を打った。

しかしその痛さも霞(かす)む別の痛みが、心臓をワシ掴みにしている。

物音に気付いた建物の中から誰かが出て来る。

カノンは跳ね起きて、執務室に背を向けて力一杯駆け出した。

レンの自分を呼ぶ声がする。でも足は止まらない。

どんな言い訳も聞きたくなかった。蒼の里の中心の執務室で、自分の揺るぎなき誇りである祖母が、あんな風な言われ方をされた事実は変わらない。

住居区を一気に抜けて、里の奥の放牧地まで走って、やっと立ち止まった。

土手の側に小さな厩舎がある。

修練所の授業用の、主無しの馬達が繋がれている。

早朝でまだ人気のない馬房へそつと足を踏み入れた。

と、同時に後ろから、赤いバンダナが走り込んで来て肩に腕を回した。

「ふいふ、やっと追い付いた！」

「レン……」

「やっぱりカノン、本気出したら速いなあ。蹴り玉やればいいのに」
「……………」

「執務室から出て来た奴にアツカンベして来てやった。あんな連中にカノンの夢の話をしたって、まともに取り合ってくれるもんか。西風を馬鹿にしやがって」

話しながら、レンはカノンに背を向けて、一番大きな馬を引き出して来た。

「カノン、頭絡頼む。僕、鞍やるから」

「レン」

「行くぞ、ユウジーンのとこ。カノンもそのつもりだったんだろ？」

「僕一人で行こうと……」

「僕だって行くよ！」

「夢で見ただけなんだよ。それで馬泥棒をするんだ、レン」

「だって、そんなのよりユウジーンが大事だよ。ユウジーンを助けて、西風の妖精の能力を知らしめて見返してやる」

「そんな、知らしめる程の確信なんか無い、僕がただ行きたいだけなんだ。レンを巻き込む訳には……」

「僕は信じてる！」

レンは馬装を終えて、とつと前に跨った。

「行くぞ、早く乗れ」

渋々乗ったカノンを後ろに、レンは軽く馬銜を掛け、大きな草の馬を上手に御して上昇した。初めて乗る馬なのに全然危なげない。

彼はどんな馬に乗ってもそうなのだ。

ヒトだけでなく馬の心も真っ直ぐに掴むレン。そんなレンこそ西風の誇りだとカノンは思った。

「棘の森って南西だったよな。カノン、ナビして」
「うん」

里の外へ出るのは初めてだけれど、地形図は、図書室の虫のカノンの頭にすっかり入っている。

初めて飛ぶ土地で、二人は方向を違（たが）わぬように前しか見ていなかったの、後方の雲の中から、蒼の里へ垂直に降りる馬影に気付かなかった。

「ねえカノン、さっきの」

「んん？」

「モエギ様とナーガ長が昔付き合ってたみたいなお話。ホントかなあ？」

「レン!!」

カノンは後ろからレンの腕を掴んだ。

「お祖母様は、ついこの間、亡くなった所なんだ!」

「あ、ああ、実現してたら凄かったなって思ったただだよ。ごめん、悪かった」

レンは罰悪そうに黙った。

気まづくなつて、カノンは後悔した。ここまでしてくれるレンに、神経質過ぎる自分。

噂なんていつだって話半分なのに。

こんなだから僕は、レンみたいに皆に愛されないんだ。

「ううん、ごめん、レン」

謝りかけた所で、後方に気配を感じた。振り向くと、空の一点の騎馬が迫って来る。

「追っ手だ!」

予測はしていた事だ。レンは心得たとばかりに高度を下げた。

高空では飛行術に長けている蒼の妖精に敵（かな）いっこない。眼下は切り立った谷と多少の森林。

「カノン、しっかりと掴まってるよ!」

「うん!」

レンは谷の張り出した岩をくぐり、上空からの死角へ入り込んだ。後方の騎馬も高度を下げて追跡して来る。

「よ——しよし、こつちへ来い」

相手が十分に降下して来た所で、そつと岩の反対に回り、逆死角から森の方へ飛び込んだ。

「これで、巻けるだろ」

潜んだ木陰で外を見やるレンを、カノンは感嘆の目で見つめる。

ホント、レンの飛行術は凄い。僕が大人だったら、躊躇なく草の馬の免許皆伝をあげるのに。

ホケツとそんな事を考えていて、不意に後ろから肩を捕まれた。

「ひえっ?」

「なかなかだったな。俺じゃなかったら上手く巻けていただろうけれど」

気配もなくそこにいたのは、二人に見慣れたコバルトブルーの青年だった。

「ユ、ユウジーン?」

髪の毛一本間違(まご)う事なき真正銘のユウジーンは、腕組みして鼻から大きく息を吐いた。

「まあったく!」

「えっ、何で?」

「何ではこつちが聞きたいよ。君らしくないぞ」

あまりの予想外に止まってしまっている二人を、ユウジーンは眉間にシワを入れて睨んだ。

徹夜で疲れて帰って来た所に余分な用事が待ってりや、そりやそうだ。

「ホルズさんにだいたい聞いた。気持ちは分かるけれど、君達だけで西風に向かうなんて、無茶苦茶だぞ」

「ううん、僕達……」

言い掛けるカノンを遮って、レンが叫んだ。

「僕達の気持ちなんか分かるもんか！ 西風の者の気持ちは、西風の者にしか分かんないよ！」

一瞬ひるんだユウジーンに気付かれないよう、レンはカノンの手首を強く握った。夢の話はするなって合図だ。

「空気の重い執務室。」

大机にホルズ。正面に二人の少年が手をグーにして突っ立っている。

「あ—— お前達の気持ちも分かるが」

話し始めたホルズの脇で、報告書を書いているユウジーンが困り顔で眉を寄せた。

「物事の端っただけ見ちやいかん。西風を軽く見ている者も確かにいるが、声が大きいから目立つだけだ。現にナーガ長やリリは取るものも取りあえず駆け付けているじゃないか。お前達は心配しなくても大丈夫なんだ」

少年二人は俯（うつむ）いて口を結んでいる。

「俺だって、お前達の父親を通して西風には敬意を持っている。しかし行った事も触れた事もない者達には、昔の矮小部族のままなんだ。お前達の留学は、そういった者達に対する啓発でもあるんだぞ」

少年二人が押し黙ったままだので、ホルズも鼻で溜め息して、説教を切り上げた。

「今日はちゃんと修練所へ行つて、放課後またここへ来なさい。その頃には鷹が戻っているから、西風で何が起こったか教えてやる。それから罰則（ペナルティ）だぞ」

「厩掃除ですか？」

少年達がまだ黙っているので、ユウジーンが気まずい空気を破るつもりで口を開いた。厩掃除は、子供に出来る一番ポピュラーな罰則だ。

「いや、それはない。馬事係の頭目がカンカンなんだ。どの馬も大切に調整しているのに、子供の玩具じゃない！ って」

二人の少年は顔を上げ、初めて動揺の表情をした。

「奴等には、草の馬に指一本触れさせん！ って。厳しいが、仕方がな

いぞ」

ユウジーンもハツとして目を見開いた。

それって、レンが草の馬の訓練を受けられる話も立ち消えたって事だ。

「違うー！」

カノンが叫んだ。

「僕達、立ち聞きした事に腹を立てて、西風に帰ろうとしたんじゃない！」

レンが腕を掴んだが遅かった。

「ユウジーンの所へ行こうとしたんだ！」

「何故だ？」

首を傾げて尋ねる大人二人に、カノンは息を吸い込んだまま止まった。

さつきレンが止めた理由に、やっと気付いたのだ。夢でユウジーン
の危機を見て飛び出したなんて、この状況でそんなの、『わざとらしい
言い訳』にしか聞こえない。

ホルズが腰に手をやって、何度目かの溜め息と共に話を打ち切った。

「もういい、行きなさい」

修練所への泥沼みたいな道なので、カノンは苦しい口を開いた。

「レン……レン、ごめん……」

「謝るな」

レンは正面向いて、カノンに歩調を合わせてずっと真横にいる。

「僕が君を信じたかったんだ。それを貫いたんだから、後悔はしないよ」

「レン……」

「いいんだ、僕には青毛がいるし。よく考えたら、草の馬に乗り慣れて
帰ったら、奴が可哀想じゃん。草の馬はたまに母さんのに乗っけて貰
うからいいんだ」

そしてカノンに顔を向けて笑顔を作った。

でもやっぱり目の奥は動揺で揺れている。

留学の日数の限られている二人は、修練所で受けられる講義の一つをととても大切にしていた。

しかしこの日ばかりは授業に身が入らず、午前の授業が終わると顔を見合わせて頷いた。

もう鷹は戻っているかもしれない。

一刻も早く西風の状況を知りたい二人は、昼食をパスして執務室へ走るつもりだった。

しかし講義終わりの教室で、サオ教官に呼び止められた。

「レン、残念だったな、だがな……」

長くなりそうなのを見て取って、二人は目配せした。

名を呼ばれたレンだけが立ち止まって、カノンは素早く教室を飛び出した。

とにかく片っ方が執務室で情報を聞いて来られればいい。

近道の放牧地を抜けて、里の中心への坂を一気に駆け上がる。

執務室のデスクで一旦息をつき、戸口で声を掛けた。

「ホルズさん」

返事がない。

御簾を上げて覗くと、留守にしているようで、無人だった。

カノンはそおっと中へ入った。大机の奥の止まり木に、鷹はいない。

「まだ戻っていないんだ」

留守に勝手に入るなんて、また心証を悪くする。

すぐに出て行こうとして、机の角にあった書類を落つこととしてしまった。

「いつけない」

屈んで拾って、その瞬間カノンは固まった。

おうネ婆さんの所で胃薬を貰って戻って来たホルズは、御簾を開けて、大机の足元に屈み込む青銀の少年を見咎めた。

「鷹はまだだぞ。心配は分かるが留守に勝手に入っちゃいかんよ。んん？」

少年が屈んだまま動かないので、近付いて肩に手を置いたが、木偶（でく）のようにごろんと横に倒れてしまった。

目は開いてるが瞬（まばた）き一つしない。

「お、おい……」

脇に腕を回して起こそうとした所で、いきなり少年が跳ね起きた。

「うがっ」

「ユウジーン！ ユウジーンはっ!？」

「な……なに？」

頭で顎を直撃されて尻餅を付くホルズ。

「ユウジーン、どこっ!？」

「ユウジーンって……任務で出ている。ああ、その、お前さんが手に持っている手紙じゃないか」

ホルズはクラクラしながら、つい答えてしまった。

本来なら徹夜のユウジーンは休ませてやりたい所だったが、彼の懇意にしている部族から呼び出しの依頼が来たのだ。

「おい、一体どうしたんだ？」

肩を掴もうとするホルズの脇をすり抜けて、カノンは表へ飛び出した。

「そいつを捕まえろ！」

メインストリートの坂を一気に駆け降りる少年に、執務室の戸口からホルズが叫んだ。

また馬を盗んで飛び出しそうな勢いだ。

何人かが手を出して捕らえようとしたが、子供は燕みたいに素早しこかった。

馬繋ぎ場の馬事係が慌てて厩の前に立ち塞がる。

しかしカノンは横目でチラと見ただけで、躊躇なく外との境界の柵に手を掛けて飛び越え、そのままの勢いで走り抜けて行った。

外界の草原へ飛び出したカノンは、勢いを止めずに走り続けた。さっきの書類に書いてあった村は、ここから数里ばかりの山中だ。馬が無くとも走り続ければ辿り着ける距離。だつて、だつて！

書類に触れた瞬間、頭に飛び込んで来た映像！

昨日の夢と同じに、黒いドロドロに狙われるユウジーン、その手に持つているモノ！

カノンは走りながら両手を口に当てた。

思い返すのも恐ろしい。大好きなヒトが目の前で、為す術もなく命ない塊になつてしまうさま。

あんなのを見せられて、ただの夢だと気にしないでおくなんて、絶対に出来ない！

しかし気持ちとは裏腹に、走り続ける足も身体も悲鳴を上げていた。

胸が苦しい、足が動かない、視界が狭くなる。何でこんなに動けないんだよ、僕の身体！

神サマお願い、何でもあげるから今すぐユウジーンの所へ行かせて！

少年の頭上後方で、キラリと何か光った。

背後に迫り来る気配。追っ手？ 捕まる訳には行かない。

しかし、走るカノンの横に滑るように並び掛けたのは、騎手を乗せない裸の草の馬だった。

追い抜き際に合わせた瞳は、見た事もない赤い色。

「．．!!」

根拠も無いのにカノンは不思議な確証を得て、走りながら馬のタテガミを掴んで飛び乗った。

直後、馬は、ドン！ と加速して、空の彼方へ彼を運んで行った。

「な、なんだ、あの馬は？」

少年を連れ戻そうと追って来た馬事係は、トンでもない速さで消え

去った馬を目撃していた。

あんな動きをする草の馬は見た事がない。

いや、草の馬であったのかどうか、怪しい……

カノンは必死で、固いゴワゴワのたてがみにしがみ着いていた。馬は、馬の走り方をしていない。鷹が滑空するように脚を一杯に広げて、見事に風を捉えていた。

足下の景色が光のように流れて行く。

レンと飛んだ時の比じゃない、嘘みたいに速い。

でもほとんど風の抵抗を感じない。一体どうなっているの？

正面の山肌に、へばり着くような小さな村。

「あすこだよ、降りて、お願い！」

叫ぶ前に馬は急降下を始めていた。

真ん中の大きな建物の窓の前まで一直線に降りて、いきなり停止。

背中の少年は馬の首を飛び越えて、そのまま窓に飛び込んだ。

「うああああ!!」

中は酒席だった。

数人の男性が囲むテーブルの上を、突然飛び込んだ子供がゴロゴロ転がる。

瓶を撥ね飛ばして皿の中身をぶちまけて、その子は反対側の壁に激突して止まった。

一瞬の惨事に、全員唾然として突っ立ったまま。

今まさに乾杯の声を上げた所で、手に手に酒杯を掲げていた。

床に倒れたカノンの真横で、ユウジーンが真ん丸に見開いた目で見下ろしている。

依頼が解決して、感謝の一席を、という所だったのだ。

「カ、カノンか？」

茫然とする青年の前で、割れ瓶のカケラをバラバラと落として、少年は立ち上がった。

そしてやにわにユウジーンの手を引ったくって、側の村人に突き出した。

「飲んで！」

「おい、カノン？」

ユウジーンは少年の肩を掴んだが、村人全員が真っ青になって凍り付いているのに、真顔になった。

「な、何なんです？ 酒に何か入っているんですか？」

村人達はおろおろして、しどろもどろだ。

「い、いや……ただ、ちよつと眠くなるだけだと……」

「な……」

聞き掛けるユウジーンの声に被せて、カノンが、ついぞ聞いた事のない激しい声で叫んだ。

「じゃあ飲んでみてよ！ ちよつと眠くなるだけならいいでしょ！

違うんだ！ これ一口含んだだけで、血を吐いて海老みたいに反つて、あつという間に動かなくなる！」

背中に冷水を浴びたような顔のユウジーンの前で、叫びながら少年は涙をぼろぼろ溢す。

「どうしてそんな酷い事が出来るの!？」

外で甲高い馬のいななき！

同時に、戸口や窓を破つて、黒革の鎧の野党達がなだれ込んで来た。ヒトの形はしているが、身体が熊のように大きく、首から上は猛々しい獣。

その手から、夢に出て来た黒い大きな爪が伸びていた。

そう、カノンは『起こった事』を視たのではなく、『これから起こる事』を視ていたのだ。

半人半獣の野党達は、巨大な斧を振りかざして、ユウジーンを囲んだ。

「ふん、そんな人数で俺を倒せる気か？」

青年剣士は背中の二刀に両手を掛けた。

「た、助けて下さい！ 女子供が捕らえられているんだ！」

村人の一人が叫んで、ユウジーンにも動揺が過る。

鎧の獣人の一番大きな男が、一歩前に出て唸るように言った。

「この地が欲しい。お前らに取って代わるのだ。蒼の一族の厄介な剣士を密かに一人づつ片付けて、一気に攻めさせて貫うってえ算段さ」
ユウジーンは横で、カノンは膝の震えが止まらない。

蒼の一族は強くて、彼等の治める草原は平和だと思ひ込んでいた。「二刀を使う男は特に厄介だ」という情報だったので、万端の準備をしたのだが。そのチビが現れなければ、何も知らずに一瞬で逝けたモノを」

獣人達は包囲を縮めた。

ユウジーンは脂汗を滲ませて固まっている。

「まま待つてー！」

カノンが真ん中に飛び出した。

「よせ、カノン！」

ユウジーンが退けようとしたが、カノンは震える足で踏ん張った。「せ、戦争なんかしなくても、蒼の一族にいうことを聞かせられる方法があるよ。僕を人質にすればいい！」

獣人達はいきなりな事を言い出す子供にちよつと驚いたが、すぐにせせら笑った。

「ガキが！ お前が何者だというのだ!？」

「貴重な蒼の長の直系だ！」

カノンは怖いのを必死で隠して、声を張り上げた。

「僕のお祖母様は、昔、蒼の長の恋人だった。分かるだろ、あんた達みたいなのがいるから、離れた西風の地でひっそり育てられていたんだ！」

獣人達が色めき立った。

ここへ来る前に様々な情報を下調べして来た用心深い彼らは、今代の長が過去に西風で色恋沙汰を起こした噂まで知っていた。

ユウジーンはしゃっくりしたみたいに唾を飲み込んでいる。

「本来の跡取り候補のリリが味噌ツカスだから、僕が呼ばれたんだ。

里でも一部の偉いヒトしか知らない。今までだって、西風の里に何かあったら、蒼の長は一目散に駆け付けた。僕がいたからだよ！」
トンでもないハツタリだ。

しかし、マメに調べた事が仇となっている獣人達には、説得力があった。

「僕を人質にしておけば、蒼の一族はあんた達に逆らえない。だから、ユウジーンには何もしなくていいでしょ！」

「小僧！」

リーダーとおぼしき一際(ひとときわ)大きな獣人がズシズシと迫り、子供の青銀の髪を掴んで顔を引き上げた。

血の色の口に、カミソリみたいな歯がギラギラしている。

「人質というのは、交渉が決裂したら八つ裂きにされるモノだ。知っているか？」

「…………、交渉する気があるのなら、今すぐユウジーンに向けている刃(やいば)を降ろさせて…………」

少年は震え声なのに、言葉は引き下がらなかった。

「カノン、もういい、よせ」

ユウジーンが言い終わる前に

——パンパンパン、パパン!!

破裂音！

緊張が途切れた！

「ひ、人質の小屋の方だあ！」

村人が外へ飛び出した。

一人飛び出したら連動して全員飛び出した。

獣人達も怯んで集中が分散した。

カノンの髪を掴んでいたリーダーも一瞬手を緩めた。

それを見計らったように、窓から複数の小さい玉。

カノンには見覚えがあった。

「ユウジーン、目を守って！」

——パパパン！

炸裂音がして、部屋中に刺激臭が満ちる。

「こ、胡椒？」

「唐辛子も入っている筈だよ」

丸い爆竹を凝視していた獣人達は、目をやられて悲鳴をあげている。

素早く伏せて粉塵を逃れた二人は、床を低く走って、包囲を抜ける事に成功した。

表に飛び出すと、カノンの予想通りの顔があった。

「レンー！」

「カノン、僕を置いて行くなよな！」

赤いバンダナが草の馬の上から、白い歯を見せて親指を立てている。

「見張り連中、こっちに気が行っていたから、簡単に『必殺の武器』を浴びてくれた。人質の人達はもう逃げ出したよ」

村端の小屋の前で、黒い獣人達が顔を覆ってうずくまっている。

しかし難を逃れた数人が、逃げ足の遅い村人を追い掛けようとしている。

「レンー！ 馬貸せ！」

レンは素早く飛び降りて、乗って来た馬をユウジーンに渡した。

「また盗んで来たんだ、後で弁護してよ！」

「後だ後！ 今は安全な場所に隠れてろ！」

馬上のユウジーンは二刀を抜いて、風のように獣人に向かって行った。

「僕達もずらかろうぜ」

少年二人は何処かの建物に隠れようと走りかけた。

——ガシッ！

カノンの頭が後ろからわし掴みにされた。

「小僧……！ 許さん……許さん……！」

目を真っ赤にしたさっきのリーダーだ。

鉤みたいな爪が額にズブズブと食い込むのが分かった。

「あ、あ……！」

「はなせ、はなせ——！」

レンが毛むくじやらの腕にぶら下がって噛み付く。

「小僧が！」

獣人はもう片手で、後ろからレンの首を掴もうとした。

細い子供の首なんかひと捻りにしてしまいそうな容赦の無い鉤爪。

「レン、逃げて！　お願い逃げて！」

——ガツン！！

額に食い込んでいた爪が外れた。

落とされた地面から振り向くと、鍬（すき）を握りしめて必死の形相の村人。

さつき逃げ出した村の男達が、手に手に武器を持って、視界のない獣人の足を払って叩きのめしていた。

「ぼうや、ぼうや、大丈夫か？」

「は、はい、ありがとう」

「礼を言いたいのはこっちだ……」

獣人達はほとんどが打ち倒された。残った数人が縛り上げられ、皆に取り囲まれたが、まだ目を剥いて毒づいている。

「俺達をこの人数だけだと思ふなよ！　本隊はもつと肝心の、別の所を強襲している！」

「蒼の里か？　お前達には見付ける事も出来まい」

ユウジーンが二刀を収めながら冷静に言った。

「ふふん、もつと効率のいい場所だ。砂漠の西風の集落を押しえられたら、貴様ら、身動きが取れまい」

レンとカノンはその場で跳ね上がった。

朝の双子石は、それだったんだ！

「その小僧が蒼の里の皇子なら、尚更だな！」

——　お生憎サマ！

頭上に紫の光が広がった。

「あんた達のショボい鉤爪なんて、父さまの剣の一振りで、一網打尽だったわよ。西風のヒト達に指一本触れる前にね！」

「紫の前髪の女の子が、愛馬若紫と共に上空から降りて来る。
「リリ！」」

リリの馬は地上に着くと同時に、膝を折ってヘタリ込んだ。

「レン、若紫を頼むわ」

「な、……………分かった」

口答えし掛けたレンだが、竜胆色の馬のただならぬ様子に、慌てて切り替えて井戸へ走った。

「よくここが分かったな」

「当つたり前でしょ」

リリが摘まんで示した山吹色の布の小袋が、小さく明滅して震えている。

カノンはその時初めて、同じ物がユウジーンの逞しい胸にもあるのに気が付いた。

「西風に来ていたあんた達の大將は、敗戦を認めて、二度と手出しをしないって念書に血判を押したけれど……………あんた達はどうする？」

リリは腕組みして、縛られた残党を睨んだ。

蒼の長の念書は、ただの紙切れではない。破れない約束事の強い呪縛が掛けられている。

小さい癖に居丈高な小娘を前に、獣人達は忌々しそうに唸り声を上げた。

この場だけを上手く逃れて、やり返す事を考えている顔だ。

「大將に倅(なら)うのなら、念書代わりに鉤爪の手首を切り落としておくようにって、父さまに言い遣っているの」

獣人達は目を見開いてたじろいだ。

カノンも、今の残酷な言葉は聞き間違いか冗談かと、リリを見直した。

しかしユウジーンは一欠片(ひとかけら)の冗談も挟まない真剣な顔で、獣人に歩み寄り、縛った手首をネジ上げて、リリに向かって突

き出した。

女の子の小さい手の中でカマイタチの鋭い刃が渦巻いて、キンキンと高い音を立てる。

獣人の顔が恐怖で引きつった。

「ま、待ってー！」

カノンが獣人の前に立ち塞がった。

「そ、そこまでしなくてもいいだろ。もう降参しているのに、このヒト達」

「カノン」

リリは聞き分けのない子供を言い含める口調で言った。

「あんたの故郷を襲ったのよ。一つ道が違ったら、あんた、帰る所をなくしていた！」

端で馬に水を与えていたレンが、緊張の口を結んだ。

砂漠の家族に二度と逢えなくなる事を想像して、背筋を凍らせている。

「その子を遠去けて頂戴！」

リリは手の中の風の刃(やいば)をギラつかせながら、村人に命令した。

「ダ、ダメー！」

カノンは肩に掛けられた手を振りほどいて、縛られた獣人に覆い被さった。

「ダメダメダメダメ——！！！」

「カノン、子供の分際で、大人の決めごとに首を突っ込むモンじゃないわ」

「子供にだってダメな事くらい分かる！ これはダメ！ ダメなの！」

リリが瞳をたぎらせて、カマイタチをカノンの足元に投げ付けた。ジャツと音がして地面が鋤(すき)で引つ掻いたみたいに抉れ、子

供の靴先がパツクリ割れる。

獣人はカノンの肩越しにそれを見て、血の気が失せている。

「例えばあんたの言う通り、そのヒト達を見逃してあげたとしましよ
う。でも、蒼の長の命令は絶対なの。娘のあたしだからこそ、言い付
けに背いたのがバレたら、余計に厳しい罰を受けなきゃならない。
すなわち、そのヒト達の代わりに手首を切り落とす羽目になる。ご
めんだわ!」

レンが後ろで、持っていた水桶を落つことしそうになっている。

ユウジーンを見たが、獣人をネジ上げた形のままで無表情。リリの
いつもの大袈裟な脅しじゃない、本気なんだ。

執務室が色々厳しいとは思っていたけれど、そこまでとは……

「リリをそんな目に遭わせない!」

カノンは動かさず踏ん張った

「もしそんな事になったら、罰は僕が受ける。それが筋だろ! 誓い
を立てるよ、どうしたらいい?」

リリはそれには答えず、気圧されてオロオロしている村人に、眉を
つり上げて怒鳴った。

「とつとつその子をひっぺがして!」

「リリ!」

三人がかりで押さえられて、カノンは身悶えしながら叫んだ。

「リリはそんな事しちゃダメなんだ! そんな事をするのが当たり前
になつちやったら……」

——ジャキンソン!!

リリの投げた風が、鋭く光って空を切り裂く。

.....

目をつぶって嗚咽（おえつ）を洩らした獣人は、ゆるゆると顔を上
げた。

縛られていた太い縄と、五本の爪先だけが、バラバラと落ちた。

「.....」

「とつとと遠くへ去って頂戴! もっとも、その子供があんた達の代
わりに手首を切り落とされても構わないってんなら、いつまでもこの

辺りを彷徨（うろつ）いているがいいわ！」
「……………」

数人の獣人は目を伏せて、皆が睨み付ける中、自分達の馬を引いて山へ消えた。

去り際に、一人一人が一度だけ、青銀の髪の子の顔をチラと見た。緊張冷めやらぬ空気の中、リリが叫ぶ。

「レンー！」

「は、はいいい!？」

バンダナの少年は電気に打たれたみたい飛び上がった。

「あやし、蒼の里へ報告に行かなきゃいけないわ。この馬貸して頂戴」
言うが早いか、リリはレンの乗って来た大きな草の馬に飛び乗った。

「若紫の介抱をお願いするわ。しばらく動けない筈だから」

「う、うん、分かった。でも、あの……………」

「何!？」

「その馬、盗んで来たモノなんだ。馬事係のヒト、けっこうカンカンだと……………」

リリは再び眉をつり上げた。

「そんな些細な事、どうだっていいわよ！」

紫の娘は砂塵を舞い上げて急上昇し、あっという間に流星となって東へ消えた。

残された者は脱力感とともにシインとなり、村人の何人かは膝から崩れ落ちた。

まるで嵐の後。

「カノン」

呼ばれて、まだ肩で荒い息をしている少年は振り向いた。

ユウジーンが瞳に色んな光を湛えて、両手でギョツと抱いて来た。
「ありがとうな」

「ユウジ……………」

何か言おうとしたカノンだが、青年の懐にべったり付いた自分の血

を見て、額に怪我していたのを思い出した。
思い出した瞬間、稲妻みたいな痛みが来た。

夏蕾・VII

.....

——爪を武器とする者は戦闘前に毒を塗る。基本じやろうが。何でこの子に気を付けてやらなんだ。何人（なんびと）たりとも、面会謝絶じゃ！

割れ鐘のような頭痛の中、遠くにそんな声を聞いて、また意識を失った。

次に目を覚ますと、白い二重の天幕。

痛みはだいぶ治まって、薬の匂いのする清潔なベッドに寝かされているのが分かった。

御簾を開けて、医療師のおウネ婆さんが、湯気の立つ薬湯を持って入って来た。

「起きたか。何、多少キズから熱が出たが、大した事はない。とつとと元気になってベッドを開けとくれ」

そう言って、カノンを支え起こして薬湯を飲ませてくれた。

苦い湯がからっぽの胃に凍みる。どのくらい寝ていたんだろう？

「おお、そうじゃ」

婆さんはベッド脇の物入れから、蓋付きカゴを引っ張り出した。

干した果物や飴で固めた乾菓子が詰まっている。

「ハウスの子供らが持って来るんじゃ、毎日毎日」

（……皆、オヤツ少ないのに……）

「うおおー！」

入り口で声がして、頬を紅潮させたレンが飛び込んで来た。

「やっと目を覚ました！ カノン、この寝坊助！」

「静かにせんか、他の入院患者もおるのだぞ」

おウネ婆さんはひと釘刺して出て行き、レンは一応そろりとカノンの側に来て座った。

「僕、どのくらい寝ていたの？」

「七日間」

「そんなに!？」

「うん、話したい事が山程あるのに、なかなか目を覚まさないんだもん。傷、どう？ まだ痛い？」

「んん、大丈夫。レンも怪我したの？」

カノンは、レンの肘の大きな擦り傷を見止めた。

「ううん、これは今日の授業で落馬した」

「えっ？ レン……!」

「ああ、そうそう」

レンは抱えていた鞆から、真新しい頭絡を引っ張り出した。

「草の馬の訓練、受けられる事になったんだ。今日で二回目」

「ホント!?! レン、よかった……よかった!」

カノンはレンの肘を掴んでギョツと握った。

「何言ってるんだ、お前もだよ」

「えっ?」

レンは鞆からもう一つ頭絡を出して、カノンに突き出した。

それぞれの頭絡の額飾りにはお揃いの刺繍。レンのは赤で、カノンは色違いの銀糸。

「馬事係の頭目が、どうせお前ら禁じてても禁じてても草の馬に乗るんだろうから、自己流の変な癖を付けられちゃ堪らん、基礎からキチンと叩き込んでやらにやあ駄目だ! って。だからカノンも」

「……」

カノンは艶々した新品の頭絡を握り締めて、じつと見つめた。

胸が一杯で、何て言っているのか分からない。

「あ——ら、皇子サマのお目覚め?」

御簾を上げて、紫の前髪が姿を現した。

「ユウジーンに聞いた所によると、あんた大した血統だそうじゃない。

嬉しいわ、味噌っカスのあたしに、こおんな立派な親戚が出来て！」
リリは、レンが譲った椅子にどつかと腰掛けて足組みした。

「で、出任せだよ。あの場を乗り切る為の」

「ふふん」

慌てるカノンを品定めするようにねめつけて、リリは鼻を鳴らした。

「咄嗟によくそれだけ出て来たモンだわね。普段っからそんな願望あるんじゃないの？」

「まっ、まさか」

カノンは詰まった。この娘にごまかしは効かない。

「そ、そうだね、あるのかも……でも僕は、西風のカノンだ」

「そうね」

リリは素直に話を切ってくれた。

「あ、あの、リリ、西風は？ 西風はどうだったの？」

「無傷よ」

「本当に!？」

「誰一人大きな怪我はしていないわ、ルウシエルもね」

「あ、ありがとう、リリ」

ほおつと肩を降ろすカノンに、リリはちよつと優しい声になった。
「本当は、あたし達が行かなくてもよかった位なのよ。シドさんがしっかり、怪しい余所者の情報を掴んでいたの。モエギさんが亡くなって、急に暗躍し出したらしいわ。」

で、ルウシエルが闘える者を引き連れて、先回りして奇襲をかけたの。凄かったわよ、ルウの起こした竜巻。父さまの仕事なんて、残務整理位だったわ」

その残務整理が戦争には大切なのだ。そこで蒼の長の権威が生きて来る。

カノンは今一度、感謝の眼差しでリリを見つめた。

「それにあれ、あのヒトが大活躍だったわ。修練所の教官の」

「スオウせんせ？」

レンが口を挟んだ。

「そうそ、囚役を買って出て、単騎で獣人達を狭い谷へおびき寄せたの。なかなかの度胸の持ち主だわ。西風にもあんなイイオトコ、いるのねえ」

「げえー！ リリ、マッチョが趣味なの？」

「バアカー！」

なんだか、もういつものリリだ。山の集落での稲妻みたいな目のリリは、夢だったのかと思えた。

「元氣そうだったと執務室に報告しておくわ。退院はいつなの？」

「今日、もう、出られるって」

「あ、あら、そう」

立ち上がり掛けていたリリは、ちよつと動揺した。

「じゃあ、後で、荷物、取りに行くわ、レン」

「??」

「リリ、カノンが入院している間、ずっとうちに泊まっていたんだ」

レンが言っ、リリは罰悪そうにした。

「カノンのベッド、借りていたわ。事後承諾でゴメンなさい」

「あ、ううん、構わないよ」

そんなにお父さんといたくないのだろうか？ そっちの方が心配だ。

「リリ、荷物は明日でいいじゃないか」

レンが膝をポンと叩いた。

「今日は僕、床で寝るから、カノンの退院祝いやろうぜ。パジャマパーティー第二弾だ」

「えっ、ホント？ いいの？」

素直に喜ぶリリを見て、カノンも何だかホッとした。

リリには色んな顔があるんだろうが、こんなリリでいられる自分達でいよう……と思った。

リリが出て行ってから、カノンはレンの手を借りて、ベッドから足を降ろして立とうとした。

まだ地に足が付かない感じでフラフラする。

「あんま無理すんなよ」

「うん、だけれど、早くお礼を言いたいヒトがいるの」
「……」

赤いバンダナの少年は眉間にシワを入れた。

皆にお礼を言われるべきなのは自分なのに、一体この上誰に感謝したいってんだ？ こいつは。

あの日、気絶したカノンを診療所へ運んだ後、リリとユウジーンとした会話を、レンは話すつもりはなかった。

「まあつたく、あの子には恐れ入るわ。こっちの思惑以上に、しつぽり動いてくれるんだから」

「えっ、どういう事？」

「手首を切り落とすなんて、父さまが命令する訳ないじゃない」

「そうなの？ 僕、思いつきり本気にしてびびっちゃった。何の為にそんな嘘？」

「剣よりも効く武器が世の中にはあるって事さ」

ユウジーンが、自分の懐に付いた血をつくづく眺めながら言った。

「少なくとも奴等は、二度とこの地に足を踏み入れない」

それから二人が何だかしみじみ黙ってしまったので、レンも口を閉じた。

いつだって、青銀の髪の親友は、自分の三步先を歩いている。

友達や大人達、女の子達が、気安い自分に話し掛けながら、このミステリアスなオレンジの瞳の少年をチラチラと見ているのを、レンはちゃんと知っていた。

レンに支えられながらカノンが向かったのは、厩だった。

馬房をくまなく見て回ってみたが、あの赤い瞳の馬は見付けられなかった。

彼が来てくれなかったら、ユウジーンの危機に到底間に合わなかった。

「一番にお礼、言いたかったのに」

「僕も、カノンは馬を盗んで飛んで行ったと思ったんだ。でも、あの村

に着いた時、草の馬はユウジーンのしかいなかったから、不思議だった」

「よおー！ レン！」

馬事係が現れてカノンは緊張したが、レンは軽く片手を上げた。

「こんにちは、おじさん」

カンカンだったという厩係ともうこんなに仲良くなっているなんて、さすがはレンだな……と、カノンはいつものように感心した。

「ああ、俺も飛び去るお前の後ろ姿は見たが。こつちで居なくなっていたのは、レンが盗んだ一頭だけだった。本当に草の馬だったのか？」

「そう言われると自信がない。」

初めて独りで飛んだので、怖くてひたすらしがみついていた。

ただ……

「凄く速かったけれど、優しい馬だったよ。僕が慣れていないのを知って、静かに飛んでくれていた。」

確かに見た事がない変わった色をしていた。白っぽくて、粉を吹いたみたい……」

立ち止まる足音がして、振り向くと、瞳を大きく見開いたユウジーンが立っていた。

笑いたいのか泣き出したいのか、何とも言えない表情でカノンに歩み寄って、口を開く。

「砂漠の枯れ草みたいな、ぐしゃぐしゃなたてがみだったろ」

「?? うん」

「地平の夕陽みたいな、真っ赤な瞳をしていたろ」

「うん、知っているの？ ユウ……」

ユウジーンが目を細めて、ここにはないモノを見ている感じなので、何となく話し掛けるのが躊躇（ためら）われた。

ハイマツの丘は丈の高い夏草の海の中、相変わらずポツリと漂流船のよう。

てっぺんの瓦礫の上に、一人の大きな人影と、大小二頭の馬影。

大きな人影は、蒼の里の前長のノスリ。

現役時代は強面（こわもて）だったが、今ではすっかり目尻の下がった好好爺。

大小の馬影は、恰幅のいい彼の馬と、ぐしやぐしやなたてがみの白蓬（しろよもぎ）色の馬。

二頭の馬は仲良さそうに戯れ、ノスリは静かにそれを眺めている。

「シンリイは元気か？ 馬を寄越してくれてありがとうと伝えてくれよな」

馬に伝言など出来る訳はないのだが、白蓬なら可能かも思っている自分に、ノスリは一人苦笑する。

遊び足りた二頭が夕陽をあびて丘を登って来る。

白蓬の馬が、どこで見付けたか、橙（だいたい）色の花の蕾をくわえている。

「何だ？ くれるってのか？ いや……… ナーガに渡すのか？」

夕陽みたいな赤い瞳でノスリをじっと見つめてから、花を受け取らせると馬は満足したように、また仲良しの大きな馬にじやれ付き始めた。

「ありがとうな、うん、そうなんだ。ナーガは今、至上最低に不調なんだ」

—— 西風のモエギは、ナーガの人生にとって、懸想（けそう）とか、そういった次元から超越した、半身のような存在だった。共に長となる運命に生まれ、苦しい青年時代を分かち合った、同士だったのだ。

蒼の長だって……生き神様だって、心はあるし、悲しい時は悲しい。

「夜くらいは一人きりにして、泣く時間を作ってやらにや」

やがて一番星の下、白蓬は舞うように上昇して藍の空に溶ける。

「何も無い時でも、時々顔を見せに来ておくれ、シンリイよ」

ノスリは手にした初夏の花蕾を眺めながら、しばらくそこに佇んでいた。

あの子は今、何処に住まっているのだろうか。

今回多分、ナーガが不調で至らない中にユウジーンの危機を察知して、『足りるだけの助け』をしてくれたのだろう。だが、それ以上の手出しは、して来ない。

「あの子はもう、そういう存在なんだな」

く エピローグ く

修練所の穏やかな午後。

「行つくぞお！」

広場で澆刺（はつらつ）と駆け回る、赤いバンダナのレン。

「危ない！ 避ける！」

——ベゴン！

散らばった書物の中で頭を抱える、青銀の髪の少年。いつもの光景。

「まったく、蹴り玉を引き付ける磁力でも発してるのか？」

駆け寄ったレンが助け起こすのも、いつもの光景。

「やる？ カノン」

「ううん、今日中に訳しておきたい書物があるの」

「そうか、頑張り過ぎて図書室の壁の染みになるなよ」

「なったらご飯運んでよ」

「任せとけ」

二人は笑い合って別れた。

カノンは広場の賑わいを背にして、建物の自習室へ。

レンのやる事、自分のやる事、それはきつと別々の物なんだ。

いつものように、頭の中のソラの写本を辿りながら原本を繰り、流石のソラの語学力に感心する。

そしてある時点でふうつと気付く。

ソラが、自分は読める古語をわざわざ訳して、難語の注釈まで書き込んだ写本。

それは、西風でその写本を待っていたルウシエルの為、そしていつかその書物に触れる、僕の為だったんだ。

今日もハウスの子供達に『歴史の授業』の約束をしている。

いつの間にかハウス以外の子供も混じるようになった。

カノンの話す歴史語りの一つ一つにソラの心が染み込んでいるのを、子供達はちゃんと感じ取っていた。

あの子達の誰か一人でも、未来にここと西風を、そして大きな大河の流れとを繋ぐ者になれば、それが『ソラの書物の部屋』の行き着く先なんだ。

本を閉じてカノンは、窓辺を見やった。

軟らかい陽射しの中で、長い髪をかき上げながら一心に写本をする青銀の妖精が、そこにいる気がした。

く夏蕾・了く

みつつめのおはなし

夏巡（なつめぐる）・Ⅰ

「ああ、もお！　そこじゃないっつたら！」

夕方の埃っぽい執務室。

山のような未処理の書類の前で、紫の前髪のリリィのヒステリー声が響く。

怒鳴られたのは、これまた山のような書類を抱えて右往左往する、赤いバンダナのレン。

「東の地域の書類はそっちのファイルだつて言っただでしょ！」

「こ、これは東でも川の分野だからこつちだろ。あうう、入らないぞ」

「川なら川って言いなさいよ！　そのファイル、もう一杯じゃない？」

川の中でも分類しなきゃなんないっていうの!?　あああ、もおくく！」

レンは、唇の先っぽまで出掛かっている口答えを呑み込んで、この忌々しい作業をとつと終わらせようと努力していた。

しかし片付けても片付けても、書類の山は一向に減らない。片付けが苦手な者が二人寄ると、厄介も二乗になるのだ。

「ふおくくいお前ら、キリキリ働けえ。そんなペースじゃ日曜もご出勤だぞ」

長椅子にドツカと収まって、執務室統括者のホルズは、片目を開けてのんびり茶をすすする。

「げー、日曜!?!」

レンが慌てふためいて手を早めた。

明後日の日曜は、蹴り玉の試合があるのだ。

ただの試合じゃない。里をあげてのお祭り行事、いわゆる運動会みたいな物だ。

子供がそれに参加出来ないなんて、子供にとっては一大事なのだ。

「な、何であたしがこんな目に…」

リリはいつもの自信満々つ振りは何処(いずこ)へ消え失せたか、泣きそうな声で頭を抱えている。

「自分で、カノンの分の罰則を肩代わりするって言ったんだろぅが」「厩掃除だと思ったからよ。こんな頭の痛い作業だと分かっていたら……づづ……」

執務室のメンバーが戻る時間になって、ようやく本日の作業終了のお許しを貰った二人は、ヨレヨレの足取りで帰り道を辿った。

「カ、カノンはいつ目を覚ますの?」

「今朝のおウネ婆さんの話だと、まだしばらくは眠っていそうだって。でも、毒にやられているんだから、起きても無理させられないよ、リリ」

「……」

「そんなに書類が苦手?」

「何がどう苦手か説明も出来ない位苦手だわ」

リリは書類に書かれた文字を見ると、頭痛がして具合が悪くなるというのだ。

「意外だな、執務室の一員なんて、超エリートで弱点なんてないかと思ってた」

「誰にだって苦手はあるわよ。だいたい、あの文字って代物? 何であんな同じようで違う形の羅列を、皆すらすら理解出来るのよ?」

「そ、そう?」

『書き』は、考えながらゆっくりやれば何とかなるわ。でも『読み』つてのがさっぱりよ」

レンは呆れて肩を竦めた。文字なんか、修練所の低学年で普通に習うし、生きていく内に自然に身に付いて行くモンだろ?」

「修練所は、卒業したんだよね?」

「んん、まあね……」

リリはちよつと口ぐもった。

「あ、あたしは、石板を使わなくてもいいって決まりだったの」

「はあ？」

「だから、石板を使う数式や読み書きの授業は、出なくてもよかつたのよ」

「何だそりゃ？ 数式やんなくていいなんて夢のようだぞ。誰がそんな事を決めたの？」

「あのヒト、……サオせんせ」

「ふええ？ せんせ、ズルいなあ。長娘だからって鼻眞じや……」

最後まで言い終わる前に、目の前に二本指がビツと突き出され、燃えるような目のリリがズズイと顔を寄せて来た。

「あたしの事は何て言ってもいいけれど、あのヒトの悪口は、許さないわヨ！ あんただらうとー！」

「う、うん、分かった、了解……」

レンが両手を上げて降参ポーズをし、リリは興奮した自分に恥じ入った様子で、目を逸らして指を下ろした。

そして三步先へ走って、切り替えるようにクルリと回った。

「カノンの所に寄って行くでしょ？ 寝ている間にヒゲ描いちゃおうか？」

「先っぽの渦巻いてる奴か？」

レンも気を取り直して笑顔になって、二人並んで診療所に向かって駆け出した。

(それにしても、リリにも苦手な物があつたんだな)

レンは走りながら、新たな発見に感じ入っていた。

(しかも読み書きなんて簡単なコト。執務室の一員つたって、案外長娘だから特別に入(はい)れているだけなのかもしれない)

翌日も、修練所の終了の鐘と同時に、蹴り玉の誘いも断って、レンは執務室にダッシュした。

とにかく今日中に罰則を終わらせて、明日の蹴り玉大会に出場したい。

「おお、ッ苦労だな」

大机のホルズが、書類の山を積み上げながら待ち構えていた。

「こんにちは、リリは？」

「今日の任務は厄介だからな、戻れても夜中になると思うぞ」

「え、ええ——っ！」

「リリは執務室の仕事が本業なんだ。子供の本業は勉強と罰則。文句を言う前に手を動かせ」

「うう……」

過去の書類の山を分類して、閉じて、棚に収める作業。

山積みになった未処理の書類は見事なまでにバラバラで、リリでなくとも文字の羅列を見ていると気持ちが悪くなる。

文字大好き書物中毒のカノンなら楽々こなすのだろうか？ まったくあの時、自分が悪者に引っ搔かれればよかった。

「いやダメだ」

書類を抱えながらレンは頭を振った。

ケガしちやったら蹴り玉大会に出られないじゃないか。

「何が駄目なんだあ？」

ホルズが長椅子で、独り将棋（シヤタル）の駒を並べながら、呑気に聞いてきた。

暇ならちよつとくらい手伝ってくれてもいいのに……

「あの、ホルズさん。実は明日、蹴り玉の大会があるんです」

「おお、知っているぞ。お前、上手いんだってな」

「は、はい、それで……」

「じゃあ、さっさと終わらせてくれ。罰則が理由で試合にエースを欠くんじゃ、俺がガキどもに恨まれっちまう」

「……」

泣き落としても効きそうにないか……

その夜は遅くまで執務室で粘ったが、ユウジーンが戻った時、いい加減ホルズに追い出された。

もつとも、どう頑張っても今日中に終わりそうになかった。

半泣きで俯（うつむ）きながら歩くレンの横で、ユウジーンが気の毒そうに慰める。

「罰則はケジメだからなあ。こればかりはどうしてあげようもない」

「だって、そもそも馬を盗んだのは、ユウジーンを助けたいからだっただよー！」

「ホルズ様だって解っているさ。ただやっぱり、許しちゃうと他の子供に示しが付かない。草の馬の訓練が受けられる代償みたいな物だからね。まあ今回は残念だったって事で……」

「今回？ 僕、来年はいないんだよ！」

レンはその夜は悔しい気持ちで眠れなかった。
やりたい事が自由にならない。子供って損だ。

日曜日。

忌々しい程の晴天。

こんなにも明るい朝なのに、起きた瞬間鉛みたいな気持ちになるなんて。

レンがどんよりした表情で顔を洗っていると、後ろから蹴り玉が飛んで来た。

「わっ!？」

受け止めた正面で、ユウジーンがウインクして言った。

「よー！ 悩める青少年！ 行けるみたいだぞ、蹴り玉大会」

「えっ?」

「明け方リリが戻ってね。今日は自分が一人で罰則やるからって、ホルズ様に掛け合ってくれたらしい」

「ホントに?」

「本来なら徹夜明けは休養日なんだ。リリに感謝しろよ」

「うん！ うん！」

レンはたちまち子供らしく元気になって、蹴り玉をドリブルしながら会場へ向かって駆けて行った。

「ゲンキンだなあ」

見送りながらユウジーンも、懐かしそうに目を細めた。

まあ、自分だつてあの位の年頃は、蹴り玉が人生の最重要事項だつた。

(ただ、リリ……あいつ、大丈夫かな……)

大会場所の修練所の広場は、参加する子供達や応援の家族で賑わっていた。

たまの行事に、皆楽しそうにニコニコしている。

就学前の小さい子が駆け回り、気の早い家族は土手に宴席を広げている。

レンが駆け付けると、同級生達は歓声を上げて出迎えてくれた。

よかった！ 参加出来て、ホントに。

最初の方は下級生の試合だったので、レンは仲間達と土手に座って見学していた。

「よー！ 馬盗人（うまぬすつと）小僧ー！」

人聞きの悪い声に振り向くと、見知った厩番の青年がいた。

馬事係の中で一番若いこの青年は、レンが馬を盗んだ馬房の係りで、戻ってからこっぴどく叱られた。

しかし、レンが草の馬の訓練を受けられる許可を、何でか嬉しそうに持って来てくれたのも、彼だった。

「弟が出場するんだ。お前の対戦相手のチーム。俺がコーチしたんだから、なかなか手強いぞ」

「へえー！ お手柔らかに」

青年は、レンに麦菓子を差し出して隣に腰掛けた。

「懲罰が厩掃除じゃなくて、時間のかかる書類整理をやらされているって聞いて、参加出来ないんじゃないかと心配していたよ。間に合つてよかったな」

「いえ、罰はまだ終わっていないけれど、リリのお陰で来られたんです。今日は一人で書類整理を引き受けてくれて。後で埋め合わせしてやんなきゃですよね」

「リリ……？」

青年は不思議そうな顔をして首を傾げた。

「リリ……って、あのリリだろ、長娘の？ 彼女、書類整理なんか出来るのか？」

「えっ？」

「俺が修練所の高学年の時、あの子、入所して来たんだけど」

「……」

「いや、そうか、努力して読めるようになったのか、彼女」

青年は自己完結して話題を切りうとした。

「リリ、修練所に入った時は随分苦労したって言っていました」

レンはわざと知ったか振ってみた。

思い通り青年は、この仲良しっぽい少年にはリリは何でも話しているんだろうと、気を許してくれた。

「そう、本当に、当時はどうなる事かと思ったな。文字を覚える事を強要した教官を吹っ飛ばすわ、教室の黒板を粉々にするわ、挙げ句にはヒステリー起こして屋根のてっぺんで大竜巻だもんな。」

誰も取り押さえられなくて、俺ら半日外へ出られないで震えていたっけ。あれは強烈だった」

「……………」

「さすがの長様も、あの時は困り果てていらしたな。入所三日で、早、就学する事を諦めて」

「そう？ でも、修練所は卒業したって……」

「ああ、あのヒト」

青年は、遠くで係員として走り回るサオ教官を指した。

「あのヒトが、毎日彼女ん所に通って、我慢強く話し合ってたって。んで、彼女は文字の授業は受けなくて事で修練所に通い出したんだ。父兄とかあちこちから文句が上がったのも、サオせんせが説得して回ったって。良いせんせだよな。俺、今でも好きだよ」

「……………」

「聞いていなかった？ 彼女から」

「う、ううん。少し聞いてた。そ、そう……数式やんなくていいって、お得だなあって思った！」

「お得ねえ…… 確かに、上級生の講義に勝手にバンバン出まくって、好きな講義だけで単位の帳尻合わせて、とっとと修了しちゃったけれど。あれ、お得っていうのかなあ？ 友達もいなくていつも独りでさ。」

だから今、お前らとつるんでるの見て、不思議な感じ……ってのが正直な感想さ。この間もビックリだったし」

「この間って？」

「お前が盗んだ馬に乗って、彼女が帰って来た時。馬事係の詰所に振（ね）じ込んで来たんだ。レンの馬泥棒の責任は自分にあるんだって」「え?!」

「何だか、カノン……？ あの子が予知を早くに伝えて来たのに、取り合わなかった自分がイケなかったって。彼女があんなに必死で沢山喋るの、初めて見た」

「……………」

「それで、まあ、事情も事情だし、お前の草の馬の訓練の凍結も解除になったのさ。これは聞いていなかったら？ 伝えておいた方がいいと思っただから」

「……………」

夏巡・Ⅱ

広場の端から蹴り玉をドリブルしながら、一人の少年が駆けて来た。

「兄ちゃん、ヒールキック教えて！」

「よし来た。じゃあな、レン」

青年は麦菓子をもう一つレンに渡して、土手を滑り降りて行った。

レンはふらりと立ち上がって、吸い寄せられるように、係員の詰所に歩いた。

明るい広場の歓声が、さっきと比べて少し遠くになった気がする。

詰所に目当てのヒトが、丁度一仕事終えて休んでいた。

「サオせんせ……」

「よおー！ レン。参加出来てよかったな」

「せんせ、あの、今一つ聞いてもいいですか？」

「何だ？ 相手チームの弱点は教えられないぞ」

「リリの、事です」

「ああ、何だ？ リリの弱点も教えられないぞ」

「いえ、リリ、本当にまったく文字が読めないんですか？」

「……………」

「だって、カノンに借りた物語の本とか、手紙とか、普通に読んでいるから」

「ああ、レン、それは…… リリはね、文字の形から内容を読み取らないんだ」

「??」

「書かれたモノから、書いたヒトの心を読み取れるんだ。それはそれで凄い能力だと思うがね」

「……」

「その代わり、ただの形としての文字を認識出来る普通の能力を、神サマは、くれ忘れちゃったんだな」

「……」

「分かりにくいか？ そうだな、私も当時は理解するのに時間が掛かった。そういう見え方の子供もいるんだって事に」

「あの、じゃあ……じゃあ、ただの資料とか報告とか、心の入っていない書類は？」

「ちんぷんかんぷんだろうな」

「!!」

「あああ、もう！ これ、何て書いてあんのよお!!」

紫の前髪を掻きむしる娘に、ホルズは長椅子から顔を伸ばして覗き込んだ。

『西の川の治水に関する陳情書』だ。経過と事後報告も纏めて綴じておいてくれよ」

「ジ・ゴ・ホウ・コク……？ どれよお？」

「これだよ、リリ」

「??」

大机の横で、当たり前前みたいに立って書類を差し出している赤いバ
ンダナの少年に、リリは元より、ホルズも目を丸くした。

「とつとつやっちやおうぜ」

「あ、あんた！ 蹴り玉の試合は☒」

「ん、うん」

「うんつて、どうしたのよ！」

「いいんだ」

「いいって事ないでしょ！ あんた、来年はいないかもしれないのよ。

一生にいつぺんの大会でしょ！」

「うん、だから、勉強の成果を上げて、来年も留学させて貰えるように努力するよ」

「そういう事じゃなくて！」

「リリとこうやって作業する今も、多分一生にいつぺんだよ」

「……………」

「ん・あ——・・・」

ホルズが伸びびをして立ち上がった。

「飯の時間だ」

「へ？」

「俺は弁当があるが、お前達は？」

「持って来ていませんよ。って、早過ぎませんか？」

「だって、お前らと昼飯食べたってお仲間が来ているぞ」

「??」

ホルズが視線で指す窓辺と戸口に、数人の少年が鈴なりに顔を連ねている。

さつきレンが、『ごめん！』って頭を下げた別れて来たチームメイト達だ。

「へえ〜執務室ってこうなってるんだあ〜」

「ね、ホルズさん、試合が終わったら俺らも手伝うから、レン、試合に出してあげて」

「おねがい！」

子供達の前に進み出たホルズは、しかし腕組みして怖い顔をした。

「手伝うのはダメだ。二人がやるべき罰則だからな」

「ホルズさあん……」

「第一、レンには今日の罰則は休んでいい許可を出しているぞ。俺を悪者にしないでくれ。ここにいるのは奴の勝手だ」

「レン〜」

少年達はレンを凝視した。

「ごめん、みんな」

レンは重ねてもう一度謝った。

「オンナノコに罰則押し付けて、自分だけ蹴り玉やってるなんて、カッコ悪いじゃん、そうだろ？」

「う〜ん……じゃあ、リリも連れてけばいい！」

「うん、そうだそうだ、連れてこう！」

「な、何でそうなるのよ!?!」

目を真ん丸にして後ずさるリリに被さって、腕組みしたままのホル

ズが子供達に迫った。

「リリには罰則休みの許可を出していないぞオ」

「ホルズさんってばあ〜」

「しかし、お前らと飯を食うのは許す。飯の時間、何処で何をするのも関知はしない」

「??」

「とつとと連れて行け」

「やったあ！ 行こうぜ！」

少年達が執務室に雪崩れ込んで、レンの手を取った。

「ありがとうございます、ホルズさん！ ありがとうございます、みんな！」

レンは皆にお礼を言って、それからドサクサに紛れて隅に行ってしまったりりに、手を差し伸べた。

「行こう、リリ」

「だ、だから、何勝手に決めてんのよ！」

壁に張り付く女の子に、男の子達も手を差し出した。

「行こうぜ、リリ」

「応援頼むよ！」

「行こう〜」

生まれて初めての事態に目を白黒させる紫の前髪の娘に、レンはもう一度言った。

「行こう、リリ！」

「・・・ふふん、そんなに言うのなら……」

リリのごまっしやくれた言い方は中途半端に引きチギられた。

皆に引つ張られて、いきなりダッシュで走らされたからだ。

「ちよ、ちよっとは手加減しなさいよ！ あたし、徹夜明けなのよお〜」

子供達の輪の中で遠去かるリリの悲鳴を、ホルズはにこやかに見送った。

(エノシラ、シド、凄いぞ、お前さんらの息子は)

里へ来たばかりのリリを、自分はじめ、大人達は扱いあぐねた。

とにかく、他の子供が当たり前に出来る事に、ことごとく躓(つま

ずく) くのだ。

今だって、過ぎた能力の気難しい娘は、一部の者を除いて、里の中で孤立している。

(大した息子を送り込んでくれたよ。有り難うよ、お二人さん)

大机にはレンが決勝ゴールを決めた記念の蹴り玉が乗り、その横で、とうとう二人の子供は書類整理をやり終えた。

「やったあ!」

リリは文字を読めないで割り切って、役割を分担し、作業を効率的に進める工夫をして、その日の夜には全ての書類が棚に収まった。

「おお—— ご苦労さん、二人とも」

ホルズがいつの間にも用意したのか、熱い飴湯を手渡してくれた。

「有り難うございました、ホルズさん」

「俺は何にも手伝っちゃいない。お前ら二人だけでやり遂げたんだ。……ほい」

ホルズは、これまたいつの間にも用意していたのか、小さな木フダを取り出して棚に貼り付けた。

レンとリリの名が綺麗に彫られている。

「お前さん達の努力の証だ。ずうっと残るんだぞ」

「マジで?」

「ああ、奥の棚を見てみる」

「え? わあっ!」

奥の書棚もよく見ると、子供の名のフダが幾つも貼られていた。

「へえ——」

「そのジュジュってのはユウジーンだ」

「ホント? 凄い、一杯ある! ユウジーン、罰則チャンピオンだったの?」

「はは、違うが……」

ホルズが言葉を止めたので、レンもその視線を追った。

リリが、ユウジーンの棚より一つ前の棚を凝視している。棚の列の一番最初だ。レンは近寄って、その棚のフダを見た。

「シン……リイ？ 子供の名前じゃないね？」

「ああ……」

ホルズはちよつと目を細めてから、リリに話し掛けた。

「あいつもここで、ちよつとの間、執務室の一員だったんだ」

「そう……そうなの。そっか、あんた、ここに、いたんだ。ここで、過ごしたんだ……そっか……」

リリは砂漠の遺跡で宝物を見付けたみたいに、木フダの埃を指で拭った。

「しんりいのナマエ……シンリイのカタチ、あんた、こんな文字だったのねえ」

く夏巡・了く

よつつめのおはなし

夏紫（なつむらさき）・Ⅰ

「ちよ、ちよつと、待ちなさいよ！　こちらあ！」

夏草むせかえる、深山の繁み。

灌木の下をでつかいヤマアラシが走る……と思いきや、リリのザンバラ頭だった。

前方には、二足歩行のタヌキ風物怪（モノノケ）。

「このおっ！」

リリの放った風礫（つぶて）が二度三度土煙を上げるが、タヌキはヒョイヒョイと避け、前歯を見せてケタケタと笑った。

「このっ、キャツ、いたたた！」

いつの間に、誘い込まれた棘（いばら）の繁みで、長い髪を絡み取られて動けなくなるリリ。

「ああつ、もおくく」

タヌキはペロリと舌を出して、この隙にと前を向いた所で、逞しい足に行く手を阻まれた。

「ほおら、捕まえた。大人しくしろ」

ジタバタするタヌキを両手で抱えて、コバルトブルーの青年が立ち上がる。

「ユ、ユウジーン」

娘は棘を引きちぎりながら、ムスツとして青年を睨んだ。

「あたしの仕事に手出ししないでよ！」

「ああ、悪い悪い」

と言いつつ、青年はあんまり悪いと思っていない風で、タヌキを目の前に持ち上げて覗き込んだ。

「ここはお前さんの住む場所と違うんだ。木霊達が困っているから、自分の領域へ引き揚げてくれるかい？」

「そんなんじやダメよ！ 言つたつて何回も来るんだから。お仕置きで身を持つて分かせないと！」

娘が二本指を振り上げる前に、タヌキは青年の手をすり抜けて、繁みに飛び込んで姿を消した。

「ああつ、何で放しちゃうのよつ」

「手出しするなつて言つたのはリリだろ」

「~~~~~！」

リリは葉っぱを絡ませたまま立ち上がつて、膨れつ面でユウジーンを睨み付けた。

「何しに来たのよ」

「いいじゃない。俺の仕事早く終わったし、ここ帰り道だし」

青年は近寄つて、紫の前髪に絡んだ茨を取ろうとした。

その手を払い除けて、リリは踵を返してズンズン歩く。

「ね、こういう細かい説得系の仕事は苦手だろ？ 苦手なモノは苦手つて割り切つて、手伝つて貰つたつていいじゃない。みんなもそうしてんだし」

繁みをバキバキかき分ける娘の後ろを、ユウジーンはゆっくりと着いて行く。背丈が大人と子供なので、歩幅が全然違うのだ。

「余計なお世話！ あたしは一日も早く何でも出来るようにならなきゃなの！ 手伝つて貰つている暇なんかないの！ でないとこの間みたいに……」

「リ——リ！」

「何よつ！」

不機嫌に振り向いた娘の真ん前に、コバルトブルーの真剣な瞳があった。

「な、何よ……」

「それはもう、気にしなくていいつて言つただろ？ 結果的に大丈夫だったんだし。俺、何とも思つていないよ」

「うつ、うるさ——いつつ！ うつうるさいうるさいうるさいつ」

肩に掛けられた手を思いつ切り払い除け、リリは怒鳴るだけ怒鳴つて、藪を物ともせず走り去つてしまった。

後にはヒラヒラ舞う葉っぱの中に立ち尽くすユウジーン。
困ったものだ。

この間の事件……ユウジーンが山の集落で獣人に襲われてあわやの目に遭ったのを、リリは自分のせいだと引き摺って、ずっとピリピリしているのだ。

確かに、カノンが予知を一番に伝えたのはリリだったが、その後ホルズにだって他の大人にだって、当のユウジーンにだって、彼は伝える機会があったのだ。

「伝えて貰えなかったのは、俺がカノンとの信頼関係を築けていなかったからだよ。リリには何の責任もない」

何回もそう言っていて宥めているのだけれど、あの自分中心が身体の芯まで染み付いている娘は、何でも自分のせいにして、殻に隠（こも）ってしまうのだ。

執務室に入ってもう何年も経つのに、いまだに他のメンバーと馴染もうとしない。

何かと言うと長娘、長娘、つて垣根を作り、出来ないくせに何でも一人でやろうとする。

元々魔法力だけは人並み外れて強いもんだから、周囲も迂闊に手を出せず、ますます孤立させてしまうのだ。

「優しくって純粹で、いい娘なんだけれどなあ・・・」

「え？ えええ——っ？」

自宅でもう一度漏らしたその言葉に、芋の皮を剥いてたレンが悲鳴を上げた。

「や、優しくって純粹い?！」

「純粹だろ？ 小さい時からあのまんま。ちつとも変わらない」

ユウジーンは岩塩をナイフで削りながらシレッと言った。

「ガ、ガキンチョなだけなんじゃないの?」

「ガキンチョ……うん、そうだな。大人の朱に染まらないんだよな、あ

いつ」

レンはマジマジとユウジーンを見た。

ここへ来た時から何となく思っていたんだけど、リリが執務室で働いていられるのって、このちよつとズレて寛容なユウジーンのお陰なんじゃないか？

芋の皮をバラバラと落としながら立ち上がって、少年は鍋を引き寄せた。

「でもユウジーンが悪かったね。そりやリリ、怒るよ」

「ふえ、何で？」

『何とも思っていないよ』って、ダメだろ？ 『お前には何も期待していない』って意味じゃん。ユウジーンがそのつもりでなくても、そう受け取っちゃうんだよ。あいつ、プライド高いから」

「そ、そうか、複雑なんだな」

「逆！ 単細胞なだけ。だからガキンチョだっただ」

ユウジーンは削った塩をレンに渡し、ガラクタを端に寄せて食卓を作りながら思った。

永らく隣に居ても越えられなかったリリの垣根を、この少年はヒョイヒョイと越えて行く。彼が来てからリリの表情が目に見えて生き生きし出した。

さすがあのエノシラさんに育てられただけはあるな、と、しみじみ感謝するユウジーンだった。

カノンが退院してからも、リリは夜になるとユウジーン宅を訪ねて来ては入り浸って、そのまま泊まってしまいう日が続いている。

「僕、床で寝るの、好きになっちゃった」

とかレンが言っているし、あのリリが、少年二人といえる時は、まるで子供時代を取り戻すように無邪気になるので、好きにさせていた。

しかし、彼らとは仲良く出来ても執務室では相変わらずだし、あの厳しいナーガ長が娘に関しては何かと執務室でも心配で、何かと気苦労の絶えないユウジーンでもあった。

「う・・・」

傷口を見たおウネ婆さんの呻きを聞いて、カノンは（やっぱり……）と、心で呟いた。

「う、うむ、熱も引いたし、もう膿む心配もなからう。毎日の清潔を怠るでないぞ」

「はい、ありがとうございます。じゃ、包帯はもういいんですか？」

「い、いや、今日の所は巻いておこう」

——額に爪が食い込んだ時の感触から、覚悟はしていた……

診療所を出ると、もう夕暮れだった。

しかしカノンの足は、帰宅とは別方向へ向かう。

「どっちへ行くのよ」

振り向くと、いつもの感じで腕組みをした紫の前髪。

「や、やあ、リリ」

「怪我人がウロウロと道草食ってんじゃないわよ」

「……………」

「何よ？」

「今日診療所へ寄る日だって知っていて、迎えに来てくれたの？」

「なに自惚れてんのよ。ついでよ、こっちに用事があったの！」

「ふうん、そうなんだ」

カノンは逆らわず、並んで歩いた。

ぼさぼさの紫の前髪は彼より拳ふたつ低いけれど、彼女の方が年上だ（幾つ上かは知らない）。

「で、どうだったの？」

「うん、もう通院しなくてもいいって」

「そ、良かったわね」

返事をしない少年を、リリは見上げた。

夕闇で表情が見えないけれど、多分『良かった』って顔はしていない。

「どこへ行くつもりだったのよ」

「うん、ハウス。散髪して貰おうかなって。上級生の女の子に髪を切

るのが上手な子がいるんだ」

「……………」

「ほ、ほら、イメージチェンジ？ レンみたく前髪おろして遊ばせて、てっぺん立てて、イマドキ風にしようかなって。えっと、その、そしてたらレンみたいにモテるかな——つとか」

リリが立ち止まったので、カノンも止まった。

「それならあたしが切ってあげる」

「えっ？」

「櫛なら持っているわ。それと小刀。はい座って座って」

少年は勢いで路傍の柵に座らされた。娘は愛用らしい胡桃の櫛で、髪をガシガシ梳き始める。

「え、いや、待って」

「あたしのセンスを見くびるんじゃないわよ。そうね、あんたの髪だとレンの真似は無理ね、コシがないったら。いつそスキンモヒカンとかどう？ インパクトあるわよお」

「待って待って待って——！」

本当に髪の根元に刃を当てられて、カノンは慌てて逃げ出した。

リリは追い掛けはせず、肩を降ろして小刀を鞘にしまう。

「そんなに目立つの？ 額の傷痕」

数歩向こうでカノンも止まって、ゆっくり振り向いた。

「うん、まあ」

「……………」

「あの腹の据わったおウネお婆さんが凄い顔をするんだもん。スキンモヒカンなんかよりインパクトあるよ、きつと」

「見せてご覧なさい」

カノンは戻って来て柵に腰掛け、包帯を解いた。

「……！」

そこそこ度胸のある筈のリリが、眉間に縦線を入れて黙ってしま
う。

子供らしくつるんと綺麗な額の、そこだけ無機質な粘土みたいに抉
られた、無残な痕……

「凄いでしょ」

珍しくリリより先にカノンが言葉を発した。

「見たの？」

「うん、明るい昼間に水鏡で」

「……………」

「これでも長殿が何度も術を施してくれたんだよ。だから回復は早かった。でもこの傷痕は消せないって言われた」

「……………」

「えーとだから、前髪切つて隠すようにしようかなと
やにわにリリが顔を上げた。

「切るのはダメよ！ あんた術者になるんだから、切っちゃダメっ」

「え、えつと、僕、術者になんて別に…………」

「なりなさいよ！」

「なんでだよ、急にっ？」

「とにかく切っちゃダメなんだってばっ」

リリのイライラした表情が爆発した。

「このあたしが気に入ってるのっ！ 根元が深い青で表面が薄氷みたいなグラデーション。そんな髪色の子そうそういないわ。あんたは自分で分かっちゃいないだろうけれど、そのへんの女の子なんかにさわらせたなら、きやあきやあ面白がつて、台無しにされるに決まってる。だからぜつたいにダメ！」

「えっ、えーと？」

いっぺんに沢山捲し立てられて、カノンは混乱した。でもその沢山の中の切れ切れの言葉を繋ぎ合わせて、彼の聡明な頭脳が一つの結論を導き出す。

「あー、リリ、要するに、自分の気に入りの髪を他所の女の子がいじるのが嫌って訳？」

「バツカじゃないの？ 何よ、その自惚れ!？」

「バカって何だよ。そもそも僕の事に、何でリリがいちいち口出しするのさ」

「あ、あたしは、その傷の責任が、あたしにあるからで」

そこまで喋って、娘は口ごもった。

その隙間にまろび出た、カノンの罪のないひとこと。

「リリに責任なんてないよ。僕、何とも思っていないし」

「あ？ 何それ？」

家に帰ってレンに指摘されるまで、カノンは、小さな胡桃の櫛がてっぺんの旋毛（つむじ）に刺さったままなのに気付かなかった。

「ああ、リリの櫛」

「一緒だったの？」

食卓に器を並べていたレンは、首を伸ばして外を見た。

「ううん、途中まで一緒だったんだけど、帰っちゃった」

カノンはあやふやに言いながら、食卓に付いた。

『うるさーい！ あんたなんか大っ嫌い！』

って、いきなり理不尽に怒鳴られた事は、黙っていた。

夏紫・Ⅱ

「おやまあ、珍しいこった」

里裏の山茶花（さぎんか）林の奥。

居住区より外れて一軒ポツンと、ひっそり灯りの漏れるパオ。

古いこの家（や）には、第一線から退いた前の長、ノスリが暮らしている。

「お前さんが訪ねて来るなんて、明日はヒョウでも降るんじゃないか？ まあ、甘茶でもどうぞだ」

「いいえ、すぐ帰ります。ちよつと教えて頂きたい事があるだけです」
紫の前髪のリリは玄関先で畏まって、恰幅のいいノスリを見上げた。

この身体の大きな前長様とは、ほとんど話した事がない。

「あの、じじさま……大長さまに会う方法はないのでしょうか」

ノスリは眉根を寄せた。

彼女がじじさまと呼ぶのは、現長のナーガの叔父にあたる、先々代の蒼の長だ。

少し前に草原に降り掛かった災厄の後始末を付ける為、空間を隔てた彼方（あちら）側に残ってしまった。

自分はもう会えないと肝に据えている。

「あの方に何か用事かい？」

「はい」

「どういう用事かな？」

「……………」

ノスリは、ちよつと居ずまいを正した。

「あの方は確かに偉大だ。リリも沢山の事を教わっただろう。でも師というものはいつまでも側に居てくれるとは限らない。いつかは寄りかかるのをやめなければならぬんだよ、リリ」

「そうですか……………」

「その為に我らは、いつ何があっても良いよう、弟子や子孫にきちんと継承させる事に心血を注いでいる。大長の術に関してなら、ナーガが一番継承しているぞ」

「父様は……」

リリは一拍置いて呑み込んだ。

「他にいないんですか？　じじさまの術を沢山継承しているヒト」

「そりゃ、一番近いと言われたのはカワセミだが、故人だし……　ナーガじゃ駄目なのか？」

リリはキュツと口を結んだ。

「お邪魔してごめんなさい。帰ります」

しょんぼりして去ろうとする娘の背中に、ノスリは何気ない風に声を掛けた。

「ああそういうえば、俺も一つリリに聞きたい事があったんだ。今、いいか？」

「はい？」

リリは、緊張の表情で振り向いた。このヒトに限らず執務室の大人は苦手で、仕事以外の時は出来るだけ避けていた。

ノスリはすぐには返事をしないで、室内に戻って、小さな鍋を火鉢にかけ、甘茶の葉をパラパラと放り込んだ。

「まあ、お入り」

娘は戸惑いながら、室内へ踏み込む。

入って二、三步で、電気に弾かれたようにハッと背筋を伸ばし、天井をキョロキョロした。

ノスリは微笑みながらその様子を見ている。

「あれ？　あれ？　何か術が掛かっているんですか？　この家？」

「ふむ、流石だな。まあ、お座り」

何だか嬉しそうに顎をさすって、ノスリは椅子に毛皮を敷いて勧めた。

言われるまま腰掛けた娘は、まだ上を見回している。

「この場所は俺が住む前、エノシラという女性が住んでいた。ルウシエルや、お前の大好きなシンリイと一緒に住んでいた時期もあった。

んだぞ」

「ホントなの？」

「エノシラの前は、さつき話した、カワセミが住んでいた」

「へえ……」

天井を見ながら段々上の空になって行く娘に、ノスリはそつと話し掛けた。

「どんな風を感じる？」

「どんなって……」

「俺はずつとここに住んでいるが、具体的に感じる事が出来んだ。そんな風にすぐ分かるのが羨ましいぞ」

ノスリは甘い湯気のたつ碗を差し出しながら、娘を覗き込んだ。

「そう、部屋に入ったとたん、身体がふわつと軽くなって、安らかな気持ちになる。ノスリ様、ここに帰ると、疲れていても暗い気持ちにならない、疲れが癒える、そんな風を感じませんか？」

「おおー」

顔をほころばせた前長は、リリと同じように天井を見回した。

「やつぱり、お前さんに聞いてよかった、うんうん」

「あの？」

首をかしげる娘に、ノスリはニコニコして話し続けた。

「大昔、ここは忘れられたような馬具置き場だったんだ。ある朝突然、当時まだ小僧だったカワセミが、ここに住むと言い出した。あいつが言うには、この場所は、『里の中の命の力が交叉して強く流れる場所』なんだと。やはり今でもそうなんだなあ」

「へえー」

リリは目を閉じて、鼻から大きく息を吸った。

命の力の流れる場所。ここで暮らしていたんだ、シンリイも、ルウシエルも。

娘が穏やかな顔になったのを見計らって、ノスリは口を開いた。

「なあ、リリ、気が向いた時でいいから、たまに遊びに来てくれないか？」

娘はハツと身構えた。

そういう事を言われるのは初めてじゃない。里へ来て間もない頃はそう言ってくれる大人が沢山いた。

お父さんが不在がちで寂しかろう、いつでも遊びにおいで、と。自分も素直だった。

そして本当に訪ねて行ったら微妙な顔をされた。

ああそのまま受け取ってはいけないんだなど、学習した。

何の裏も考えなくていいのはユウジーンだけだった。

でも外見年齢が離れ始めると、何となく遠退いていた。

だから今の、少年達とわちゃわちゃ居る状況は、入って行きやすくてとても楽だ。

真意を探るようにじっと見つめる娘に、ノスリは言葉を継ぎ足した。

「シンリイの事を教えて欲しいんだ。何気ない日常の話でいい」

「シンリイ？ 執務室に居たんですよね、柵にシンリイの名前があったわ」

「ああ、確かにあの子はここで一夏を過ごしたけれど」

ノスリは少し視線を落とした。

「まだまだずっとここで暮らしてくれると思っていた間に、あつという間に役目を果たしていなくなってしまった。親友だったカワセミの大切な忘れ形見、もう少しは一緒に過ごせるつもりでいたんだ。俺はいつもそうやって油断して、心残りを作っちゃまう」

リリは肩の力を抜いた。

この大きな身体の大人が、心そのままを喋っているのは伝わった。

「分かりました。次は早い時間にゆっくり伺います。あたしもシンリイが蒼の里にいた頃のお話を聞きたいです」

帰りがけ、ノスリが、ああちよつと待てと菓子箱を探っている間、リリは今一度天井を見回した。

本当に不思議な空間。ここに居ると思いい悩んでいた事が、軽くなつて行く気がする。

ふ……と、目の端で光が揺れた。

座っていた時はノスリの陰になって見えなかった窓辺だ。

そこにぶら下がった物が、回りながらチラチラ光っている。リリは何気なく近寄った。

細い木の枝を輪っかにして、クモの巣型に毛糸を掛けた装飾。他の場所でもよく見かけのおまじないだ。

幸せを掴まえると言われる、窓辺に吊るしている家は多い。

クモの巣の中央に、他の家の物にはない大きな緑の石が吊るされ、リリの目の中へ光を放って存在を主張している。

(・・!!)

彼女の視線を捕らえると、それは意思を持ったように夥(おびただ)しく瞬いた。

初めて出会った物なのに、その石に込められたモノが、リリの中にスツと入って来た。

ノスリを見るとまだ背を向けて菓子袋を持ってゴソゴソやっている。

・・・

考えるよりも先に、手が動いていた。

夏紫・Ⅲ

放牧地の手前に大きな杏子の木があり、甘酸っぱい香りの漂う真下
が、ユウジーンと二人の男の子の暮らすパオだ。

窓から湯気があがり、賑やかな声が漏れる。

「カノンのトコ、多い！」

「レン、ヒトのお皿を覗かないの。カノンは傷を治さなきゃならない
んだから」

「ぶく〜」

「あの、おウネお婆さんが、傷は塞がったって。だからユウジーン、僕
もみんなと一緒にして」

「おお、そうか、よかったな。包帯はもう取れるのか？」

「えと、まだ触ると痛いから、もうちょっと」

入り口に足音がした。

「リリかな？」

レンが口の物を押し込みながら、玄関に出た。

「あ……」

意外なヒトが、困り顔でそこに立っていた。

里を出て、少し離れたハイマツの丘。

とつぷり陽の暮れた空の下、玉砂利の上に一人立つ、ザンバラ頭の
リリ。

小さな両手に緑の石を握り締め、一心に術を唱えている。

声も身体も小刻みに震え、唇は血の気が引いて真っ白だ。

ついさつき、やってしまった事……

ノスリ様はすぐに気付くだろう。物凄くガツカリするだろう。で
も仕方がない、引き換えせない。もう、やってしまったのだ。

長らくの時間が過ぎたが、手の中のモノはコトリとも反応しない。

リリはこわばった指をほどいて肩を落とした。

当たり前、手紙を読む以外の難しい術は、ほとんど使えないのだ。「もつと教われればよかった……」

シンリイと旅をしたのは、小さい時のホンの数カ月。その時期に、大長と呼ばれる人物が、暇さえあれば様々な手解きをしてくれた。でも自分は、お説教キライ！ と、すぐに逃げ出していた。

「本当に、教わる機会は山ほどあったのに」

あの時もつと真剣に説法を受けていれば、今こんなに術につまづいている事もなかったのだろうか。

あたしの素質が低い事が分かっている、一生懸命育てようとしてくれていたのかもしれない。

小さなため息が暗い草原に吸い込まれて行く。

自分はいつだって、肝心の事に気付かなくて、後で後悔ばかり。

昔も、この間も……

「リリ——！」

不意な声に、リリは顔を上げた。

勿論、彼女の求めていたヒトではない。

大きな草の馬に二人乗りで、暗い空から降りて来たのは、西風のレオンとカノン。

「やっぱりリリだ、その頭、上空からでも一発で分かる」

言いながらレンは上手に手綱を操って、玉砂利の上に降り立った。

「な、何やってんのよ、あんた達、また馬泥棒を……」

情けない顔を見られたかもと、リリは急いで気を張って、いつもの調子の声を出した。

そんな彼女の様子に気付いたか気付いていないか、少年二人は下馬してサクサクと近寄って来た。

「だ——いじよぶつ、今度はちゃんと断って借りて来たから」

レンは右、カノンは左側から、そつと彼女を伺う。

「ね、ノスリさんが訪ねて来たんだ」

「……！」

「リリにあげたお菓子の袋の中に、間違つて別の物を入れちゃったんだつて。えつと、大切な物だから返して欲しいつて」

浮草の上を歩くように喋る少年達に、リリは目をそらしたままブスツと言つた。

「お菓子の袋に大切な物を入れちゃつたつて？ ノスリ様がそんなドジをする本気で思っているの？」

仏頂面の娘に、少年二人は困つた顔を見合わせた。

少しの沈黙の時間が流れる。

「なあ、ここつて、リリの秘密基地？」

レンがカラツと言つた。

「え？ ううん、なんでよ？」

いきなり聞かれたので、リリは普通に答えてしまう。

「見晴らしがいいの下からはハイマツで見えないし、里からは適度に離れているし、秘密基地にもつてこいだなつて思つて」

「はあ？」

「よし、先に取——りいつ！ ここ、僕の秘密基地だ！ 旗立てて、見張り台作つて」

「バツカじゃないの？ 旗なんか立てたら秘密じゃなくなつちやうじゃない」

「バカつて言うなよ」

「バカだからバカつて言ったのよ、ガキンチョ」

喋らされているうちに、娘の口からこわばりが消えて赤味が戻つた。

「お、お菓子！」

今度はカノンが叫んだ。

「ひ、秘密基地では、持っているお菓子を分配するんだよつ。あ、あるんでしょ、貰つたお菓子つ。分けてよ、晩ごはん途中でつ、僕、お腹、ペコペコつ」

目を白黒させながら一生懸命喋る少年があからさま過ぎて、リリは苦笑いしながら、ノスリに貰つた菓子袋を懐から引つ張り出した。

三人、玉砂利の上に並んで座る。

リリを真ん中に、右にレン、左にカノン。ただ黙って、風に揺れる草原が星明かりにチラチラ反射するのを見つめていた。

割って分けた麦菓子は甘くて苦くて、凍てついた頬の内側も溶かされて行くようだ。

「ごめんねえ、付き合わせて」

リリがポツツと言った。

「は？ リリに振り回されるのなんて、僕らにや通常運行だし」

「なによ、それ」

レンの言い草に、反対側のカノンもククツと笑った。そして、菓子の入っていた麻袋の口を開いて、リリに向けた。

娘は口をキュツと結んで、手の中に握り締めていた緑の石を、袋の中に滑り込ませる。

カノンは横目でそっと見た。

掌(てのひら)に収まる程の、少し白濁した翡翠石…… リリは何でこんなモノが欲しかったのだろう。下手したら取り返しの付かなくなる罪まで犯して。

でも、そこは聞かないで、そっとして置いてあげた方がいいんだろう。

ノスリさんは、ただこの石が返ってくればいいだけみたいだったし、僕らに頼んだのは、大事(おおごと)にしたくなかったからだろう。

「へええ！ そんな平らかな石が欲しかったの？」

いつの間にか覗き込んでいたレンが大声で叫んで、カノンは心臓が跳ね上がった。

リリも驚いた顔を上げる。

「リリが欲しがると、どんな秘宝かと楽しみにしていたら、どこにでもありそうな石じゃん。ああでも、さつき呪文みたいな唱えてい

たよね。もしかして、すつごい魔法が含まれていたり？」

あたふたするカノンを尻目に、レンは軽々と垣根を越えて踏み込んで行く。

「そ、そんなんじゃないわよ、ただ」

リリは、さつきみたいなのに、つい喋らされてしまっている。

「ただ、この石を作ったヒトに、会いたかっただけ……」

「へえ？ やっぱり何処かの術者さんが作った魔法石なんだ、誰なの？」

「知らない……」

「お？ じゃあ今唱えてたのって、『物から持ち主を探す』術？ 凄いなリリ、その術、難しいんだろ？」

「ううん、出来た事ないし、やっぱり出来なかった。諦めたわ、これでおしまい」

娘は俯（うつむ）いて首を左右に振った。

左のカノンは黙って唾を呑み込む。

右のレンは、「そっかそっか」と軽く頷いているけれど、真顔で何かを考えている。

おしまいと言っているんだし、もう触れないでその辺で止めてあげて欲しい。カノンは切に思ったが、親友はそんなつもりはないみたいだ。

「理由を言って頼めば、ノスリさんはその石、貸してくれたんじゃないの？」

更に追求を続けるレン。

カノンはヒヤリとし、娘は黙ったまま肩をピクリと震わせた。

「つていうか、その石の作者さんに会ってどうしたかったの？ ノスリさんにも言えないんだろ？ お父さんにも。ひよっとして、里の規則に反する術でも使って貰おうと……」

「もういいじゃないっ。返したんだからあつ！」

凶星だったみたいで、リリは真っ赤になって叫んだ。

左のカノンはビビって飛び上がったが、それでも頑張って口を開いた。

「だ、駄目だよ、掟破りの術を他人に頼んだりしちゃ」

「このヒトは里を出たヒトなのっ。石からそれが分かったからっ。だから頼もうとしたんじゃないっ!」

「で、でも、リリは里の一員だし、良くないよ、やっぱり」

「うるさ——いっ! カノンの癖にうるさ——いっ! そう思うんなら離れて頂戴。呆れて嫌って見捨てればいいんだわ。他の皆もそうしてんだし!」

娘は肩で荒い呼吸をし、髪の毛の先まで電気が通ったみたいに逆立っている。

カノンはもう、チキチキと音を立てる、真っ赤な釜戸の前に座らされている気分だった。

そこへ一歩も退かず、湿った生栗を次々と放り込むレン。

「それは無理だ、僕らリリが好きだモン」

「ど、どこが好きっていうのよ…… もう帰って、消えて……!」

「すぐにそうやって切り捨てようとする。ほんとガキンチョ。まあリリだもんな」

「う、うるさい、うるさい、うるさ……ゲホゲホ」

叫び過ぎて、とうとうリリは声を涸らした。咳き込んで涙ぐみながらも、まだ口をパクパクさせている。

「分かった、黙るからさ。その前に一個教えて」

対照的に、レンは落ち着いてゆっくりになった。

「リリの目的って、『その石を使って探し出したヒトに、望みの術を使って貰う事』。それでオツケ?」

娘は力尽きた感じで、大人しく頷いた。

「うん、そう……」

「りよ〜かいっ」

レンは膝を叩いて立ち上がった。

そして、さつきからリリの左で青くなったり赤くなったりしているカノンの前へ行って袋を取り上げ、中の石を彼の掌(てのひら)に転がした。

「じゃ、頼むわ」

「うへっ、そうなるの？」

「そうなるだろ」

「もお・・あんまり期待しないでよ」

青銀の髪の少年は、両手で石を握りしめて、神妙な面持ちで立ち上がった。

「えっ？ なに？ 何なの？」

呆気に取られるリリの前髪に、レンがポケットから出した何かをくっ付けた。

昼間カノンの髪に刺しつ放しにした、胡桃の櫛。

「ねえリリ、なんで僕らが初めてのこの場所に、リリを目指して一直線に来られたと思うの？」

「あ」

『物から持ち主を探し出す術』。何気に十八番（おはこ）なんだぜ、カノン。この間の予知夢を見て以来、急激に色々出来るようになってきた」

「だから期待しないでっば」

丘の一番高い所まで登ったカノンが、足場を決めてから振り向いた。

「遠すぎると無理、古すぎてもダメ。半分はガツカリする気持ちでいて」

そう言うと、石を摘まんで包帯の眉間に付けた。

リリにはその瞬間、石が光を増したのが見えた。術は本物だ、効いている。

夏紫・IV

「ああ——」

意外と早くにカノンが声を上げた。

「見つけたのか？」

「この石を作ったヒト、もう亡くなっているみたい」

レンとリリは顔を見合わせた。

本当に分かるんだ、カノン凄い。

「ねえ、だったらこのヒトの『継承者』を探す？」

「出来るのかよっ!？」

「これだけ使い込まれた石だと、正確に術を継承しているヒトが存在したら、出来るかも…… ちょっと待って……」

青銀の少年は、また集中を始める。

今度は長期戦な雰囲気だ。

暗い草原に二人立ちながら、レンとリリはじっと待つ。

「ねえレン、結果がどうでも、貴方達は『細かい事を知らないで、頼まれたから協力した』って事にして」

「え、実際知らないし、いいんじゃない？」

「掟破りだと分かって協力するのが駄目なのよ」

「やだよ、嘔吐きは盗人のハジマリだし。ああ、リリはもう盗人か」

「茶化していいないで。あんた達、西風の代表でもあるのよ」

「言ったじゃん、僕らリリが好きだって。好きって言うって全部追っ被せて嘘ついて逃げるなんて、そんなカツコ悪い事出来る訳ないじゃん。それこそ母さんに西風から蹴り出されるわ」

「もおっ……」

言ってもノラリクラリ逃げられるので、リリはその話は止めた。後で自分で何としてでも庇おう。

それより今は、見付けたヒトに如何に術を使って貰うかだ……

一度カノンに「シツ」と言っただけで怒られて、離れて立っている二人は小声になった。

「継承者さん、存在するといいな。出来れば里との縁が無くて、尚且つ近くに居てくれればベストだね」

「そんな都合のいい事ある訳ないでしょ」

「近かったらこのまま会いに行っちゃえばいい。ノスリさんには僕からうまく言っておくから」

「ヒトの話を聞きなさいよ」

また声が大きくなりそうだったので、リリはもう黙った。

カノンが丘の上で一言も発しなくなつて、半刻がすぎた。

夏とはいえ、湿気を帯びた草原の夜は、砂漠の少年達の手足を凍えさせる。

彼らの身体は寒さに弱い。

「ね、ありがとカノン、もういいわ……」

自分が諦めないと少年達も家に帰れない。そう決心したりりは、丘の上に向かって歩きかけた。

——と……？

踏み出した一步が空をきつた。そこにある筈の玉砂利の地面が無い？

「ひゃっ!？」

バランスを崩す娘の身体を、後ろにいたレンが慌てて支えようとした。

しかし踏み出した彼の足の下の地面も消えた。

「うあっ!」

——落ちる!

——いや落ちない?

二人の身体は、空振った一步の分その場で大きく縦回転した。

レンが目一杯腕を伸ばしてリリの袖を掴み、引き寄せて回転を止めた。

星が消えた。さつきまで立っていた後ろの地面もない。

二人はお互いを掴んで支えにし、懸命に空中でバランスを取った。
「リリ、大丈夫か？」

「ええ、何なのよ、これ」

いつの間に、うつすら見えていた草原の景色も闇に溶けている。

「カノン、お——い、カノン！」

闇の中に青銀の髪が、さつきと変わらない位置に見える。

「何なんだよ、これ？ お前の仕業か？」

「知らないよ。レン、そっちはどんな風になってる？」

「足元がなくなつて浮いてる」

「こつちと同じだ……あつ！」

カノンが振り向いた後ろの空間が揺らいだ。

真つ暗な中、ぬらぬら光る巨大な『壁』が現れ、少しずつ横滑りしている。

——ジュリツ・ジュリツ・

重量感のある湿った音が響く。

壁は一か所ではなく、三人を囲むように現れ、繋がった。

それがウロコのある巨大な胴体だと気付いた時、上空に縦の瞳孔を持った黄色い眼（まなこ）がカツと開いた。目と目の間からして、とんでもなくでかい。

「け、継承者が、爬虫類とか、あり？」

「冗談！ あつたとしても願ひ下げだわつ。カノン、あんた、何やったの!？」

「僕にだつて分かんないよ！」

シウルシウルと舌を出し入れする音が響く。

知性のある魔性でもなさそう。

明らかに野生の本能で攻撃しようとしている。

妖しく光る瞳孔が狭まって。

生臭い息が、三人に向かって降って来た。

——!!

リリが両足を振り上げて、レンを思いきり蹴った。

「うわあつ」

支えのない少年は簡単に飛ばされ、カノンにぶつかり二人絡まって、蛇の視界から遠ざかった。

「カノン、レンを連れて遠くへ逃げてー！」

リリは手の中に熱風のエネルギーを作りながら叫んだ。

蛇は空気の温度に曳かれて、娘の方に集中してくれている。

(あたしの風つぶってって、どのくらい効くのかしら……)

足元が定まらない中、こんな大きな相手に何が出来るだろう。でもあの子達は逃がさなきゃならない。

——リイン

闇を突き抜ける清亮(せいりょう)たる鈴音。

リリは、自分と蛇との間に見えない膜が張った気がした。

——リン、リン

更に鈴の音が響いて、頭上の蛇が段々に、気もそぞろに頭をもたげ始めた。

リリに向いていた殺意は薄れ、フィと後ろを向いて闇の深い方へと動き出す。

——ズツ・ズツ・

周囲に巻いていたとぐろも解けて、最後の尻尾が遠ざかる。

「リリー！」

「うへえ、怖かった」

少年二人が泳ぐように寄って来た。

「何をしたの？ あの鈴の音、何？」

「いいえ、あたしは……」

次の瞬間、蛇の去った方向からキンと鋭い音。

同時に眩い光が伸びて、視界を真っ白にする。

暗闇に慣れていた三人は目を覆った。

一拍置いて、ぶわっと風圧。

地面のない空間で、三人はクルクル回りながら必死に態勢を保った

「何なんだよ、もう！ カノン、使ったのは『持ち主の居場所を捜す術』だったんだろ？」

「うん、でも、手応えを感じた瞬間ガクンと足元の地面が消えちゃって。ごめん、きつと何かしくじったんだ」

「ううん、カノン、あんた凄いわ……」

「眩（つぶや）くりりの見ている方向を、少年二人も慌てて振り返った。」

空中に浮かんだ巨大な蛇が、光の粉を撒き散らしながら分解して消滅して行く。

その真下に、薄青のヒト型がボオツと光っている。

へビがすっかり消えきると、そのヒト型が、肩を不自然に揺らしながら、ゆっくりとこちらに歩き出した。カノンと同じ、青銀の長い髪。

本当に凄い…… リリは息を呑み込んだ。

カノンの術は『探す』のを通り越して、目的のヒト……『継承者』の所まで、自分達を飛ばしてしまったのだ。

当のカノンは、歩いて来たヒトが誰だか分かった途端、苦虫を噛み潰した顔になっている。

「カノンか？ 僕の結界に入り込むなんて、誰かと思ったら」

手にした錫杖を杖がわりにぎこちなく歩いて来た男性は、少年を見てやはり複雑な表情をした。

「リユーズさん、海霧（かいむ）の村の……」

リリが呆然と言った。

「はい、お久し振りです。蒼の長の姫君」

「なにになになに？ どういう事?!」

パニックを起こすレン、口を結んでムスツとするカノン。

「んじや、リユーズさんが、その石のヒトの『継承者』だった訳？」

リリに説明を受けて、レンは目を回しながらも納得した。

隣のカノンは無然としている。既にこのヒトには確執も何も無いのだけれど、だからって今自分が書物の中に追っている『ソラ』にはなり得ない。出来ればもうあまり会いたくなかった。

そんなカノンの手から翡翠石を取って、リリはリュウズの手に乗せた。

石がほんの僅かに瞬く。

「ああ、カワセミ殿の石板だ…… 懐かしいな」

彼は石を両手に包んで、染み入るように目を閉じた。

「僕を継承者と思ってくれていたのか……そうか……そうか」

閉じた睫毛がビクンと揺れて、涙がスツと流れる。

「そんな、泣く程、思い出のお師匠さんなの？」

レンが素直に口に出した。

「いや、これは通信用の石板の、おそらく中心部分。『手紙の欠片』が残っているんだ。最後の、離別の手紙……」

「ええ、そう」

リリが受けた。

「だから、このヒトが蒼の一族とお別れしたと分かったの。それでね」
さつきから何気に離れて行くカノンの両肩をガツと掴んで、リリはリュウズの前に押し出した。

「リリ!？」

「いいから、じつとしてー!」

抵抗気味の少年に有無を言わず、額の包帯をスルスルと解く。

「これ、この傷痕! これ、消して頂戴!」

一瞬意味が分からず、カノンはポカンと口を開けた。

リュウズは無惨に抉れた痕を見せられて、目を見開いて表情を強張らせる。

「消せるでしょう? その石の魔法力の強さで分かったもの。このくらしいの傷痕なら綺麗に出来るヒトだって。じじさまだってあたしの擦りむいたの、いつもあつと言う間に治してくれたもの」

リリは何だか慌てている。

色々あり過ぎて思考の追い付いていなかったレンが、やっと一つの事に思い至って、頓狂な声を上げた。

「ちよつと待て! リリが盗みをやってまでやりたかった事って、カノンの傷痕を治す事だけ!」

ポケットとしていたカノンも、そこで気付いて更に啞然としている。「だけって何よ、だけって！ 凄く凄く大切な事よ！」

「ええ、だってオンナじゃあるまいし、向かい傷の一つや二つ……」「リリ、僕は気にしていないし……」

「黙りなさいっ」

紫の前髪が逆立った。

「あなたの身体はあなた一人の物じゃないのっ！ ルウシエルが、死んでしまいたい程に辛い時に心を奮い立たせてこの世に送り出してくれたその身体、粗末に傷なんか付けて、許される訳ないでしょ！ あんたが許したって、このあたしが許さないのよっ！」

男の子二人はタジタジとなってしまった。

その理屈は分からないでもないが……

リユーズは、捲し立てる女の子に返事はせずに、ただ黙って傷痕に指を触れる。

触られた所がチリチリするのは痛いからなのか魔力のせいか、カノンは緊張し過ぎて分からなかった。

「ナーガ様は、何と仰っているのですか？」

指を傷痕に当てたまま、リユーズが唐突に聞いた。

「長殿は、この傷痕は消せないって仰いました」

カノンが先に答えてしまい、リリは、（あつ）という顔をした。

居ずまいを正して、青銀の男性はリリに向き直る。

「ナーガ様にこれを消せない筈がない。その上であの方がそう仰ったのなら、僕に手出しする事は出来ません。蒼の長の決め事は絶対です」

「で、でも、石の持ち主・師匠のカワセミさんは里とお別れしたヒトだし、リユーズさんは海霧の者で、蒼の一族とは無関係でしょう!？」

リリの言葉に少年達は、彼女が誰にも言わずに、里の外に術者を探していた理由を、やっと理解した。

「無関係という事はありません。僕は里を出奔した大長様にも教えを受けた事があります。里から外れたとはいえ、この世の摂理から外れてはいらっしゃいませんでした。蒼の長の言霊は、一部族の範疇を越

えた、この世の摂理に沿って発せられる。僕はその教えを継承させて頂きます。お役に立てず申し訳ありません」

カノンは、目の前の男性を見上げた。

西風の里人の思い出話にも、歴史書の中にも居なかった、自分の知らないソラ。

「~~~~~!」

リリは俯（うつむ）いて拳を握りしめている。
まだ納得していない様子だ。

「ああ、結界が切れるね、もう帰った方がいい」

男性は、闇の空を見回した。白い霧がゆつくりと湧き出している。
レンとカノンが何と声を掛けようかと逡巡している隙に、リリはガバリとリユーズの懐に飛び込んだ。

「あああたしのせいなのっ」

ビイドロみたいな瞳で見上げられ、流石に戸惑うリユーズ。

「あたしが迂闊なせいで、ルウシエルの大切な・大切なこの子の額をこんなにしてしまって、ああ、どんな罰でも受けるから、あたしの事嫌いになってもいいから、この傷だけは、とにかく何でもどうでも、この傷だけは、お願い、お願いします、お願い・・・」

少年二人は唾を呑みこんだ。

こんな支離滅裂な、プライドもへったくれもないリリ、見たことがない。

「リリ、僕、もういいから」

と言うカノンの声をかき消して、娘は眼光を湛えて更に叫んだ。

「初めて会った時、ひと目で分かった。ルウシエルがどれだけこの子に支えられて生きて来たのか。こんなにソラにそっくりで、髪の毛の生え際までそっくりで。ねえお願い、この子を元のソラそっくりな額に戻して、ルウの元に帰してあげて!」

誰に何が必要なのかを、本人よりも深く解してしまうのが、リリって娘（こ）だ。

カノンは目を見開いたまま黙った。

しがみ付かれたリユーズも、さつきまでの厳しい表情が失せて迷いが露わになっている。

信念は揺るがない。だがルウシエルの寄る辺ない顔を脳裏に浮か

べてしまったのだ。

「……カツコいいよ」

ボソツとした声が空気を割った。

それまで黙って一歩下がっていたレンが、カノンの横までやって来て、額を覗き込んでいる。

『砂漠の灰色狐』みたいだねっ!」

『砂漠の灰色狐』とは、西風の伝説に出てくる英雄だ。

まあ、どここの土地でも『額に向こう傷のあるヒーロー』のお伽噺は、ありがちだ。

「そお?」

カノンが努めて明るく返事をした。

それから、口をパクパクさせるリリの手を取ってギュツと握り、反対の手でレンの右手を握った。

「あの、教えて下さい」

少年の問い掛けに、リューズも気を取り直したように彼を見下ろした。

「蒼の長さまが決めたって事は、何か意味があるんですよね。どんな意味なんでしょうか」

青銀の髪を肩からすべらせて男性は、屈んで少年と目線を合わせた。

「身体は人生の節々に様々な痕を刻みます。その者にとって何の意味も持たない傷ならば、あの方は治癒して下さったでしょう」

カノンはハツとして、男性の萎えた片脚を見た。

「すぐに答えが出るものではありません。あの方々の教えはいつもそう。それを知って行く過程も、とても大切なのだと…… 僕はそう思います」

そう、ナーガ様が、この子やルウシエルを大切にしていない訳がないのだ。言いながらリューズは、自分の胸にも刻み付けているようだった。

「はい、ありがとうございます」

少年が例のよく通る声で返事をし、リユーズは更に表情を震わせた。

彼はスツと立ち上がり、子供達に背を向けて、錫杖を鳴らして方向を探る作業を始めた。

「ねえ、ここ、何処なんですか？ カノンの術で飛んじまったって事だけど。海霧（かいむ）なの？ めっちゃ遠くない？」

知り足りないレンが、今更ながらの疑問をぶつけた。

「ああ、ここは結界の中だから…… 距離の概念を無視して飛び込む事は有るかもしれないけれど、狙ってやる物ではないですね」

リユーズは背を向けたまま、杖を振りながらも丁寧に答えてくれる。

「あの蛇は？」

「あれは邪の魔性。退治しようと結界を作って閉じ込めた所で、君達がぐるのド真ん中に現れた。肝が冷えました。本当に二度とやらないで下さい」

レンが唾を呑み込む横で、カノンも神妙に頷いた。

「魔性退治って、普段からやってんですか？」

「いや、最近になってから…… モエギ様が亡くなられた後、たまに砂漠の上空の風が流しきれていない時があって」

カノンはまたハツとした。

清浄な風を流して邪を追い払うのは、西風の長、ルウシエルの役割だ。

記憶が曖昧で至らなかつた彼女を、引退した祖母のモエギが、田舎から密かに補助してくれていたんだ。そして今はこのヒトが……

「まあ、たまにです、滅多にありません。西風の長殿も、今では立派に独りで勤めあげておられますので。ああ——」

リユーズは慌てて言葉を濁し、それからリリを振り向いた。

「ナーガ様には言わないで下さい。あの方いまだに、ルウ……西風の長殿を子供扱いで甘やかされるので」

「そう、そうね、確かにその通りだわ。そちらは貴方や他の頼もしい仲間がちやんと居て、ルウを支えてくれているもの。余計な心配だった

わね」

半泣きだつたりリリが、自分にも言い聞かせるように声を張った。

「リユーズさん」

呼ばれて男性はビクンと揺れて、自分をじつと見上げる少年の、燃えるようなオレンジの瞳を見た

「今日だけで沢山の事を知る事が出来ました。貴方の事も少しだけ。こうして知って行く過程も、傷痕を残した『意味』なんですよね」

男性は何か溢れるのを抑えるように、引き締めた口の両端を震わせた。

錫杖がリンと鳴って方向を探り当て、石を握ったカノンを真ん中に、子供達はそちらに立って各々の別れの言葉を口にする。

青銀の妖精は黙って、でも闇に溶ける直前まで、じつと子供達を見守っていた。

気が付くと三人は、夏の虫の声がチキチキ響くハイマツの丘に立っていた。

三人が里の馬繋ぎ場へ降り立つと、コバルトブルーをカンテラのオレンジに照らしたユウジーンが、口を結んで立っていた。

「ユ……」

リリが何も言う前に、ユウジーンの掌が彼女の頬でパシと音を立てた。

「待って！ リリは」

庇おうとする少年達を、リリが慌てて引っ張った。

「ナーガ様が執務室でお待ちだ、行こう」

うわあ、長殿にバレちゃってるのか。

そりゃ、ノスリさんが穩便に済ませたかつたとしても、親だし長娘だし、そうなるよなあ。

唾を呑み込むカノンの横で、レンがいきなり叫んだ。

「ユウジーン！ みんな僕が悪い！」

「レン、庇わなくていい」

「ううん、僕が悪いの。第三の目、そう、第三の目なんだ！」

「は？」

「カノンに『第三の目』が開いたって言ったのに、リリが全然取り合ってくれなかったんだ。そんでつい、この間の事を引き合いに出して嫌味を言っちゃったの」

ユウジーンだけでなく、他の二人も狐につままれた顔をする。

『第三の目』って、神話の神サマが額に持っていたりする、森羅万象を見渡す超常力を持つ目の事だ。『砂漠の銀色狐』も持っている。っていうか、レンのソースは其処だろう。

「西風を馬鹿にしてんだろって僕が怒ってさ。そしたら今日、外で僕らを待っていたんだ。」

ノスリさんちでたまたま、すごい魔法力の石を見つけたから、石の持ち主を呼び出して白黒付けて貰おう、お互い知らないヒトなら公平だろ、って。

黙って借りて来ちゃったのはリリが悪いけれど、リリをそこまで煽っちゃったのは僕だから、僕も悪い。だから一緒に罰を受けるよ！」

「ぼ、僕もー」

リリに何か言わせる前に、カノンも声を出した。

「僕も一緒。リリに無神経な事を言っつて、思い詰めさせちゃったから。僕も罰を受ける」

リリは困惑して二人を見る。

デタラメも混じっているが、大体似たような物だ。だけどちよつと苦しいような……

「呼び出すたつて、そもそもリリに、そんな術使えるのか？」

「あ、カノンが交代して呼び出したけれど、もう亡くなつてたつて」

ユウジーンは目を見開いた。彼は、あの石板を作ったカワセミが故人である事を知っている。そこで胡散臭かったこの言い訳に、彼の中でプラス補正が入った。

「そ、そうか」

顎に手を当てるユウジーンを、三人は神妙に見上げる。

「第三の目、ふむ、第三の目か…… うん、確かにカノンだったら有り得るかもな、なるほど、第三の目……」

何と、納得方向に傾いている。このヒトのちよつとズレた寛容さに、三人は心から感謝した。

「先にナーガ様に話に行くから、ちよつと遅れて歩いて来なさい」

ユウジーンは踵を返して、執務室にダッシュで駆けて行った。

遅れて固まってこそそそ歩く三人。

「あんた、嘘は吐かないんじやなかったの？」

「レン、第三の目つて大袈裟だよ」

「そう？ でも半分以上は本当じゃん。それにこれでユウジーン、カノンの傷痕を見てもウジウジ気に病まなくて済むでしょ」

カノンとリリは思わず立ち止まって、赤いバンダナの少年をマジマジと見つめた。

「それに、僕は本当に第三の目だと思っているし！」

二人より三步前を後ろ向きに歩くレンの背中に、何かがぶつかった。

「父さまー！」

「長殿」

「ひえっ！」

群青色の長い髪の背の高い蒼の長。いつ見てもめっちゃくちゃ存在感がある。

その長殿が、額飾りを揺らして、カノンの顔を覗き込んで来た。

「見せてっーらん」

レンがあわあわする横で、長殿が包帯をフワリと解いて、カノンの傷痕をじつと見る。

長い指が二、三度傷痕を撫でて、カノンはさつきみたいにまたチリチリを感じた。と、いきなり長殿の瞳に驚掴みにされるような感覚に襲われた。えっ、すっごい入って来る！ これまで触られてもこんな感覚起きなかったのに!?

「ふむ……」

少しして長は目を離して、カノンの両肩に手を置いた。

「後は貴方次第ですね。しっかり精進しなさい」

そう言つて、顎が外れそうなレンと、茫然とするリリに向き直つた。

「レン、鋭い洞察力です。大切になさい」

「ひ、ひゃいー！」

「リリ、何をやったかは分かっているね。ノスリ殿の所へ行きましたよ」

「はい……」

「それと、病み上がりのカノンに負担をかけるのは良くない」

「はい」

「ぼ、僕は大丈夫です！」

青銀の少年が声を張った。

「その石とリリのお陰で、今日、沢山の事を知る事が出来ました。感謝していますー！」

長は目を細めて頷き、リリは小さく手を振って、ノスリの自宅へ向けて坂を登って行った。

レンとカノンはユウジーンと連れ立って家へ戻り、ちよつとだけを説教されて、床に着いた。

疲労困憊のユウジーンが寝入ってから、毛布を被って二人はコソコソ話した。

「ナーガ長があんなコト言うなんて。ホントのホントに第三の目？」

「そんな大仰なモンじゃないよ、レン」

カノンは静かに否定した。

「だって、リユーズさんの言うことにや、長殿がその傷痕を残したのには意味が有るって」

「だから、砂漠の灰色狐みたいに、この傷に力が宿るとかじゃないって。予知夢を見たのは怪我をする前だし、里へ来た時から術の力はちよつとづつ上がっていたんだ」

「そ、そうなの？」

「うん、でもまだまだだよ、今日の術だって、結果オーライだけど、所謂失敗じゃん」

「ま、まあ……（あれはあれで凄いととは思っけれど）」

苦笑いするレンにニニツと微笑んで、カノンは毛布を被って仰向けに寝転んだ。

開け放した窓から青い月が見える。

いつも隣にいたレンが、どれだけ広く大きな心の持ち主だったか。

リリが、どれだけ一途に愛の深い娘だったか。

そしてあのヒト、……リユーズさん。どんな立ち位置でも前を向いて真摯に生きる姿。

きつとこれからも、沢山の事を『知る』事が出来る。そういう意味でこの傷痕は、やっぱり第三の目って言えるのかもしれない。

山茶花林の奥、ノスリの住む小さなパオ。

命の力が交差するというこの場所で、ノスリは揺り椅子に背をもたせ掛けて目を閉じている。

リリの処遇は、ナーガに頼んで、最初に言った『自分のうっかり』として押し通させて貰った。

それより余りある言葉をあの娘に告げられて、今はそちらで頭が一杯なのだ。

「だってこれ、里へのお別れの『手紙の欠片』だったから。ノスリ様に宛てた惜別の手紙」

『砕けてしまつて書かれていた事すら知らなかった手紙』を、あの娘はサラリと『読んで』、教えてくれた。

それには、カワセミから自分に対する言葉、まだ親友と呼んでくれる言葉が、しっかりと遺されていた。

「その石は、お前さんが持つていなさい」

「でも……」

「俺は、中身の言葉だけ貰えれば十分だ。後はお前さんが継承してくれ。歴（れつき）とした大長殿の系統だ。頼んだな」

青い月の家路を辿る父娘。

懐に石を握りしめ、頬を何度も触る娘に、父は静かに声を掛けた。

「どうしたの？」

「ん、ジーンにぶたれた」

「そう……」

「ぶたれて嬉しいなんて、バカみたいだね」

「それは、良かったね……」

く 夏紫・了 く

いつつめのおはなし

天人唐草・I

夕暮れの修練所前広場。

蹴り玉を追い掛けていた子供達も散り、ゴールポストの丸太がポツンとオレンジに照らされている。

建物の入り口が開いて、最後の生徒が吐き出される所だ。

「じゃあ、カノン。よく考えておきなさい」

「はい、サオせんせ」

「私は素晴らしい話だと思うよ。でも、まあ、そうだね、君が決める事だ」

「はい……」

教官せんせは、青銀の髪の少年の顔色の悪さを見て取って、余計な言葉は止めた。

カノンはペコリとお辞儀して、足取り重く土手を登った。秋の気配が近付いてから、日に日に日没が早くなる。

「なあに、その眉間の縦線は？　まるでこの世の悩みを全て抱え込んでいるみたい」

いつものようにカノンの心情をズバズバ暴きながら、紫の前髪が現れた。

「や、やあ、リリ、今日は早かったんだね」

「まあね、あたしに掛かったら崩れた岩の撤去なんか、チヨイチヨイのチヨイよ」

「チヨイチヨイのドカアン？」

「チヨイよ。何であたしがナンでもカンでも吹っ飛ばすと思ってるのよ？」

「何となく」

「バアカ」

二人、歩きながら笑った。笑い声に紛れ込ませて、リリはサクツと言った。

「父さまからの話、行った？」

カノンの笑顔が消えて、また額に縦線が入った。

「うん、放課後、校長室に呼ばれた」

「そう、で？」

リリはカノンの縦線に気付かない素振りで、わざと強い口調で聞いた。

「で？ って？」

「本格的に父さまに付いて勉強しないか、って言われたんでしょ。そんな話執務室の見習いの子が振られたら、躍り上がって喜ぶわよ」

カノンは、覗き込んで来る紫の瞳から目をそらして、口の中のごよごよによ呟く。

「うん、だけど……いきなり言われたって。修練所に通えなくなるって事だし」

「呑気な一学童でいたいって？ ここに居る間は、西風の長息子である責任を忘れて、ただの子供でいたいって？ あんた、何の為に留学して来たの？」

「リリ！」

オレンジの瞳を光らせてカノンは顔後ずさった。

「僕の心を読むの、止めて！ 僕、そんな風になりたくないから……」はっと止まった。

リリの表情が、今まで見た事のない凍り付き方をしたからだ。

呼び止める暇もなく、リリは獅子頭をひるがえして駆け去ってしまった。

『大っ嫌い！』も『うるさい！』もなかった。

追い掛けたい足が前に出ない。

追い付いてどんな言い訳をするっていうんだ。

『あの紫の長娘は、ヒトの心を勝手に見透かす。怖い、気持ち悪い』そんな噂は、こそこそ悪意を伴って、カノンの耳にも入っていた。

「よっ！」

いきなり背後から肩を叩く者。

頭に粉をかぶって真っ白なレンと、ユウジーン。

「何やってんの？ 遅いから迎えに来ちゃった」

いつの間にか、夕陽のオレンジが消えて、夜闇が忍び寄っていた。

「ユウジーンに聞いたよ。長殿直々に弟子入りのお誘いだった？ 凄

いじゃん、さすがカノン。今晚はご馳走だぞ。母さん直伝のチャパ

テイ、期待しろよ」

「レン……」

消え入りそうな声のカノンに、二人は首を傾げた。

「何だよ、まさか蒼の長殿の指導が怖いとか、尻込みしているんじゃないだろうな」

「レン、ちょっとお待ち」

ユウジーンがカノンの肩に手を置いた。

「執務室の他の者に遠慮しているのかい？ 可能性を持つ者が才能を伸ばす事は、蒼の里だけじゃなく、この世の役に立つ為なんだよ。皆分かっているから大丈夫だよ」

「違うの、リリを傷付けてしまったんだ」

カノンが顔を上げた。

「凄く酷い事を言っちゃった。僕、こんな奴だったんだな、ひそかにあんな風に思っていたんだ。長殿に指導して貰う価値なんてないよ……」

うわっ、今日は一段と沼底だな、と、レンはユウジーンと顔を見合わせた。

盃みたいな上弦の月が、遠くの山陵に顔を覗かせている。

紫の前髪の娘は、放牧地の柵に腰掛けて、片膝を胸に抱え込んでいた。

「ちいーすー！」

振り向くと、赤いバンダナ。

「でっかいカマキリの卵が柵にくっ付いてると思ったら、リリだった」

「な、何よ！ その目玉にはフンコロガシでも詰まってるの？」

リリは柵から足を下ろして、慌てて鼻の下を拭いた。

「ふふふん」

レンはお構いなしにスタスタとリリの真ん前に来て、両手を突き出した。

「な、何よ？」

「西風の子供はさ、こうやって、掌(て)のひら)から心を通わせるんだ。知ってた？」

「し、知っているわよ。昔、ルウが教えてくれたわ」

リリは突き出されたままの手を凝視しながら答えた。

「じゃあ、握ってくれる？」

「なんでよっ」

「いいじゃん、僕、知られて困る事なんかないし。リリもそうでしょう？」

「当たったり前でしょー！」

勢いで娘は、飴色の手を握った。

しんとする。心が流れ込んでくるなんて現象は起こらない。

「……………」

「あは、やっぱダメか。これって難しいんだって。お互いが合意して呼吸を合わせないと。一方的には出来ない」

「……………」

「出来たとしたら、西風でもやっぱり怖い事なんだ」

「……………」

「カノンを許してやってくれない？ あいつ、ただの怖がりなんだ。リリを好きなのは分かっているだろ」

「……………」

「落ち込んじゃってさ。リリを傷付けたから、長殿に教えて貰う価値なんか無いって」

「バツカじゃないのっー！」

リリが手を繋いだまま叫んだので、レンは感電したみたいに飛び上がった。

痺れる手を振りながら茫然とするレンから、リリは後ろ手を組んで二、三步離れた。

「ねえ、最後までちゃんと聞いてくれるんなら話すけれど、聞く？」
後ろ姿の小さい肩はキュツと上がって緊張している。

「うん、教えて」

リリは肩に力を入れたまま話し始めた。

「正直、『心が読める』ってどういう事なのか、あたしには分かんないのよ」

「？」

「ヒトといると、話さなくても、そのヒトが嬉しいのか悲しいのか、怒っているのか笑っているのか、分かるでしょ？」

「うん、まあ、それ位なら」

「何で分かるの？」

「えっと、姿勢とか、表情とか、あと、何となくの空気かな？」

「そうよ、あたしもおーんなじ」

リリは後ろ手を組んだまま、クルリと振り向いた。

「そのヒトの姿を見ると、そういう風に伝わって来るの。そのヒトが悩んだり喜んだりしている理由が。あたしにしたら、何で皆には分かんないのが、不思議」

「……………」

「ただ、話していて興奮すると、そのヒトがもう喋ったのか、伝わって来ただけなのか、ごっちゃになって、トラブったりする」

「そっか」

「そこん所は反省しなきゃって思う」

リリは話し終えた感じで肩を下ろした。

レンは進み出て、今一度リリの両手を掴んだ。

「じゃさ、お返し。今度は集中してやるよ。僕が今どんな事を考えているか、見せてやる」

「んん？」

リリは、少年の茶色の瞳を見つめてから、姿勢を正して手を握り直した。

「リリ、誰か来たようですよ」

蒼の長は沢山の書き物に埋もれながら、珍しく家にいる娘に声を掛けた。

「・・・会わない！ 父さま、追いついて！」

リリはベッドの天涯の奥で、背を向けて踞（うづくま）っている。

「やれやれ、今度はどんな喧嘩をしたんです？」

長が立ち上がって戸口に近付くと同時に、御簾の向こうで声がした。

「夜分に恐れ入ります、カノンです。リリ、いますか？」

青銀の髪の少年は、御簾を上げて顔を出したのが背の高い長殿だったので、指先まで緊張を走らせた。

「リリ、やはり貴方に用事なようですよ」

「知らない！」

リリは相変わらず微動だにせず部屋の奥から叫んだ。

「リリ、さつきはごめんよ」

「そんな事どうだっていいわよ！ あのデリカシー欠如のドン底バカに比べたら！」

長殿は二人の間で困惑して突っ立っている。

「ドン底バカって、レンの事？」

「他に誰がいるってんのよ！」

「そのレンが戻らないんだ。リリを連れに行くって別れたきり」

リリは膝に埋めていた頭を上げた。

「レンとは会ったんだよね。いつ頃別れたの？」

長殿も真顔になって娘を振り向いた。彼女が戻って来てからかなりの時間が過ぎている。

「リリ、心当たり、ありますか？」

「し、知らないわよ！ 突き飛ばして走って来ちゃったんだもん！」

リリは尚も背中を向けたまま、首をブンブン左右に振った。

「やっぱり喧嘩したんだ。何があったの？ レンがこんな時間まで帰らないなんて初めてなんだ」

「何故突き飛ばしたりしたんです？ ちゃんと話しなさい」

「あの子が悪いのよ！」

勢いよく振り向いた娘の顔は、上から下まで林檎みたいに真っ赤だった。

「あ・あのドン底バカ！ ヒトが弱ってんのいい事に、ちよつとの隙を、突い、て、いきなり、か・顔を、近付けて・・・」

動揺のあまり歯をガチガチいわせる娘は、目の前にある物全てを噛み砕きそうだ。

カノンも少なからずシヨックを受けた。

レンの奴、抜け駆けにも程がある。

「リリ、それで、レンを突き飛ばしたの？ もしかして『大っ嫌い！』とか言った？」

「勿論よ！ 『二度とあたしの視界に入らないで！』とも言ったわ」

カノンは唾を呑み込んだ。

今のリリを宥めるのは無理だ。

それよか、ズツタズタに傷付いてどっかに行っちゃったレンが心配だ。

女の子には分かんないだろうけれど、『大っ嫌い』は、言われても全然構わない時と、絶対言われたくない時とがあるんだ。

「長さま、レンを捜して、ちゃんと謝らせますから」

カノンは、さつきから自分の前に突っ立って動かない蒼の長を見上げて…… ……ビックリした。

背の高い長殿は、真っ白になって、燃え残りの灰みたいユラユラ揺れているのだ。

「お、長さま？」

「・・・え・・・はい？ ああ、リリの、くちびるが、どうしたって・・・？」

「くちびるとは言っていないですよ！」

「先っぽ触れたわよっ！」

「リリ、頼むから混ぜっ返さないで！」

「・・・そう？・・・ああ、まあね、リリもね、おとしごろですからね・・・まあね、まあ・・・」

カノンはじわじわと後退りした。このヒトはダメだ、遠くにイツちやつてる……

慌ててお辞儀だけして、踵を返して、来た道を駆け戻る。

息急ききつて走り込んで来たカノンに、ユウジーンは目を丸くした。

「どうした、レン、いたか？」

「まだ。ね、レンの最後に触っていた物って何？」

「触っていたって……」

ユウジーンは、皿に山積みになったチャパティに目をやった。

「これだ！」

カノンは一番上のチャパティを掴んで、両手を添えた。

「おい、食べるのは、レンを待つてやろうよ」

「静かに！」

三秒目を閉じて、それから少年は、チャパティを掴んだまま外へ飛び出した。

天人唐草・Ⅱ

三日月が、空の真上から猫の目みたいに見下ろしている。

修練所の広場のゴールポストの丸太のてっぺんに、片膝抱えて座る人影があった。

大人の背丈の二倍もある垂直の丸太に軽々登れる子供なんて、そんなにいない。

その影が、ちよつと動いて片手を挙げる。

「やあ……」

「レン……」

細い月が土手の上の親友を照らした。

「どうやって僕を見つけたの？ ああ、そのチャパティか。ホント凄いな、カノンは」

「えと、あつ、食べる？ お腹空いてるでしょ」

「ううん、いい」

レンはゴールポストに座ったまま、背中を丸めた。

カノンは何て言っているか分からなくて、チャパティを両手に持ったまま突っ立っていた。

リリはそんな事ぐらいでレンを嫌いになったりしないよ、って言うてあげたいけれど、ここいらでレンに脱落して欲しい……なんて思っちゃう自分もいる。

「ね、カノン、こんな細い三日月の晩は、アレが出そうだね」

呼び掛けられて、ちよつと自分勝手なコトを考えていたカノンは、我に返った。

「えっ、アレ？」

「ほら、『砂漠の灰色狐』に出て来る『追っ掛け妖怪』。子供が列を作つて夜の砂漠を歩いていると、後ろの子から順番に、音もなく拐われて行く、って奴」

「な、何で、今、その話を……？」

「何でかな？ 何となく今思い出したの」
「……………」

カノンは背筋がぞわぞわした。昔っからその手の話が超苦手なのだ。

「ねえ、そんな話を急に思い出す時って、すぐ後ろにいたりするんだよね」

「よ、よしてよ、レン」

カノンは震え声で目を伏せた。でも見たくないと思う程に、レンの後ろの暗がりにも目の端が吸い寄せられる。

「特に、今の僕みたいに、呪われた気分の子供が・・大好物なんだってえええうええ——!!」

レンはいきなり顔を上げて大口を開けた。

口の中も目の下も真紫、声もレンじゃないみたい・・尋常じゃない!

そしてそれを合図に、ゴールポストの後ろに垂直の鬼火が立ち上がり巨大な妖怪の出現!

縦長の楕円形の胴体の、半分が顔。一つ目の下の大きな口から舌が地面まで垂れ下がっている。

身体の周囲に放射状に、駱駝の蹄を付けた足が何十本もウゴウゴしている。要するに直立した巨大なワラジ虫だ。

「ひえええー!」

それがどんなに間抜けな姿でも、常軌を逸したモノである事には違いない。

カノンはビビって腰を抜かした。

しかし次の瞬間、心臓が凍り付く光景。

巨大ワラジ虫がゴールポストに取り付いて、レンを襲い始めたのだ。

長い舌が細い足首に、もうちよつとで届きそう。

あの大きい口、子供なんか一呑みにされてしまう。

「カノン、カノン、タスケテ……」

あの活発なレンが、ひきつった悲鳴を上げてに震えている。

そこまで弱る程『大嫌い』がショックだったのか。

「ば、化け物、やめろ、こっちだ、こっち！」

カノンは勇気を奮い立たせ、土手を転がるように駆け降りた。

腰に小さなナイフしか持っていない。そんなのよりはいつそ……

！

「カマイタチ！」

掌と掌を打ち合わせて風の刃を作る。

あんまり得意じゃないけれど、武器っていったらこれしかない。

——ジャツ!!

カノンの投げた風は真っ直ぐ飛んだが、ワラジ虫は舌を引つ込めて軽々避けた。

妖怪は弱っている少年にしか興味を示さないみたいで、丸太をゆさゆさ揺さぶり始めた。

レンは今にも落っこちそうだ。

「タ、タスケテ、タスケテ、カノン……」

「レン——！」

レンが、レンが、あの何でも自分で出来ちゃうレンが、今は助けを求めている。

誰を呼びに行っている暇もない。ここには自分しかない！

助けなきや、助けなきや！

カノンはカ一杯両手にカマイタチを作った。

肩が沸騰しそうに熱い。

腕を交差させて、思いきり解き放つ、

二つの風の鎌。

ブーメランみたいに弧を描いて妖怪の虚を付き、見事背中から両側へ突き抜けた！

——ジャキンン！

ワラジ虫はゴールポストと共に真つ二つになって崩れ落ち……たと思つたら、すうつと消えた。

「!??!」

三分割されたゴールポストが地面にドシンドシンと落ち、その上にレンがひらりと降りた。

そして、空中をひらひら落ちて来る三つに切れた朴（ほお）の葉を掴んで叫んだ。

「幾ら何でもこりやないだろ！ どういうセンスしてんだよ！」

「え？ え？」

カツコウみたいな声しか出せないカノンの頭上で、甲高い声がした。

「だって、『砂漠の追っ掛け妖怪』なんてあやふやな情報しか言っていないから、そんなのしか思い浮かばなかったのよ！」

背後の朴（ほお）の木のてっぺんから、さつきベッドで怒っていた娘が降って来た。

「だいたいヒトのコト言えるの？ なに？ あのダイコン演技。緊迫感も何もあつたモンじゃない！ あんなのに騙されるのなんて、カノンくらいじゃないの!？」

「うっさいな！ あんなの見せられて笑うなって方が無理だろ！ それを言うならお前の作つたワラジ虫を本気で怖がるのなんか、せいぜいカノンぐらいだぜ！」

「あ、あのお……」

ケンケン言い争う二人の間で、青銀の少年が遠慮がちに片手を挙げた。

「えっと、今の流れで判断すると……二人で共闘して僕を担（かつ）いだ……ってコトで、いいのカナ……？」

二人同時にカノンを振り向いた。

「当ったり前でしょ！ ちょっと黙っててよ！」

「それ以外のなんだってんだ！ この状態でまだ気付かないんなら深刻だぞ、カノン！」

「……………」

カノンは黙った。そして、二人の楽しそうな口喧嘩が終息するのを辛抱強く待った。

「要するにね、あんたがあんまり自分を卑下しているから、自信を付けてあげたかったのよ」

紫のリリは相変わらずの居丈高で、腕組み。

嘘がバレたんだから、もうちよつと申し訳なさそうにしてもいいのに。

「しっかし、カノン、ホントにド天然な。あのワラジ虫の出来損ないが出た時点で、何か変だと気付かないか？ ああ、桑の実、渋っ」

目の下の隈のメイクを拭き取りながら、レンも悪びれなく言った。騙されて怖い思いをした当のカノンは、二人に叱られているみたいになさくなっていた。

何か違うくないか？

「でも、まあ、最後は予定外だったわ」

「え？」

「シナリオでは、あんたに妖怪は倒せなくて、あたしがカツコよく助けに入る事になっていたのよ。そしてあんたは、修行して力を付けておく事の大切さを思い知る、っと！」

「……………」

「悔しいわよ。自分にはその力があつた筈なのに、いざという時何も出来なかったら」

「……………」

リリはその所の所は真顔でゆっくり言った。過去にそんな経験をしたのかもしれない。

カノンも神妙に受け取った。

「長殿も加担してらしたの？」

「まさかー！」

リリは腕組みをほどこいて掌(てのひら)を上に向けた。

「父さまがそんなに器用なもんですか。あれは、そのマンマの反応よ」

「あれが、そのまんま……………」

「もしかして父さまが、父親でいる時まで立派な『蒼の長』だと思っていた？ まさか、娘に対してはホント、平々凡々よ」

「……うん」

その辺の平々凡々とはちよつと違う気がする……と、カノンは思ったが口にはしなかった。

この二人が、自分の為に骨折ってくれた事だけは真実。そこはちゃんと感謝しよう。

それを証拠に、確かにさつき土手を駆け降りた自分とは違う自分が、今土手を登っている。

カノンの持つて来たチャパティは草の上に落ちていたが、砂を払って三人で分けた。

かじりながら三日月の下、並んで歩く。

「カノン、怖い思いさせてごめん」

リリの自宅が見えた辺りで、今更ながら、レンが謝った。

「ううん、芝居でよかった」

「んん？」

「あらあ、あたしがレンにキッスされたつてのが、嘘でよかったつて？

ホントお子ちゃまね！ このあたしがキッスの一つや二つで動揺する訳……」

紫の前髪の下のピンクの唇が、不意を衝いて両肩を掴んだカノンに塞がれた。

「これでおあいこだー」

突き飛ばされてレンに受け止められながら、カノンはチャパティのカケラがくつついた舌先を引つ込めた。

「なあにが『お子ちゃま』だよ。自分の事だろ、口端に食べかすくっつけて」

「あ・あ・あんた！」

「明日から宜しくって長殿に伝えておいてくれ。行こう、レン！」

カノンは彼とは思えない不敵な笑みを浮かべて、レンの手を引いてたちまち駆け去った。

「何よおー」

リリは叫んだが、追い掛けはしなかった。

「何よ、まったく……ガキンチョなんだから、バカよ、バカ……」
バカと言いなながら、今日、二人の男の子が駆け抜けて行った唇に触れる。

彼らと過ごす日々の中、あやふやだった自分の居場所、どれだけ掘り下げて貰えたか。

西風の少年達も、やがてはリリを追い抜いて、先に大人になって行くんだろう。

大人になるって、複雑で読めなくなっていく事だ。透明な明け透けではなくなる事だ。

あの子らの真っ直ぐな少年時代のひとときに、自分がいられた事に感謝しよう。

子供の頃だけに見えていた、道端の花のように。

リリは顔を上げて、細い三日月の家路を歩いた。

く天人唐草・了く

おまけのおはなし

とうん とうん・I

——とうん——

——とうん——

鼻先も分からない真つ暗。

細い子供が空間を蹴って歩く波紋だけが、チラチラ波打ちながら遠ざかって消えていく。

子供の背中には片方だけの緋い羽根。

一間歩（いつかんぽ）跳ぶごとに、すこし開き、着地の時にひるがえって綴じる。

——とうん——

——とうん——

——きゅん

後ろから、槍で突くような光が伸びた。

あちらの砂の原に現れた怖いのを、またあのヒトがやつつけた。

もう大丈夫、あのヒトとっても強いから。

・・・っっ??

あれあれ、怖いのが消えない？

——横？

もう一匹いた、わわっ!!

強い手に引っ張られた。

それから眩しい光。

怖いのが、やつつけられて消えて行く。

あれ？ この手、誰の手？

えつと……

あ、大丈夫

これは大好きなヒトの手。

この世には三種類のヒトがいる。

大好きなヒト

好きなヒト

知らないヒト

「シンリイ、無事か？」

額飾りを揺らして長い髪のアーガが、羽根の子供を抱え、反対の腕で剣を撃ち降ろしていた。

そちら側でまっふたつになった大蠍（さそり）が、闇に吸い込まれて消えて行く。

「ナーガ様？」

青銀の髪のア妖精が、錫杖を杖がわりに、ゆっくりと空間を渡ってきた。

「討ち洩らしがあったようで、すみません」

「いや、たまたまです。僕が来なくても、シンリイなら逃げられたらろう」

「ああ、その子」

ソラ……今の名はリユーズだが……は、懐かしそうに子供を見た。同じ空間できちんと対峙するのは、三日月湖の森で初めて会った時以来だ。

「魔性退治の為に結界を張ると、たまに端っこを横切るんですよ。何か手伝ってくれているのかもかもしれません、僕には知り得ませんが」

「どうなんでしょう、私にもこの子の事は、とんと分からなくて。ああ、貴方は、砂漠に入り込もうとする魔を祓ってくれているのですね、ご苦労様です」

ナーガは眦（まなじり）を細めて、青銀の男性を見た。

男性は少し慌てた。

「あの、けてして西風の長様の浄化の力が劣る訳ではないのです。モエギ様が亡くなられたのと、あと色々重なって、付け狙われやすい状態といえますか……」

「分かっていますよ。ルウシエルはモエギ殿と同じで、高止まりの無い大器晩成だ。貴方もいてくれるし、砂漠の地はこれから安泰となつて行くでしょう」

「そう言つて頂けると嬉しいですよ」

二人の大人は立ち話を始め、羽根の子供は、離れてその辺をスキップし始めた。

・と、暗闇にもう一人誰かいる。

緊張して不安そうに突つ立っている、オレンジの瞳の少年。

子供と目が合つて、少年は所在なく会釈をした。

「えと……こんにちは？」

羽根の子供は後ずさつて身構える。

「カノン」

呼ばれて少年は、子供を気にしながらも、大人達の方へ走つて行った。

「予知の力が色濃くなつて来た……つて事ですか？」

リユーズが少年の額に手を当てた。

カノンはちよつとピリツとしたが、我慢してじつと立っている。

「蒼の里では予知能力は稀で、最後の予言者のカワセミ殿以来、出現は見られません。西風でもはつきりとした記録は無いようです。予知能力に関する教育方の資料があまり無いのです」

「海霧（かいむ）も、予言者の能力は巫女の家系だけで、それも女性にしか継承されません」

「何にしても、ノウハウはそちらの方がありそうですね」

カノンは、ナーガ長の隣で大人達の会話を聞きながら、内心後悔していた。

長殿に術の手ほどきを受けるようになってから、夜、やたらと夢を

見るようになった。

(予知夢の力が引き出されて来たのかもしれない……)

夢の中でそう意識した途端、恐怖で金縛りになる。ユウジーンの青黒い死体を見てしまったのがトラウマになっているのだ。一步遅れたらそれは現実になっていたのだと。

今度は何を見てしまうの？

どんな責任を背負い込むの？

嫌だ、もうあんなの見たくない！

朝起きると汗びっしょりで、眠る前より疲れている。

顔色も悪くてフラフラしているのを長殿に問われて、正直に打ち明けたら、こんな事になった。

『今のカノンに必要な者』と、指先の血で探索術を掛けたら、またこの結界に飛ばされて、このヒトに会ってしまったのだ。

現在の蒼の里には予知について指導出来る者がいない、とナーガ長は言っていた。

このままだと、リユーズさんに預けられるか、下手したらあのおつかないアイシャという巫女さんに委託されてしまう。

嫌だ、それだけは絶対に嫌だ。

リユーズが手を当てたまま口を開いた。

『打ち明けなきやよかつた』なんて思っちゃいけませんよ。ナーガ様が貴方のお師匠である事に変わりはありませんからね』

カノンはビツクリして後ずさった。そうだ、このヒトも軽々心を読んでしまうヒトだった。

「そ、そんな、師匠を選び好みするような不相应な事、僕……」

「安心なさい、僕は弟子を取るような立場にないし、巫女の家系も一子相伝だから」

「は……い」

カノンは俯(うつむ)いた。

だからこのヒトに会いたくなかったのだ。皆見透かされて、ナーガ長にバラされてしまう。

こんな予知みたいな厄介な能力のせい……

青銀の男性は、少年の目の高さには屈んだ。

「その能力について、自分で、どう思う？」

「えっと、正直、重いです。ユウジーンの役に立てたのは良かったけれど、この先予知があっても、間に合わない場合もあるんだらうなあ、とか色々考えちゃって。それに……」

「うん」

「誰の力でもどうしようもない、大きな災厄を視てしまったら……つて……」

「……………」

「考えないようにしようと思っても、考えちゃうんです。頭から離れないと、本当に視てしまうような気がして。怖いです、凄く凄く怖い」

後ろでナーガが目を見開いた。

彼の口から、これは初めて聞いたのだ。

青銀のリユーズは、視線を合わせたまま、手を伸ばして少年の肩に触れた。

カノンは反射で身を引きそうになったが、思い直してじっとした。

「昔、子供の頃かな、僕の最初に師事したお師匠さん……カワセミ殿が、同じ話をしてくれた。その羽根の子供のお父さんだよ」

カノンは、離れた所でぼてぼて歩き回っている子供を見た。

「あのヒトも、予知能力が目覚め始めた子供時代に、同じような理由で悩んでいた。そしたら当時の彼の師匠の大長様が、『辛いのなら、その能力は封印してもいい』と仰った。そんな力よりも、お前の身の方が大切だと」

「……………」

「僕は短い期間だけれど、大長様にも教えを受けた事がある。ああこのヒトなら言うだらうなあ、と思った。どう？ 君が望むなら、あのヒト達の弟子として、僕が封印してあげるよ。二度と悪夢を見なくて済むように」

「け、消せるんですか、この能力」

子供は今日一番のリアクションをしている。

リユーズは屈んだまま、少年の後ろのナーガを見上げた。長殿は黙って、優しい目で双方を見つめている。彼にだって勿論封印は出来るのだろうが、ここでリユーズに任せる事を選ばせたいのだろう。

「消滅は無理だ。そこに通じる道を断つ、と考えてくれればいい。箱に閉じ込めて鍵を掛けるイメージでもいいな」

「ん？」

「予知は発動するが、君の頭には伝わらない、夢も見ない、予知があった事すら分からない。発動分疲れる程度だ」

少年は考え込んでいる。

聡い子だな……

「あの、さっきの話の、カワセミさんは何と答えたんですか？ 大長さんに予知を封印してあげるって言われた時」

「カノン、他者にならわず、まず自分で考えなさい」

ナーガが思わず口出しして、眉根を寄せたりユーズに振り返られた。

すまないすまない、という感じで、ナーガは三步下がる。

と、背中が羽根の子供にぶつかった。

見上げて来るシンリイの目も、咎めているように見える。

(そうだな、今のはリユーズが言う台詞だったな)

カノンは神妙に、再び口を開いた。

「じゃあ、予知の力がまたユウジーンの危機を報せてくれても、僕は知る事が出来ないんだ」

「そうなるな」

リユーズは少年の肩に手を置いたまま、ゆっくりと喋る。

「でも君のせいじゃない。先の事なんて誰も知らなくて当たり前なんだから」

「そんな事ないです。予知って必要だから報せてくれるんですよ。それに耳を塞いで、見殺しにするって事じゃないですか。ユウジーンだけじゃない、リリやレンの危機を報せてくれるかもしれない、ルウシエルかもしれないのに」

言いながらカノンは、先日リリに言われた事を思い出した。

『自分には能力があると分かっていたのに使えるようにしていなかったら、後で酷く後悔する』

これだ、こういう事だったんだ。

「あの、やっぱり封印はいいです。大事なヒトに危険を知らせられるなら、そっちの方が大事だ。怖い夢なんか……やっぱり怖いけど……いい、そのうち慣れるから」

リユーズは、少年の肩に掛けた手に力が入りそうになるのをこらえた。

自分にこの子を称える資格はない。

「はい、分かりました。カワセミ殿と同じ答えでした。封印は無しにしましょう」

青銀の男性は、立ち上がって退いた。

ナーガが静かに、少年の後ろで頭を下げる。

それから交代するように、ナーガがカノンの前に回った。

「怖い時は独りで抱え込まず、すぐに周囲にぶちまけなさい。貴方には、貴方を支えたい友も、親も師も、ちゃんといてくれる」

「は、はい」

「そうして、どうしても耐え難いモノを視てしまったら、私か、このリユーズを頼りなさい。その先は我らが引き受けて、貴方の頭からは消し去ってあげます」

当たり前前に振られてリユーズは動揺したが、顔には出さないようにした。

『特定の記憶だけ探して抜き出して消し去る術』…… それ、結構難しくないですか？ 何で僕が使えるのを当たり前前みたいに思っているんですか？ 相変わらず基準が無茶苦茶なヒトだなあ。

(帰ったら練習しておかなくちゃ)

とうん とうん・II

「あつー！」

カノンが頓狂な声を上げた。

二人の大人が彼を見る。

「あの羽根の子、消えちゃいました。たった今までそこにいたのに」
確かに、ふよふよと三人の周囲を歩き回っていた子供が居なくなっている。

「シンリイ？ 結界から出て行ったのか…… いや、境目がそこまで迫っているな。遊んでいて落っこちたのか」

「ああ、本当だ、ナーガ様、そろそろ結界が切れます」

「ええっ、落ちちゃったんですか、あの子供、大丈夫なんですか？」

慌てるカノンに、二人の大人は振り向いてシレッツと言った。

「大丈夫ですよ、シンリイは」

辺りが白い霧に包まれて、ナーガが暇の言葉を述べた。

ではこれで、との別れ際、リユーズがフィツと身体を伸ばして、少年に何か耳打ちした。

「??」

怪訝な顔をする少年の視界から青銀の男性は遠ざかり、

次の間には、ナーガとカノンは出発したハイマツの丘に立っていた。
た。

「何て言われたんですか？」

チキチキ鳴く虫の声を背景に、ナーガ長にこやかに聞かれて、カノンは焦って口を空回りさせた。

「あわっ、いえっ、あの、『師匠は選んでも良いんだよ』って…… どういう意味なのでしょう？ ナーガ長に失礼じゃないですか？

僕、ナーガ長に指導して貰う以外考えていませんよっ。っていうか、もうあのヒトに会いたくありません、いえ、あのヒトが嫌いって訳じゃなくて……」

長殿はにこやかに少年を見ている

「どつちかというところ好きなんだけれど、今は、離れていたいんです……」

「承知しました。最初の頃と違って、沢山話してくれるようになって、とても嬉しいです」

「……………」

—さわさわ—

—さわわん—

青い空、高い梢、あお向けで動かないからだ。

イバラはトゲトゲ、はりつけ、動けない。

……う——んと……なんでこんなことに？

近付くあしおと。

バサバサ。

「……………」

葉っぱの間から、真っ黒な顔の男の子。

目の白い所だけ、雪みたいに真っ白。

「……………」

刃物をキンと抜いて、その子は枝を払いながら、トゲトゲの中へ踏み込んで来た。

—しらない子

でもこわくない

だってこの子のことは

きつと大好きになる——

「なに、絡まってんの？ ああ、動くな動くな。今外してやる。いてて」

黒い肌に黒い瞳の少年は、慣れた感じでイバラの中へ踏み込み、ナイフで枝を切つて、仰向けに倒れていた子供を救出した。

「生つ白いな、お前、どこから来たの。背中にそんなモン生やしてる癖に、こんな所に飛び込むなよ」

片羽根の子供は、ポケツとはなだ色の目を見開いている。

(見ない種族だな、言葉、通じないのかな?)

ここは三日月湖を擁する森。

草原地帯と乾燥地帯の境目。

湖畔に曲がりくねった大きな木があり、今、羽根の子供が危なっかしい手付きで枝に登り、黒い子供が支えてやっている。

小さい手が懸命に伸ばす先には、黄色い丸い実。

「まったく、その羽根、飛べないのかよ。まあ片方だけならしようがないか。ほれ、もうちよつと」

イバラに倒れていたこの子供は、どうやら頭上の黄色い実を探ろうとして落つこちたようなのだ。探つて来てやると言つても、どうしても自分で木に登りたがる。

「気持ち分からもない。俺もこの実は自分で採りたいからな。しかし今日俺が収穫に来なかつたら、お前何日ハリツケになつてたよ」

ようやく指が届いて手繰り寄せ、子供はパチンと実をもいだ。

「一個でいいのか?」

子供は枝に腰かけて、嬉しそうに黄色いゴツゴツした実を見つめている。

「それで満足出来るなんて燃費の良い奴だな。ああ、そのままかじるな。口が曲がるほど酸っぱいんだぞ」

黒い男の子は、軽々と高い枝に足を掛け、上の方の実を持参の袋に詰め始めた。パチンパチンと実がもがれ葉が揺れる度に、あたり一杯清々しい香りが満ちる。

「俺の母者が、この実が好きだったんだ。採って帰って見せると、嬉しそうに笑つてさ。毎年、実のなる季節が待ち遠しかった」

男の子の横で、羽根の子供は、枝に腰掛けて足をブラブラさせている。

言葉が通じているのかどうかも分からないが、男の子の声にちゃんと耳を傾けているのは分かる。

中途半端な相槌を打たれるよりも、何でかずっと安心出来て、男の子はついつい沢山の事を喋っていた。

「もういないんだけどさ…… 習慣で採りに来ちまう。いないからつて止めちまうと、本当にどんどん居なくなっていく気がしてさ」

——ザザ

風が吹いて、いきなり眼下の地面に、青銀の長い髪の男性が立っていた。

歩いて来る足音すらしなかった。

「誰だ!？」

男の子は緊張してナイフに手を掛けた。

男性は足が不自由そうで、身体が傾いて錫杖を杖がわりにしている位なのに、馬がいない。

こんな森中へどうやって来た？

「ああ、妖しい者じゃない。その羽根の子にちよつと聞きたい事があつて、追つて来ただけ」

子供は足のブラブラをやめて、男性の方を向いた。

「ねえシンリイ。ナーガ様は『今のあの子に必要な者』を求めて、僕の結界へ飛び込んで来たけれど、必要な者つてもしかして、君の事『も』じゃないの?」

子供はキヨンとして首を傾げる。

「それとも、『今のあの子』じゃなくて『未来のあの子』に、君が必要になるのかな?」

羽根を揺らして子供は立ち上がる。

そうして手の中の実に指をかけて、二つに割った。

濃厚な酸っぱい香りがあたりに満ちる。

その瑞々しい半分を、隣の男の子に差し出した。

「え？ えっと、俺、一杯採ったし。お前、それ一個しかないじゃん」
「受け取ってやってくれ」

地上の男性が、目を見開きながら言った。

男の子が戸惑いながら実を受け取ると、子供は羽根を広げて枝から跳んで、男性の前に降りた。

そうして残った半分を、青銀の髪に彼に差し出す。

「僕にも？」

男性を受け取ると、子供は片手を空に向けて上げた。

風を巻いて、白濁した草の馬が落っこちるように降りて来る。

「わっ！」

男の子は風圧に怯んだが……

「待って！」

馬に跨がった子供を呼び止め、袋の中の一番大きい実を掴み出して、彼に向かって投げた。

「俺、アデル！ 砂の民のアデル！」

投げて寄越された実を両手で受け止め、羽根の子供は、溢（こぼ）れるような笑顔を見せた。

「なあ、えっと、シンリイ！ また会える？」

つむじ風に巻かれる木の葉のように、馬は垂直に昇って行き、男の子が目に戻すと、地上の青銀の男性も消えていた。

何だったのか……

手元の半分の実が清しく香り、アデルはしばらく呆然と突っ立っていた。

「あの片羽根の子供は、何なんですか？ 蒼の妖精？ それとも精霊か何かですか？」

里へ帰る馬上、カノンの問いに、ナーガはゆっくりと答える。

「蒼の妖精だよ。僕の妹の子供」

「あ……」

「本能の赴くままに動いているのは、精霊に似ているかもしれないね。ただ、あの子の行動は一本筋が通っている。本人は意識していないんだろうけれど」

カノンは質問をやめて黙った。蒼の長の血筋にはあんな存在もいるのだなど、底知れなさを感じて、掘り下げてはいけない気がしたのだ。

「カノンもまた会えたらいいね」

「い、いや、僕なんか相手にされないでしょう？　今も興味なさ気だったし」

「今はまだ、繋ぐ手が見えなかったんだね」
「??」

ナーガは里へ向けて馬を降下させた。

シンリイの役割のひとつは、『繋ぐ』事だ。

ヒトとヒトとを繋ぐ事。

未来(さき)を見透し、必要になる縁(えにし)を、あらかじめ繋いで置く事だ。

予知能力どころじゃない。

(多分リ्यूズも、うっすら気付いているんだろう)

再び作った結界の帰り道を、リ्यूズは半分の蜜柑に頬を寄せながら海霧(かいむ)へ急ぐ。

「僕もまだ輪の中に居るんだ、嬉しいな」

くとうん　とうん・了く

くホライズン・完了く

T
o
b
e
n
e
x
t